

平成二十七年 度

博士論文（指導教員 藏中 しのぶ）

江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額

—和歌・書・絵の系統を中心に—

大東文化大学大学院外国語学研究所

日本語文化学専攻博士後期課程

（学籍番号一二二三三三二五二）

オレグ・プリミアニ

# 目次

序章	1
第一節 東照宮と三十六歌仙扁額の奉納	1
第二節 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本	2
第三節 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の奉掲形式	3
第四節 後水尾天皇と最初の東照宮三十六歌仙扁額	5
第五節 日光東照宮三十六歌仙扁額の絵師	8
第六節 本研究の構成	12
第一章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙和歌本文―日光本系統と久能山本系統を中心に―	15
第一節 はじめに	15
第二節 曼殊院良恕法親王宛ての後水尾天皇宸翰	16
第三節 『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』と日光本の歌仙和歌本文	18
第四節 久能山本の歌仙和歌本文の祖本	29
第五節 むすび―日光本系統と久能山本系統	41
第二章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の書―『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』と日光本を中心に―	45
第一節 はじめに	45
第二節 世尊寺流「草之形」と日光本の書の比較検討	46

第三節	異同の性格	85
第四節	むすび	90
第三章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵―装束を中心に―		
第一節	はじめに	94
第二節	束帯の男歌仙絵	95
第三節	衣冠の男歌仙絵	103
第四節	狩衣の男歌仙絵	105
第五節	直衣の男歌仙絵	111
第六節	むすび	112
第四章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵―構図を中心に―		
第一節	はじめに	116
第二節	身体・顔の向き的重要性と歌仙絵の構図	117
第三節	日光本における歌仙絵の構図の種類	121
第四節	水戸本の異同	125
第五節	仙波本の異同	127
第六節	素性と中務における異同	130
第七節	むすび	132
第五章 世良田東照宮三十六歌仙扁額の伝来―日光東照宮移管説の批判―		
第一節	はじめに	135

第二章	世尊寺流「草之形」・日光本と世良田本の歌仙和歌本文	136
第三節	世尊寺流「草之形」・日光本と世良田本の書	146
第四節	世良田本の歌仙絵	151
第五節	むすび	154
終章		157
附表 1	江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本歌仙和歌本文	159
附表 2	『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』の書	177
附表 3	日光東照宮三十六歌仙扁額の書	182
附表 4	世良田東照宮三十六歌仙扁額の書	187
附表 5	江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵	192

# 序章

## 第一節 東照宮と三十六歌仙扁額の奉納

東照宮は江戸幕府の開祖者、徳川家康が「東照大権現」という神号で祭祀されている神社である。現在は五〇〇以上の東照宮が全国に存在している。最古の東照宮は元和三年（一六一七）に造営された静岡県・久能山と栃木県・日光山の二社である。これらは家康の遺言によつて造営されたものである。

臨終の時、家康は本多正純、南光坊天海、金地院崇伝を召して、次の遺言を残した(1)。

### 【本文】

一 兩日以前本上州南光坊拙老御前へ被為召被仰置候ハ御体をハ久能へ納御葬礼をハ増上寺ニて申付御位牌をハ三川之大樹寺ニ立一周忌も過候て以後日光山に小き堂をたて勸請し候へ八州之鎮守に可被為成との御意候皆々涙をながし候

### 【訓み下し文】

一 兩日以前、本上州・南光坊・拙老、御前へ召され、仰せられ置き候ふは「御体をば久能へ納め、御葬礼をば増上寺にて申し付け、御位牌をば三川の大樹寺に立て、一周忌も過ぎ候ひて以後、日光山に小き堂をたて勸請し候へ。八州の鎮守に成らる可き」との御意候ふ。皆々、涙をながし候ふ。

この遺言どおり、家康の遺骨は元和二年に久能山に葬られて、翌三年（一六一七）日光山に移された。ここに、家康は東照大権現として神格化され、国家の安泰と江戸幕府の繁栄を司る神として祀られることになる。そして、日光東照宮と久能山東照宮が同年に創建され、後にこれら二社に倣つて、日本各地の東照宮が多数造営されることになるのである。

最初の東照宮として造営された日光と久能山の二社には、二代將軍徳川秀忠が寄進した三十六歌仙扁額が伝存する。いずれも、在位中の後水尾天皇の宸翰である。

また、家康の遺言と密接な関わりをもつ東照宮はもう一つある。これは、川越にある仙波東照宮である。仙波東照宮の創設は、家康の神格化を指導した天海によるものである。家康の遺言に従って、元和三年に、久能山から日光への遷座の途次、家康の遺骨は、川越小仙波町の喜多院の大堂で四日間留まり、その折、喜多院の住職を務めていた天海が、衆僧を集めて法要を行った。これを機に、天海は、寛永十年（一六三三）に大堂の南東に岡を築き、その上に東照宮の社殿を造営した。その後、寛永十五年（一六三八）の川越大火により、当社は喜多院の堂塔や門前とともに焼失するが、寛永十七年（一六四〇）、三代將軍徳川家光は川越城主堀田正盛に仙波東照宮の再建を命じ、同年に工事が竣工、六月十五日に遷座祭が行われた。この時、幕府の御用絵師を務めていた岩佐又兵衛（一五七八～一六五〇）作の三十六歌仙扁額が仙波東照宮に奉納され、今日に伝わる。

このような経緯から、家康の遺言と家康の神格化を指導した天海によって造営された東照宮には、三十六歌仙扁額の存在がとりわけ重要視されていることが言える。江戸初期、各地に造営された東照宮には、これら日光・久能山・仙波にならって、拝殿に欠かせない装飾品として三十六歌仙扁額が奉納されたのである。

## 第二節 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本

日光と久能山の例に倣って、各地の東照宮にも三十六歌仙扁額が奉納されたと推察される。家康没後から三代將軍徳川家光の時代にかけたの江戸初期には、日光本と久能山本の他に、さまざまな三十六歌仙扁額が奉納されたと考えられる。本研究では江戸初期の東照宮に着目し、日光東照宮・久能山東照宮を含めて七社に伝わる三十六歌仙扁額を研究対象とする。

日光東照宮と久能山東照宮の三十六歌仙扁額については、第四節と第五節にて述べる。本節では、この二社の他、三十六歌仙扁額が伝来する江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額五社について触れる。

第一には、茨城県・水戸東照宮がある。元和七年（一六二二）に家康の十一男で水戸藩の初代藩主徳川頼房によって創建された。

当時に奉納された三十六歌仙扁額（以下、水戸本と略称）は、歌仙和歌の筆者が青蓮院門跡尊純法親王であり、絵師が狩野浄賀である(2)。

第二には、徳川家の発祥の地と伝える群馬県・世良田東照宮がある。創設は寛永十八年（一六四一）である。三代將軍徳川家光の命により、日光東照宮から旧拝殿と宝塔などの社殿が世良田に移築されて世良田東照宮の一部となった。竣工は同二年（一六四四）である。竣工当時に奉納された三十六歌仙扁額（以下、世良田本と略称）は、狩野源四郎・狩野休白・狩野元俊の絵師三人の合作である。日光東照宮の『東照宮宝物誌』には、世良田本が本来日光東照宮に奉納されていたものであり、世良田東照宮の造営にあたって日光から移管されたと提唱されている(3)。しかし、裏面に施されている絵師三名の銘文によって、松木寛氏は寛永年間の新作であるとされ、日光からの移管説を批判された(4)。

第三には、川越・仙波東照宮がある。仙波東照宮の三十六歌仙扁額（以下、仙波本と略称）は寛永十七年（一六四〇）の制作である。歌仙和歌の筆者は伝・青蓮院門跡尊純法親王であり、絵師は岩佐又兵衛（一五七八～一六五〇）である。

第四には、石川県・金沢東照宮がある。加賀藩の四代藩主前田光高によって、寛永二〇年（一六四三）に金沢城北の丸に建立された。明治七年（一八七四）、神仏分離により、東照社は尾崎神社と改称され、明治十一年（一八七八）、金沢城が陸軍省用地となったため、現在地に移築された。ここに伝わる三十六歌仙扁額（以下、金沢本と略称）は、制作年代は明らかではなく、創建当初のものとされる。絵師は俵屋宗雪とされる(8)。

第五には、岡崎・滝山東照宮がある。正保元年（一六四四）、三代將軍徳川家光によって、家康が生まれた岡崎城の近くにある滝山寺の境内に創祀された滝山東照宮である。ここにも正保三年（一六四六）作の三十六歌仙扁額（以下、滝山本と略称）が伝来する。絵師は狩野探幽（一六〇二～一六七五）である(9)。

以上が、本研究の対象となる江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本である。

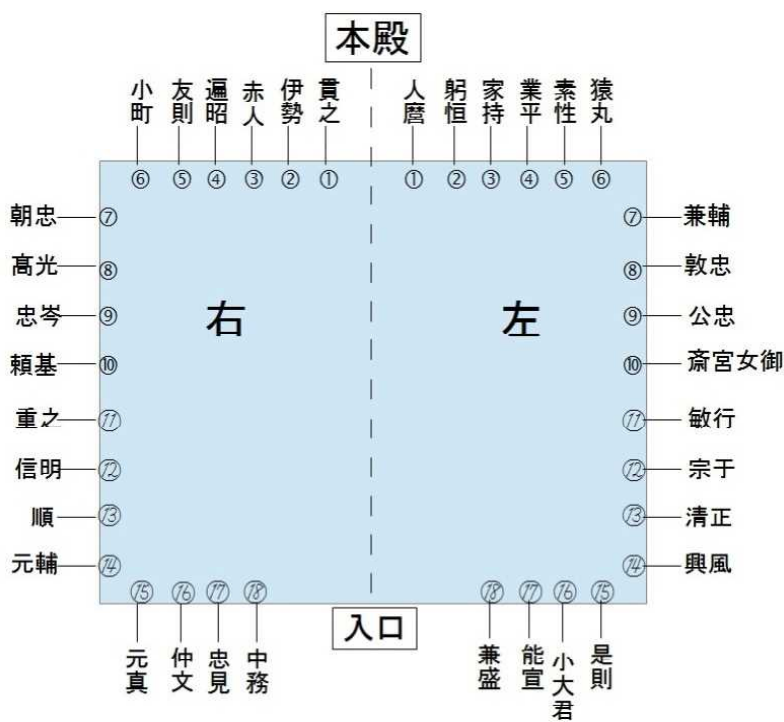
### 第三節 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の奉掲形式

江戸初期の東照宮に奉納された三十六歌仙扁額のすべては、歌仙ごとに扁額一面を設ける構成となっており、合計三十六面から

なる。各面は上下二段に構成される。上段は位置と和歌一首からなる詞書を記し、下段は歌仙絵が描かれる。なお、位置とともに「左」か「右」という記述もある。これは、扁額が奉掲される配列と対応するものであり、東照宮より先行する三十六歌仙扁額にもよく現れる記述である。

歌仙額は東照宮の拝殿に奉掲される。本殿に向かう壁の正中を挟んで、左右の押上に十八面ずつ歌仙扁額が掲げられ、その奉掲の様子は滝山本各面の裏書から窺われる。図1は江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の奉掲形式である。

図1・東照宮の拝殿での三十六歌仙扁額の奉掲形式



左右の位置は、拝殿を訪れる観覧者の観点からではなく、本殿に鎮守されるご神体の観点から認定するものである。このように、「左」の歌仙額が観覧者の右側、「右」の歌仙額は観覧者の左側に据えられることになるのである。なお、左右の一番となる歌仙額は本殿に最も近い位置を占め、その以降の歌仙額は段々本殿から遠ざかり、拝殿の入り口の近くに掲げられる。

このように、人麿から兼盛までの十八名が「左」の歌仙組、貫之から中務までの十八名が「右」の歌仙組となる。また、「左」「右」それぞれの十八名は、本殿に最も近い位置を占めるものより以降、「1」から「18」までの通し番号が付される。

本研究の各章には、位置関係を明確に示すため、歌仙名の上に「左1」から「左18」、また「右1」から「右18」までの通し番号を記すことにする。



#### 第四節 後水尾天皇と最初の東照宮三十六歌仙扁額

最初に奉納された東照宮の三十六歌仙扁額は、日光東照宮三十六歌仙扁額（以下、日光本と略称）と久能山東照宮三十六歌仙扁額（以下、久能山本と略称）である。これら二作は、いずれも二代將軍徳川秀忠の依頼によつて、後水尾天皇が歌仙和歌の書を揮毫した。

その主たる論拠となるのが、久能山東照宮に伝存する曼殊院良恕法親王宛ての後水尾天皇宸翰である。

この宸翰には、年代は記されていないが、日付は「十一月晦」とある。その内容は、二代將軍徳川秀忠から「駿州久能の哥仙」の揮毫を依頼された後水尾天皇が、歌仙和歌の書法をどの三十六歌仙に依拠すべきか、持明院流入木道の伝授を受けた曼殊院宮良恕法親王に相談したものである。

以上を踏まえた上で、この後水尾天皇宸翰について、『久能山叢書』第四編資料編下に掲出された原文を引用し、訓み下し文、現代語訳を試みることにする(10)。

#### 【本文】

先度者光臨候て本望至極抑今度駿州久能の哥仙可染織毫由自將軍被申候雖斟酌候難遁儀候左候へハ此以前日光之哥仙哥のちらし作者才先度借用申候内以世尊寺芳翰令模写候然者今度北野清水谷哥仙之躰を可瞻申存候可有如何候哉為御談合一筆令啓候委曲返報承度候也。

十一月晦

(宛て書) 「(封) 曼殊院宮へ」

#### 【訓み下し文】

先度は光臨候ひて本望至極。抑も今度、駿州久能の哥仙、織毫を染む可きの由、將軍より申され候。斟酌候ふと雖も、遁れ難き儀に候。左候へば、此れ以前、日光の哥仙、哥のちらし作者等、先度借用申し候内、世尊寺芳翰を以て模写せしめ候。然ら

ば今度、北野の清水谷哥仙の躰を贍し申す可く存じ候。如何有る可く候哉。御談合の為、一筆啓せしめ候。委曲返報承わり度く候なり。

十一月晦

(宛て書) 「(封) 曼殊院宮へ」

【現代語訳】

先日はお越しいただき、望みが叶って満足しております。そもそも、このたび、駿河・久能山の「三十六歌仙」を染筆するよ  
うにとの由、二代將軍家忠より申されておりますが、ご遠慮申し上げたいというものの、逃れがたいことではあります。そ  
こで、以前は、日光の「三十六歌仙」和歌のちらし作者等を、先に借用したもののうち、世尊寺芳翰を以て模写させました。  
そこで、今度は、「北野の清水谷歌仙」の体を贍し申したく存じます。いかがでしょうか。御相談のため、一筆さしあげまし  
た。詳しくはお返事をいただきたく存じます。

十一月晦

「(封) 曼殊院宮へ」

この宸翰の書かれた「十一月晦」、すなわち十一月三十日、後水尾天皇は、徳川秀忠の依頼により、久能山東照宮に奉納する三  
十六歌仙扁額の歌仙和歌の染筆を準備していた。

後水尾天皇は、それ以前に、日光の歌仙和歌を染筆していた。このときから、後水尾天皇は「曼殊院宮」、すなわち曼殊院門跡  
良恕法親王に、歌仙和歌の書法を何に依拠すべきか、相談していたのである。後水尾天皇の相談の相手である「曼殊院宮」とは、  
すなわち曼殊院門跡良恕法親王、持明院流の伝授を受けたものとして、入木道の権威であった。

このように、後水尾天皇は良恕法親王に相談しつつ、日光本・久能山本の順に、最古の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙和歌を染筆  
したのである。

右の宸翰には、日光本と久能山本の制作年代にかかわる記述は見られない。また、宸翰の日付にも、年が記されていない。

日光本と久能山本の制作年代を問題にしたのは、山作良之の研究がある(11)。山作氏は、次の史料を基に(12)、日光本と久能山本が元和三年(一六一七)に制作され、奉納されたと指摘された。

【本文】

久能哥仙勅筆被成御染義別而大慶之至候此旨可然様可有奏達候謹言

十二月十日 秀忠(花押)

廣橋大納言殿

三条大納言殿

【訓み下し文】

久能の哥仙、勅筆の御染め成られ候ふ義、別して大慶の至り候ふ。此の旨、然るべき様、奏達にある可く候ふ。謹言。

十二月十日 秀忠(花押)

廣橋大納言殿

三条大納言殿

これは、二代將軍秀忠が書いた礼状である。宛先は宮中であり、内容は久能山本に後水尾天皇の染筆をいただいたことに対する謝辞である。この礼状にも、年代は明確に記されていない。しかし、宛名にあげられた「廣橋大納言殿」「三条大納言殿」という二名の官職を基に、山作氏は次のように論じられた(13)。

礼状の宛名にある廣橋大納言とは廣橋兼勝、三条大納言とは三条西実條のことで、共に武家伝奏である。両名の表記が「廣橋大納言」と「三条大納言殿」になっていることから、この史料の年代が推定できる。『国史大系 公卿補任』(吉川弘文館)によれば、廣橋兼勝と三条西実條が共に「大納言」(実は「權大納言」)であった期間は、三条西実條が權大納言に就任した慶長

十八年（一六一三）一月十一日から廣橋兼勝が内大臣に昇格した元和四年（一六一八）十一月十四日の間である。したがって、この礼状の下限は元和四年十一月となるが、日付が十二月十日になっているから元和四年ではありえない。その前年、すなわち元和三年十二月十日の礼状であると考えてよいであろう。

山作氏の説にしたがえば、元和三年十二月までに久能山本が奉納されたことになる。

前掲の後水尾天皇の宸翰によれば、後水尾天皇は日光本・久能山本の順に、ふたつの東照宮三十六歌仙扁額の歌仙和歌を染筆した。したがって、二代將軍秀忠は、日光本と久能山本のふたつの三十六歌仙扁額を、同じ元和三年（一六一七）に寄進したとされたのである。

## 第五節 日光東照宮三十六歌仙扁額の絵師

日光本の歌仙絵の絵師に関しては、日光東照宮に伝わる『宝物志』に次のようにある(14)。

三十六歌仙扁額（第十七図参照）

三十六面

紙本彩画は土佐將監光起の筆、書は後水尾上皇の御染筆と伝えられて居ります。

絵師は土佐光起の作とされるが、山作氏は、制作年である元和三年（一六一七）には光起はまだ一歳で、歌仙絵の絵師に比定することはできないとし、次の二点から、歌仙絵絵師が、当時、禁裏絵所預を勤めていた狩野孝信の作とされた(15)。

第一に、九州大学付属図書館所蔵『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』（以下、世尊寺流「草之形」と略称）の奥書である(16)。これは江戸時代の写本で、三冊から成る『世尊寺家三十六人歌合散形』の一冊である。巻末にこれを書写した天明二年（一七八二）の森伊祥の次の奥書があり、日光東照宮の歌仙絵が狩野孝信の作であるという公遵法親王の証言が見られる。

【本文】

随宜楽院宮准三宮公遵大王は中院御門第二皇子享保七年に降誕ましまして東叡山をしろしめされ御退山の後御上京ましまして若宮御得度御戒律などの故か安永五季の春御下向の砌後桃園帝より入木道灌頂御伝受あらせられ廣橋儀同より彼是きかせられしかども思食にはあらましの由につき天明元年五月廿日鶴川筑前守奉りにて仰下されよく廿一日参殿して辻隠岐守をして申上るときに御座の間へ召せられ御児まで御退け被遊仰に曰入木道御皆伝あそばすとまうせどもあらましの御事故額法よりくはしく申上べきの御意なり爰に至て可秘にあらざれば委細言上し奉其後神前歌仙の形真行の躰を可指上むねに付則献し奉引こもりし中日光山の歌仙の書躰同画像はうつさせ遊ばし同九月八日尹祥をめし給ひ仰曰汝先達而献せしよりは悉書法かはれり是は御讚は後水尾帝宸筆画は孝信也と仰らるる尹祥拝見せしに此草の形なり右の趣を言上し又禁裏親王の遊ばし物の事も言上し則歌仙伝受の一卷も奉同年鶴岡八幡宮<sub>キ</sub>宮御修造ありし砌歌仙の損し五枚御直しありし時寛文の時は上の宮は良愨親王下の宮は尊純親王元文の時は公寛親王遊ばさるその御由緒にて天明には公延親王へ可被遊旨也しかるを准三宮其中を遊ばされ度思召仰入れ上下の宮の人丸を遊ばさる皆先蹤を追て遊ばし給ふ事也其砌参殿して拝見を仰付られし上下の宮ともに此人丸の書躰故亦此たひも如此に遊ばされし上意のうへ入木道くはしく申上御満足の上意おなじく行成卿より代々をへ持明院家伝来誠不朽に思食とかへす々の上意也あまりのたふとさにこの伝書に片言を書付をはりぬ

天明五年弥生上旬再写之

源尹祥

【訓み下し文】

随宜楽院准三宮宮公遵大王は、中院御門第二皇子、享保七年に降誕ましまして、東叡山をしろしめされ、御退山の後、御上京ましまして、若宮御得度・御戒律などの故か、安永五年の春、御下向の砌、後桃園帝より入木道灌頂御伝受あらせられ、廣橋儀同より、彼れ是れきかせられしかども、思し食しにはあらましの由につき、天明元年五月廿日、鶴川筑前守奉りにて、仰せ下され、よく廿一日、参殿して辻隠岐守をして申し上ぐるときに、御座の間へ召せられ、御児まで御退け遊ばされ、仰せに曰はく、「入木道御皆伝あそばすと申せども、あらましの御事故、額法よりくはしく申し上ぐべきの御意なり」。爰に至りて、秘す

可きにあらざれば、委細言上し奉り、其の後、神前歌仙の形『真』・『行』の躰を指し上ぐ可きむねに付き、則ち献じ奉り、引きこもりし中、日光山の歌仙の書躰、同画像はうつさせ遊ばし、同九月八日、尹祥をめし給ひ、仰せ曰はく、「汝、先達而て献ぜしよりは、悉く書法かはれり。是は御讚は後水尾帝宸筆、画は孝信也」と仰らる。尹祥、拝見せしに、此の草の形なり。右の趣を言上し、又、禁裏親王の遊ばし物の事も言上し、則ち、歌仙伝受の一卷も奉る。同年、鶴岡八幡宮「上下」宮御修造ありし砌、歌仙の損し五枚御直しありし時、寛文の時は、上の宮は良愨親王、下の宮は尊純親王、元文の時は公寛親王遊ばさる。その御由緒にて、天明には公延親王へ遊ばさる可き旨なり。しかるを、准三宮、其の中を遊ばされ度く思し召し仰せ入られ、上下の宮の人丸を遊ばさる。皆、先蹤を追て遊ばし給ふ事也。其の砌、参殿して拝見を仰せ付けられし。「上下」の宮とも此の人丸の書躰故、亦、此のたびも此くの如くに遊ばされし。上意のうへ、入木道くはしく申し上げ、御満足の上意、「おなじく行成卿より代々をへ、持明院家伝来、誠に不朽に思し食す」と、かへすがへすの上意なり。あまりの尊さに、この伝書に片言を書き付けをはりぬ。

天明五年弥生上旬、再び之を写す

源尹祥

この奥書には、「日光山の歌仙の書躰同画像」を写した随宜楽院宮准三宮公遵大王が、九月八日に源尹祥を召して「日光山の歌仙」が「御讚は後水尾天皇宸翰、画は孝信也」と仰せられたことが記されている。

同九月八日尹祥をめし給ひ、仰せられて曰く『汝、先達して献ぜしよりは悉く書法変われり。是れは、御讚は後水尾帝宸翰、画は孝信也』と仰らる。尹祥、拝見せしに、是れ草の形なり。

第二に、次の京都所司代板倉勝重の北野天満宮宛ての書状である(17)。

【本文】

一筆申入候其許社内御座候哥仙ハ勅筆紙被遊候由及承候江戸東照大権現御宮立御座候哥仙之儀勅筆被遊候就其御宮御座候哥仙我等覺不申候間紙被遊はりつけふちを打有之様昨日伝奏衆御物語様子具御報可承候其通狩野右近所へ可申越候恐々謹言

板伊賀守

勝重（花押）

二月廿五日

徳松院

松梅院

御宿所

【訓み下し文】

一筆申し入れ候ふ。そこもとの社内に御座候ふ哥仙は、勅筆紙遊ばされ候ふ由、と承り及び候ふ。江戸、東照大権現御宮立て御座候ふ。哥仙の儀、勅筆遊ばされ候ふ。其れに就きて、其の御宮に御座候ふ哥仙、我等、覺へ申さざりし候ふ間、紙にはりつけ遊ばされ、ふちを打つ。之ある様、昨日、伝奏衆、御物語る様子、具さにお報せ承る可く候ふ。其の通り、狩野右近の所へ申し越す可く候ふ。恐々謹言。

板倉伊賀守

勝重（花押）

二月廿五日

徳松院

松梅院

御宿所

これについて、山作氏は「東照大権現御宮立て」が元和四年（一六一八）三月に江戸城内に建立された紅葉山東照社を指すのかどうか判然としないながらも、この史料から、元和初期における幕府と狩野孝信との関係が伺えることが重要であるとし、日光東照宮の歌仙画を狩野孝信が描いている可能性はより高くなるのではないかと述べられた。

## 第六節 本研究の構成

三十六歌仙扁額は、三十六首の歌仙和歌本文、歌仙和歌の書、及び歌仙絵の三つの要素を備えている総合芸術である。

本研究の目的は、江戸初期に制作・奉納された東照宮三十六歌仙扁額を取り上げ、歌仙和歌本文、歌仙和歌の書体、及び歌仙絵の様式を検討することである。

第一章では、歌仙和歌の本文を調査し、「日光本系統」と「久能山本系統」の二系統とそれぞれの祖本を定位する。そして、仙波本・世良田本・金沢本それぞれの歌仙和歌の本文の独自性について述べる。

第二章では、日光本の歌仙和歌の書体を視覚的に分析し、その典型とされる世尊寺流「草之形」との関係性について考察を加える。その結果、山作氏が指摘されたとおり、日光本の書体の典型が世尊寺流「草之形」に類するものであると考えられ、また、その間に見られる文字の位置による異同が両方の書体の性格を根本的に異にするものではないと判明した。

第三章では、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵を「女歌仙絵」「僧侶歌仙絵」「男歌仙絵」に分類した上、装束を基にその様式を調査する。その結果、「女歌仙絵」と「僧侶歌仙絵」に装束の異同が見られなかったが、「男歌仙絵」の装束に関して、仙波本と世良田本に異同が確認された。それにもかかわらず、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵の様式は高度な類似性を見せていることを述べる。また、仙波本と世良田本に見られた異同の性格について考察を加える。

第四章では、身体と顔の向きを基準に江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵の構図を調査する。拝殿の壁に掲げられる奉納品として、三十六歌仙扁額の歌仙絵は、身体と顔の向きによる構図が特に重視されたことを述べる。その結果、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵の構図の類似性が一層明らかとなったことに触れる。一方、仙波本と水戸本に見られる構図の異



同も確認され、その異同の性格について考察を加える。

第五章では、世良田本が日光東照宮から移管されたものではないことを検証する。もし、世良田本は寛永大造替以前に日光東照宮に奉納されていたのであれば、第一章と第二章で検証したように、後水尾天皇の宸翰となるはずであり、その歌仙和歌の本文と散らし書きの書体が世尊寺流「草之形」と一致するはずである。しかし、世良田本の歌仙和歌本文と書体は、世尊寺流「草之形」より異なる意匠を凝らしていることが明らかとなった。また、歌仙絵の様式においても、重要な相違が見られることを重視し、はたして世良田本が日光東照宮に奉納されていたものである可能性が極めて低いと結論付けた。

注

- (1) 『本光国師日記』(一九七三年、続群書類従完成会)
- (2) 山作良之「日光東照宮蔵三十六歌仙扁額製作の経緯」(『大日光』第七十九号、二〇〇九年六月、日光東照宮)
- (3) 松木寛「世良田東照宮の三十六歌仙絵額」(『Museum』第二九四号、一九八四年)
- (4) 斎藤栗堂「岩佐又兵衛」(『国華』第一〇四号、一八九八年五月)
- (5) (4) 前掲論文。
- (6) 藤浦正行「作品解説」(『MOA美術館編岩佐又兵衛―歌仙絵』(一九八四年六月、株式会社エムオーエー商事))
- (7) (6) 前掲論文。
- (8) 金沢市立玉川図書館近世資料館編『加賀の東照宮 尾崎神社展』(二〇〇八年十一月、金沢市立玉川図書館近世資料館)
- (9) 岡崎市美術博物館編『松平・徳川氏の神社 ―岡崎に残る遺産と歴史』(二〇〇〇年四月、岡崎市美術博物館)
- (10) 『久能山叢書 第四編 資料編下』(一九七六年、久能山東照宮社務所発行)
- (11) (2) 前掲論文。
- (12) 『寛永の華 後水尾帝と東福門院和子』(一九九六年、社団法人霞会館発行)
- (13) (2) 前掲論文。

- (14) 『東照宮宝物志』（一九二七年、東照宮社務所発行）
- (15) (2) 前掲論文。
- (16) 国文学研究資料館が所蔵する同書のマイクロフィルムを使用した。
- (17) 『北野天満宮史料 古文書』（一九七八年、北野天満宮）

## 第一章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙和歌本文系統

### ―日光本系統と久能山本系統を中心に―

#### 第一節 はじめに

江戸初期に制作された東照宮扁三十六歌仙扁額には、次の七本がある。これらは、元和三年（一六一七）から正保三年（一六四六）にかけての二十九年間に成立したものである（1）。

- (1) 元和三年（一六一七） 栃木・日光東照宮（以下、「日光本」と略称）
- (2) 元和三年（一六一七） 静岡・久能山東照宮（以下、「久能山本」と略称）
- (3) 元和七年（一六二一） 茨城・水戸東照宮（以下、「水戸本」と略称）
- (4) 寛永十七年（一六四〇） 埼玉・仙波東照宮（以下、「仙波本」と略称）
- (5) 寛永二十一年（一六四四） 群馬・世良田東照宮（以下、「世良田本」と略称）
- (6) 寛永二〇年（一六四三） 石川・尾崎神社（以下、「金沢本」と略称）
- (7) 正保三年（一六四六） 愛知・滝山東照宮（以下、「滝山本」と略称）

これら東照宮三十六歌仙扁額は、ふたつに分類することができる。

第一に、元和年間、二代將軍徳川秀忠の時代に制作された(1)(2)(3)である。このうち、秀忠みずからが奉納したものは、(1)日光本と(2)久能山本の二本である。

第二に、寛永年間から正保三年にかけて、三代將軍家光の代に制作された(4)(5)(6)(7)である。このうち、家光みずからが奉納したものは、一六四〇年代制作の(4)仙波本と(5)世良田本の二本である。

本稿は、これら江戸初期に成立した東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙和歌本文を精査し、元和三年（一六一七）、最初に制作されたふたつの東照宮扁三十六歌仙扁額、日光本と久能山本の歌仙和歌本文を基準としてふたつの系統を立て、歌仙和歌本文の性格を明らかにすることを目的とする。

## 第二節 曼殊院良恕法親王宛ての後水尾天皇宸翰

日光東照宮と久能山東照宮に伝来する三十六歌仙扁額は、いずれも二代將軍徳川秀忠の依頼によって、後水尾天皇が揮毫したものとされる。

日光と久能山、ふたつの東照宮は「東照大権現」という神号で、初代將軍徳川家康を祭祀するために造営された最初の東照宮である。その拝殿に、天皇みずから和歌を染筆した三十六歌仙扁額を奉掲することは、東照大権現の権威を高めることを意味する。

山作良之氏が紹介された、次の久能山東照宮蔵・曼殊院良恕法親王宛ての後水尾天皇宸翰が、その主たる論拠である(2)。

この宸翰には、年代は記されていないが、日付は「十一月晦」とある。その内容は、二代將軍徳川秀忠から「駿州久能の哥仙」の揮毫を依頼された後水尾天皇が、どの三十六歌仙に依拠すべきかを、持明院流入木道の伝授を受けた曼殊院宮良恕法親王に相談したものである。文意から、おそらく、後水尾天皇が日光東照宮三十六歌仙扁額の染筆を終えたのち、そう時期を隔てることなく、久能山東照宮三十六歌仙扁額の歌仙和歌を揮毫する以前、元和三年（一六一七）の「十一月晦」をさすものと推定される。

そこで、次に、後水尾天皇宸翰について、『久能山叢書 第四編 資料編下』に掲出された原文を引用し、訓み下し文、現代語訳を試みることにする(3)。

### 【原文】

先度者光臨候て本望至極抑今度駿州久能の哥仙可染織毫由自將軍被申候雖斟酌候難遁儀候左候へハ此以前日光之哥仙哥のちらし作者才先度借用申候内以世尊寺芳翰令模写候然者今度北野清水谷哥仙之躰を可騰申存候可有如何候哉為御談合一筆令啓候委

曲返報承度候也

十一月晦

(宛て書)

「(封) 曼殊院宮へ」

【訓み下し文】

先度は光臨候ひて本望至極。抑も今度、駿州久能の哥仙、緋毫を染む可きの由、將軍より申され候。斟酌候ふと雖も、遁れ難き儀に候。左候へば、此れ以前、日光の哥仙哥のちらし作者等、先度借用申し候内、世尊寺芳翰を以て模写せしめ候。然らば、今度、北野の清水谷哥仙の躰を贍し申す可く存じ候。如何有る可く候哉。御談合の為、一筆啓せしめ候。委曲返報承わり度く候なり。

十一月晦

(宛て書) 「(封) 曼殊院宮へ」

【現代語訳】

先日はお越しいただき、望みが叶って満足しております。そもそも、このたび、駿河・久能山の「三十六歌仙」を染筆するよ  
うにとの由、二代將軍家忠より申されておりますが、ご遠慮申し上げますが、逃れがたいことではあります。そ  
こで、以前は、日光の「三十六歌仙」和歌のちらし書き等を、先に借用したもののうち、世尊寺芳翰を以て模写させました。  
そこで、今度は、「北野の清水谷歌仙」の体を贍し申したく存じます。いかがでしょうか。御相談のため、一筆さしあげまし  
た。詳しくはお返事をいただきたく存じます。

十一月晦

(宛て書) 「(封) 曼殊院宮へ」

二代將軍秀忠は、日光本と久能山本の歌仙和歌の染筆を後水尾天皇に依頼した。

徳川幕府は慶長二十年（一六一五）「禁中並公家諸法度」をはじめとして、天皇や公家への干渉を深めてきた。後水尾天皇は、徳川幕府に対して、内心、良い感情は持っていなかったものと思われるが、二代將軍秀忠からの直々の依頼を受け、日光本と久能山本、それぞれの三十六歌仙扁額の歌仙和歌を染筆する。

先に、徳川秀忠から日光本歌仙和歌染筆の依頼を受けた後水尾天皇は、「日光の哥仙哥のちらし書き等」には「世尊寺芳翰」を「模写せしめ」たが、このたび、新たに依頼された久能山本の揮毫については、異なる書法を用いることを検討する。それで、良恕法親王から借用していたさまざま書道の手本のなかから、「北野の清水谷歌仙の躰」の書法を「贍し」たいと考え、このことを良恕法親王に相談した。

後水尾天皇は「日光の哥仙哥のちらし書き者等」には「世尊寺芳翰」を「模写せしめ」た。久能山本には、「北野の清水谷歌仙の躰」を「贍し」た。

この「模写」「贍し」とは、実際には、どのような行為を意味するのだろうか。書の書き様を写しただけなのか。それとも、歌仙和歌本文まで継承しているのだろうか。

### 第三節 『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』と日光本の歌仙和歌本文

まず、日光本の歌仙和歌本文である。

後水尾天皇は、日光本の歌仙和歌染筆に際して「世尊寺芳翰を以て模写せしめ候」と述べている。これが、日光本の祖本が「世尊寺芳翰」であったということを示す論拠である。日光本が依拠した三十六歌仙は、「世尊寺芳翰」であった。

この「世尊寺芳翰」とは、何であったのか。

「世尊寺」とは入木道の世尊寺流、世尊寺を創建した藤原行成に始まり、平安時代には藤原伊房・定実・定信などが出、鎌倉時代に経朝によって確立されて室町時代まで隆盛した入木道の流派をさす。

持明院流の入木道の伝授を受けていた曼殊院宮良恕法親王のもとには、こうした入木道の文献が多数収集されており、今日まで曼殊院に伝わっている(4)。良恕法親王から、後水尾天皇が、こうした入木道の資料として、いくつかの三十六歌仙を借り受けていたことは、次の宸翰の文から知られる。

此れ、以前、日光の哥仙哥のちらし作者等、先度借用申し候内、

「先度借用申し候内」、つまり、良恕法親王から借りた資料のうちのひとつに、「世尊寺芳翰」があつたのである。

山作氏は、この「世尊寺芳翰」が世尊寺流の書法を伝えたものと推定し、江戸中期、幕府の書道師範を務めた森尹祥（一七四〇〜九八）の撰になる「入木道伝書目録」一二五カ条におよぶ伝授の目録に続いて記載された「世尊寺代々伝書」四七部に注目された(5)。このうち、

第三十八番「神前歌仙真」

第三十九番「同行」

第四十番「同草」

が、神前に掲げる歌仙額の世尊寺流の書式を著したものと推定し、これに該当するものとして、同じく森尹祥の書写になる九州大学附属図書館所蔵、

① 『世尊寺家三十六人歌合真之形散形』（「真之形」）

② 『世尊寺家三十六人歌合行之形散形』（「行之形」）

③ 『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』（「草之形」）

を指摘された(6)。

『世尊寺家三十六人歌合』は、「真之形散形」「行之形散形」「真之形散形」という三つの部立で構成され、それぞれに神前に奉納する歌仙和歌三十六首を提示する。この「真之形散形」「行之形散形」「草之形散形」に採用された歌仙和歌本文は、それぞれに異なっている。

新藤協三氏は、③の奥書を解説し、この資料と日光本の関係性を想定された(7)。もし、後水尾天皇が書いた日光本の歌仙和歌本文が、『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』と一致するのであれば、世尊寺流「草之形」が日光本の祖本に類するものであることが証明されよう。

夙に、山作氏は、日光本と『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』の歌仙和歌本文が同じであることを次のように述べられた。

更に見比べていくと、選ばれた和歌も同じである。

この指摘を踏まえて、その本文状況を再確認することにする。

表1は、『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』(以下、世尊寺流「草之形」と略称)と日光本、さらに、この二本と同じ歌仙和歌をもつ水戸本の本文を併せて掲げたものである(8)。なお、世尊寺流「草之形」を基準とし、本文の文字遣いが一文字でも異なる歌仙和歌には×印を付した。

表1・世尊寺流「草之形」と日光本・水戸本の歌仙和歌本文

左1人麿

世尊寺…ほのくくと	あかしの浦の	あさ霧に	しまかくれ行	舟をしそおもふ
×日光本…ほのくくと	あかしのうらの	あさ霧に	しま□くれ行	舟をしそおもふ
×水戸本…ほのくくと	あかしの浦の	あさ霧に	島隠行	舟をしそおもふ



左2 躬恒

世尊寺…すみよしの 松を秋かせ ふくからに こゑうちそふる おきつしらなみ  
 日光本…すみよしの 松を秋かせ ふくからに こゑうちそふる おきつしらなみ  
 水戸本…すみよしの 松を秋かせ ふくからに □□□□□□□□ □□□□□□□□

左3 家持

世尊寺…まきもくの ひはらもいまた くもらねは こ松かはらに あは雪そふる  
 ×日光本…まきもくの ひはらもいまた くもらねは 小松かはらに あは雪そふる  
 ×水戸本…まきもくの ひはらもいまた くもらねは こまつかはらに あは雪そふる

左4 業平

世尊寺…月やあらぬ 春やむかしの はるならぬ わか身ひとつは もとのみにして  
 ×日光本…月やあらぬ 春やむかしの はるならぬ 我身ひとつは もとのみにして  
 ×水戸本…月やあらぬ 春やむかしの はるならぬ 我身ひとつは もとの身にして

左5 素性

世尊寺…をとにのみ きくのしら露 よるはおきて ひるはおもひに あへすけぬへし  
 日光本…をとにのみ きくのしら露 よるはをきて ひるはおもひに あへすけぬへし  
 ×水戸本…をとにのみ きくのしら露 よるはをきて ひるは思ひに あへすけぬへし

左6 猿丸

世尊寺…おく山に もみちふみわけ なくしかの こゑきく時ぞ 秋はかなしき



左11敏行

世尊寺…秋はきの 花さきにけり たかさこの おのへの鹿は いまやなくらん  
 ×日光本…秋はきの 花さきにけり たかさこの をのへの鹿は 今やなくらん  
 ×水戸本…秋はきの 花咲にけり たかさこの 尾上の鹿は 今や鳴らん

左12宗于

世尊寺…やまさとは 冬そさひしさ まさりける 人めも草も かれぬとおもへは  
 日光本…やまさとは 冬そさひしさ まさりける 人めも草も かれぬとおもへは  
 ×水戸本…山さとは 冬そさひしさ まさりける 人めもくさも かれぬとおもへは

左13清正

世尊寺…天津かせ ふけの浦に ゐるたつの なたか雲井に かへらさるへき  
 日光本…天津かせ ふけの浦に ゐるたつの なたか雲井に かへらさるへき  
 水戸本…□□□□ ふけの浦に □□たつの なたか雲井に かへらさるへき

左14興風

世尊寺…ちきりけむ こゝろそつらき 棚機の としにひとたひ あふはあふかは  
 ×日光本…ちきりけむ こゝろそつらき 織女の としにひとたひ あふはあふかは  
 ×水戸本…ちきりけむ こゝろそつらき 七夕の としにひとたひ あふ□あふかは

左15是則

世尊寺…みよしの、 やまのしら雪 つもるらし ふるさとさむく なりまさるなり

日光本…みよしの、やまのしら雪 つもるらし ふるさとさむく なりまさるなり  
×水戸本…みよしの、山のしら雪 つもるらし ふるさとさむく なりまさる也

左16小大君

世尊寺…おほる河 そまやまかせの さむければ たついはなみを ゆきかとそ見る  
×日光本…おほる河 そま山かせの さむければ たついはなみを 雪かとそ見る  
×水戸本…大井河 そまやま風の さむければ たつ岩なみを 雪かとそ見る

左17能宣

世尊寺…みかきもり ぬしのたく火の よるはもえ ひるはきえつ、ものをこそおもへ  
×日光本…みかきもり ぬしかたく火の よるはもえ ひるはきえつ、ものをこそ思へ  
×水戸本…御牆守 ぬしのたくひの よるはもえ ひるはきえつ、物をこそおもへ

左18兼盛

世尊寺…しのふれと いろにいてにけり わかこひは ものやおもふと 人のとふまで  
×日光本…しのふれと いろにいてにけり 我こひは 物やおもふと 人のとふまで  
×水戸本…しのふれと 色に出にけり わか恋は ものやおもふと 人のとふまで

右1貫之

世尊寺…むすふての しづくに、こる 山の井の あかても人に わかれぬるかな  
日光本…むすふ手の しづくに、こる 山の井の あかても人に わかれぬるかな  
水戸本…むすふての しづくに、こる 山の井の あかても人に わかれぬるかな

右2伊勢

世尊寺…三輪のやま いかにまちみむ としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
×日光本…三輪のやま いか、まちみむ としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
×水戸本…みわのやま いか□まちみむ としふとも たつぬる人も あらしと思へは

右3赤人

世尊寺…わかのうらに しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつなきわたる  
×日光本…わかのうらに 塩みちくれは かたをなみ あしへをさして たつなきわたる  
×水戸本…若浦に しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつ鳴渡

右4遍昭

世尊寺…いそのかみ ふるの山邊の さくらはな うへけんときを しる人そなき  
×日光本…いそのかみ 布留の山邊の さくらはな うへけんときを しる人そなき  
水戸本…いそのかみ ふるの山邊の さくらはな うへけんときを しる人そなき

右5友則

世尊寺…ゆふされは ほたるよりけに もゆれとも ひかり見ねはや 人のつれなき  
×日光本…夕されは ほたるよりけに もゆれとも ひかりみねはや 人のつれなき  
×水戸本…ゆふされは ほたるよりけに もゆれとも ひかりみねはや 人のつれなき

右6小町

世尊寺…わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなんとそおもふ

×日光本…わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそ思ふ  
×水戸本…わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそおもふ

右7 朝忠

世尊寺…萬世の はしめとけふを いのりをきて いまゆくすゑの 神そかそへん  
×日光本…万代の はしめとけふを いのりをき□ 今ゆくすゑ□ 神そかそへん  
×水戸本…よろつ世の はしめとけふを いのりをきて いま行すゑは 神そかそへん

右8 高光

世尊寺…春すきて ちりはてにける 梅のはな た、香はかりそ 枝にのこれる  
×日光本…はるすきて ちりはてにける 梅のはな た、香はかりそ 枝にのこれる  
×水戸本…春すきて ちりはてにける むめのはな た、香はかりそ えたにのこれる

右9 忠岑

世尊寺…春たつと いふはかりにや みよしの、 山もかすみて けさは見ゆらむ  
日光本…春たつと いふはかりにや みよしの、 山もかすみて けさは見ゆらむ  
×水戸本…春たつと いふはかりにや みよし野の 山もかすみて けさは見ゆらむ

右10 頼基

世尊寺…ねのひする 野邊にこまつを ひきつれて かへる山ちに うくひすそなく  
×日光本…ねのひする 野へにこ松を 引つれて かへる山路に うくひすそなく  
水戸本…□□□□□ □□□まつを ひきつれて かへる山ちに うくひすそなく

右11重之

世尊寺…夏かりの	たまえのあしを	ふみしたき	むれゐる鳥の	たつ空そなき
×日光本…夏かりの	玉江のあしを	ふみしたき	むれゐる鳥の	たつ空そなき
×水戸本…なつかりの	たまえのあしを	ふみしたき	むれゐるとりの	たつ空そなき

右12信明

世尊寺…ほのくくと	有明の月の	つきかけに	紅葉ふきおろす	やまおろしのかせ
×日光本…ほのくくと	ありあけの月の	月かけに	紅葉ふきおろす	やまおろしのかせ
×水戸本…ほのくくと	有曙之つきの	月かけに	もみちふきお	山おろしの風

右13順

世尊寺…みつのおもに	てる月なみを	かそふれは	こよひそあきの	もなかなりける
×日光本…水のおもに	てる月なみを	かそふれは	今宵そ秋の	もなかなりける
×水戸本…水のおもに	てる月なみを	□□□□□	□□□□□	□□□□□

右14元輔

世尊寺…ちきりきな	かたみにそてを	しほりつゝ	すゑのまつやま	なみこさしとは
日光本…ちきりきな	かたみにそてを	しほりつゝ	すゑのまつやま	なみこさしとは
水戸本…ちきりきな	かたみにそてを	しほりつゝ	すゑのまつやま	なみこさしとは

右15元真

世尊寺…さきにけり	わか山さとの	卯のはなは	かきねにきえぬ	雪とみるまで
-----------	--------	-------	---------	--------

×日光本…さきにけり わかやまさとの うのはなは かきねにきえぬ 雪と見るまで  
×水戸本…さきにけり 我山さとの うの花は かきねにきえぬ 雪と見るまで

右16仲文

世尊寺…おもひしる 人にみせはや 夜もすから わかとこなつに おきぬたる露  
×日光本…おもひしる 人にみせはや 夜もすから 我とこなつに おきぬたる露  
×水戸本…おもひしる 人にみせはや 夜もすから 我とこ夏に □きぬたる露

右17忠見

世尊寺…こひすてふ 我なはまたき たちにけり 人しれすこそ おもひそめしか  
×日光本…恋すてふ 我名はまたき たちにけり 人しれすこそ おもひそめしか  
×水戸本…恋すてふ 我名はまた□ □□にけり 人しれすこそ おもひそめしか

右18中務

世尊寺…あき風の ふくにつけても とはぬかな 萩の葉ならば をとはしてまし  
×日光本…秋かせの ふくにつけても とはぬかな 萩の葉ならば をとはしてまし  
×水戸本…あき風の ふくにつけても とはぬかな おきの葉ならば をとはしてまし

世尊寺流「草之形」を基準として、文字遣いに一字でも異同が見られる歌仙和歌は、×印を付した日光本の二十五首六十七字、水戸本の二十九首七十二文字である。

以上のように、日光本と世尊寺流「草之形」の歌仙和歌は、文字遣いに若干の異同は見られるものの、歌仙和歌としては同じ和歌が採択されている。このことから、日光本の歌仙和歌本文の形態は、山作氏が指摘されたように世尊寺流「草之形」に類する三



十六歌仙であったとみてよいであろう。

しかも、世尊寺流「草之形」と同じ歌仙和歌本文をもつ東照宮三十六歌仙扁額に、水戸本が存在する。このことは、元和三年（一六一七）初めて日光東照宮に掲げられた東照宮三十六歌仙扁額が、ある程度の規範性を有していたことを意味するであろう。以上のような経緯から、日光本と同じ歌仙和歌をもつ本文の系統を、日光本系統としておさえておきたい。

#### 第四節 久能山本の歌仙和歌本文の祖本

次に、久能山本の歌仙和歌本文である。

後水尾天皇宸翰には

抑今度駿州久能の哥仙、

とあり、後水尾天皇が、この時点で新たに、徳川秀忠から駿河・久能山の「歌仙」染筆を依頼されたことが知られる。

さらに、後水尾天皇宸翰には、

然らば今度、北野の清水谷哥仙の躰を贍し申す可く存じ候。如何有る可く候哉。

とあり、後水尾天皇が久能山本染筆に際して、「北野の清水谷歌仙の躰」を「贍」すことを良恕法親王に相談しようとしたと考えられる。

では、「北野の清水谷歌仙」とは、何であったのか。

北野天満宮には、室町末期の成立とされる折本『三十六歌仙』手鏡一帖が伝存する。

森暢氏はこれを「北野神社本」と称し、歌仙和歌の筆者については江戸末期に幕府の御用絵師を務めていた住吉弘貫の極にしたがつて、伝・清水谷実秋（未詳〜一四二〇）とされた。さらに、画面の大きさを論拠に、この折本手鏡の本来の形態が扁額であった可能性を次のように論じられた(9)。

夙くから同社の神宝として大切にされた歌仙絵であり、現状では一冊の帖となっているが、その大きさ（縦五十・五糎横三一・九糎）と画面の状態からすれば、もとは一歌仙一額の歌仙絵として奉納されていたのであろう。

伝承筆者である清水谷実秋は一条公勝の子であり、清水谷家を継承したが、兄の死によって、一条家をも継いだ人物である。書は世尊寺行俊に師事し、行俊の死後は、一時的に世尊寺家の宗匠を務めた能書家である。

藏中のぶ氏は、この世尊寺流の系譜につながる折本手鏡を北野天満宮所蔵「清水谷歌仙」に比定し、北野天満宮の別当を務める曼殊院歴代の門跡が、この北野天満宮所蔵「清水谷歌仙」にきわめて強い関心を寄せつづけ、江戸時代を通じて、北野天満宮の社家と曼殊院の間でその所有をめぐる争いがあったことを跡づけ、その間に、「清水谷歌仙」は扁額から卷子本へ、そして、卷子本から折本へと二度にわたって改装が施され、現時点の折本装丁は、曼殊院門跡の命によって、北野天満宮の社家が施したものであることを明らかにされた(10)。

そこで、久能山本と北野天満宮蔵の折本『三十六歌仙』手鏡一帖、すなわち、北野天満宮所蔵「清水谷歌仙」（以下、「清水谷歌仙」と略称）の歌仙和歌本文を確認しておきたい。

さらに、「清水谷歌仙」に酷似する三十六歌仙絵が、アメリカ・ボストン美術館に所蔵される。森氏は、ボストン美術館本は「清水谷歌仙」と同じく、折本として伝来しているが、本来は板に貼られていた扁額であったとし、ボストン美術館本が全体的に北野天満宮にある「清水谷歌仙」に酷似すると結論づけている(11)。

この歌仙絵は、その画体と歌と歌の書式と、更には帖における歌仙の順序において、北野神社本に酷似するものであり、厳密にいえば、僅かに伊勢と小町の姿に多少の相違が見えるほかは同形の歌仙絵である。然し衣装の上の文様と着彩は、北野神

社本に較べて可成り簡略であり、従つてその画体は北野神社本に較べてはるかに迫力の乏しいものとなっている。

歌における書式の酷似は極めて興味ある問題であり、その多様な散らし書といい、万葉仮名といい、その行数といい、総ては同形であつて、その書式には定型が見られ、その定型は、北野神社本におけるをも含めて、この時代に盛行を見たものであらうと思われる。

森氏はポストン美術館本を北野天満宮「清水谷歌仙」と同形の歌仙絵とされた。すなわち、両名の相違は主に歌仙絵の描写方法にあり、歌仙和歌の本文と散らし書きの書体はポストン美術館本と北野天満宮「清水谷歌仙」が極めて近く、共通の定型を見せているとされた。

表2は、「清水谷歌仙」の和歌本文とそれに一致するポストン美術館本・久能山本・滝山本の歌仙和歌本文を対照して示したものである(12)。

表2・北野天満宮蔵「清水谷歌仙」・ポストン美術館本と久能山本・滝山本の歌仙和歌本文

左1人麿

清水谷	..ほのくくと	あかしの浦の	あさきりに	しまかくれゆく	舟をしそおもふ
ポストン	..ほのくくと	明石のうらの	あさ霧に	しまかくれゆく	舟をしそおもふ
×久能山	..ほのくくと	あかしの浦の	あさきりに	しまかくれ行	舟をしそおもふ
滝山	..ほのくくと	あかしの浦の	あさきりに	しまかくれゆく	舟をしそおもふ

左2躬恒

清水谷	..いつくとも	春のひかりは	わかなくに	またみよし野、	山は雪ふる
ポストン	..いつくとも	春のひかりは	わかなくに	またみよし野、	山は雪ふる
×久能山	..いつくとも	春のひかりは	わかなくに	またみよし野の	山は雪ふる

×滝山 …いつくとも 春のひかりは わかなくに またみよしの、 山は雪ふる

左3家持

清水谷 …はるの野に あさるきゝすの つま恋に をのかありかを 人にしれつゝ、  
ボストン …はるの野に あさるきゝすの つま恋に をのかありかを 人にしれつゝ、  
×久能山 …春の野に あさるきゝすの つま恋に をのかありかを 人にしれつゝ、  
×滝山 …春之野に あさるききすの 妻恋に をのか有かを 人にしれ簡

左4業平

清水谷 …世中に たえてさくらの なかりせは 春の心は のとけからまし  
ボストン …世中に たえてさくらの なかりせは 春の心は □とけからまし  
久能山 …世中に たえてさくらの なかりせは 春の心は のとけからまし  
×滝山 …世中に たえてさくらの なかりせは 春の心は のとけからまし

左5素性

清水谷 …みわたせは 柳さくらを こきませて みやこそはるの にしきなりける  
ボストン …□わたせは 柳□□を こきませて みやこそ春の にしきなりける  
久能山 …みわたせは 柳さくらを こきませて みやこそはるの にしきなりける  
滝山 …みわたせは 柳さくらを こきませて みやこそはるの にしきなりける

左6猿丸

清水谷 …おく山の もみちふみわけ なくしかの こゑきく時そ 秋はかなしき

ボストン .. おく山の もみちふみわけ なくしかの こゑきく□そ 秋はかなしき  
×久能山 .. おく山に 紅葉ふみわけ なくしかの 聲きく時そ 秋はかなしき  
×滝山 .. おく山に 紅葉ふみ分 なく鹿の 聲きく時そ あきはかなしき

左7兼輔

清水谷 .. 人のおやの 心はやみに あらねとも 子を思ふみちに まよひぬるかな  
ボストン .. 人のおやの 心はやみに あらねとも 子を思ふみちに まよひぬるかな  
久能山 .. 人のおやの 心はやみに あらねとも 子を思□みちに まよひぬるかな  
×滝山 .. ひとのおやの こゝろはやみに あらねとも 子を思ふみちに まよひぬる哉

左8敦忠

清水谷 .. あひみでの ちのこゝろに くらふれは むかしは物も おもはさりけり  
ボストン .. あひみでの 後の心に くらふれは むかしはものも おもはさりけり  
久能山 .. あひみでの ちのこゝろに くらふれは むかしは物も おもはさりけり  
×滝山 .. あひみでの 後の心に くらふれは むかしはものも おもはさりけり

左9公忠

清水谷 .. 行やらて 山ちくらしつ ほとゝきす いまひとこゑの きかまほしさに  
ボストン .. 行やらて 山ち□□しつ ほとゝきす いまひと□ゑの きかまほしさに  
久能山 .. 行やらて 山ちくらしつ ほとゝきす いまひと□ゑの きかまほしさに  
×滝山 .. ゆきやらて 山路くらしつ 郭公 今一聲の きかまほしさに

左10 齋宮女御

清水谷 .. 琴の音に 峯の松風 かよふらし 何のをより 調そめけむ  
 ボストン .. 琴の音に 峯の松風 かよふらし 何のをより 調そめけむ  
 久能山 .. 琴の音に 峯の松風 かよふらし 何の□より 調そめけむ  
 ×滝山 .. ことのねに 峯の松かせ かよふらし いつれの緒より しらへそめけむ

左11 敏行

清水谷 .. 秋来ぬと 目にはさやかに みえねとも 風の音にそ 驚かれぬる  
 ボストン .. 秋来ぬ□ □□はさやかに みえね□□ 風の□□□ 驚か□□る  
 ×久能山 .. 秋きぬと 目にはさやかに みえねとも 風の音にそ 驚かれぬる  
 ×滝山 .. 秋きぬと めにはさやかに みえねとも 風の音にそ おとろかれぬる

左12 宗于

清水谷 .. 常磐なる 松の緑も 春くれは 今一しほの 色まさりけり  
 ボストン .. 常磐なる 松の緑も 春くれは 今一しほの 色まさ□けり  
 久能山 .. 常磐なる 松の緑も 春くれは 今一しほの 色まさりけり  
 ×滝山 .. ときはなる 松のみとりも 春くれは いま一しほの 色まさりけり

左13 清正

清水谷 .. 天津風 ふけの浦に ゐるたつの なとか雲居に 帰さるへき  
 ボストン .. 天津風 ふけの浦に ゐるたつの なとか雲□に 帰さるへ□  
 ×久能山 .. 天津風 ふけの浦に 居るたつの なとか雲井に 帰さるへき

×滝山 ..天津かせ ふけゐのうらに ゐるたつの なたか雲居に かへらさるへき

左14興風

清水谷 ..契劔 心そつらき 織姫の 年に一たひ あふは逢かは

ボストン ..契劔 心そつらき 織姫の 年に一たひ あふは逢かは

×久能山 ..契劔 心そつらき 織女の 年に一たひ あふは逢かは

×滝山 ..ちきりけむ こゝろそつらき たなはたの としに一度 あふは逢かは

左15是則

清水谷 ..三吉野、 山のしらゆき 積らし 故郷さむく 成まさる也

ボストン ..三吉野、 山のしら雪 積らし 故郷□□く 成ま□□

×久能山 ..三吉野の やまのしら雪 積らし 故郷さむく 成まさる也

×滝山 ..みよし野の 山のしら雪 つもるらし ふるさとさむく なりまさるなり

左16小大君

清水谷 ..いは、しの 夜の契も 絶ぬへし あくるわひしき 葛城の神

ボストン ..いは橋の よるのちきりも たえぬへし あくるわひしき かつらきのかみ

久能山 ..いは、しの 夜の契も 絶ぬへし あくるわひしき 葛城の神

×滝山 ..岩橋の よるの契も たえぬへし あくるわひしき 葛城の神

左17能宣

清水谷 ..千とせまで かきれる松も けふよりは 君にひかれて よろつ代やへむ

ボストン…千とせまで かきれる松も けふよりは 君にひかれて よろつ代やへむ  
×久能山 …千年まで かきれる松も 今日よりは 君に引れて 萬代やへむ  
×滝山 …千とせまで かきれる松も 今日よりは 君にひかれて よろつ代やへむ

左18兼盛

清水谷 …暮て行 穂の形見に 置物は わか本結の 霜にそ有ける  
ボストン…暮てゆく あきのかたみに をく物は わかもとゆひの しもにそありける  
久能山 …暮て行 秋の形見に 置物は わか本結の 霜にそ有ける  
×滝山 …くれてゆく 秋のかたみに をく物は わかもとゆひの 霜にそ有ける

右1貫之

清水谷 …さくらちる 木のしたかせは さむからて 空にしられぬ 雪はふりつゝ  
ボストン…さくらちる 木のしたかせは さむからて そらにしられぬ 雪はふりつゝ  
久能山 …さくらちる 木のしたかせは さむからて 空にしられぬ 雪はふりつゝ  
×滝山 …さくらちる 木の下かせは 寒からて 空にしられぬ 雪そふりける

右2伊勢

清水谷 …みわのやま いかに待みむ としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
ボストン…みわのやま いかに待みむ としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
久能山 …みわのやま いかに待みん としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
×滝山 …みわの山 いかにまちみむ 年ふとも たつぬる人も あらしと思へは



右3 赤人

清水谷 .. わかの浦に しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつ鳴わたる  
 ボストン .. わかの浦に しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつ鳴わたる  
 久能山 .. わかの浦に しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつ鳴わたる  
 ×滝山 .. わかの浦に 塩みちくれは かたをなみ 芦邊をさして たつ鳴渡る

右4 遍昭

清水谷 .. たらちねは か、れとてしも むはたまの わかくろかみは なてすやありけむ  
 ボストン .. たらちねは か、れとてしも むはたまの □かくろかみは なてすやありけん  
 ×久能山 .. たらちねは か、れとてしも むはたまの 我くろかみは なくすやありけん  
 ×滝山 .. たらちねは か、れとてしも むは玉の わか黒髪は なくすや有けむ

右5 友則

清水谷 .. 秋風に はつかりかねそ きこゆなる たかたまつさを かけてきつらむ  
 ボストン .. 秋かせに はつかりかねそ きこゆなる たかたまつさを かけてきつらん  
 ×久能山 .. 秋かせに はつかりかねそ きこゆなる たかたまつさを かけてきつらむ  
 ×滝山 .. 秋かせに はつかりかねそ きこゆなる たかたまつさを かけてきぬらん

右6 小町

清水谷 .. 色みえて うつろふものは 世中の 人のこゝろの 花にそありける  
 ボストン .. 色みえて うつろふものは 世中の 人のこゝろの 花にそありける  
 久能山 .. 色みえて うつろふものは 世中の 人のこゝろの 花にそありける

×滝山 .. 色みえて うつろふ物は 世中の 人の心の 花にそ有ける

右7朝忠

清水谷 .. 逢事の たえてしなくは 中くくに 人をも身をも うらみさらまし  
ボストン .. あことの たえてしなくは 中くくに 人をも身をも うらみさらまし  
久能山 .. 逢事の たえてしなくは 中くくに 人をも身をも うらみさらまし  
×滝山 .. あふことの たえてしなくは 中くくに 人をも身をも うらみさらまし

右8高光

清水谷 .. かくはかり へかたくみゆる 世中に うらやましくも すめる月かな  
ボストン .. かくはかり へかたくみゆる 世中に うらやましくも □□□月□な  
久能山 .. かくはかり へかたくみゆる 世中に うらやましくも すめる月かな  
×滝山 .. かく計 へかたくみゆる 世中に うらやましくも すめる月かな

右9忠岑

清水谷 .. 在明の つれなくみえし 別より 暁□かり うきものはなし  
ボストン .. 在明の つれなくみえし 別より 暁はかり うきものはなし  
×久能山 .. 在明の つれなくみえし 別より 暁はかり うき物はなし  
×滝山 .. 晨明の つれなくみえし 別より 暁はかり うき物はなし

右10頼基

清水谷 .. 一ふしに 千よをこめたる つゑなれば つくともつきし □□□□ひは

ボストン…一ふしに 千よをこめたる つゑなれば つくともつきし □□□□ひは  
×久能山 …一ふしに 千よをこめたる 杖なれば つくともつきし きみかよはひは  
×滝山 …一ふしに 千よをこめたる 杖なれば つくともつきし きみかよはひは

右11重之

清水谷 …風をいたみ 岩うつなみの をのれのみ くだけてものを おもふころかな  
ボストン…風をいたみ 岩うつ浪の をのれのみ くだけてものを □□□□かな  
久能山 …風をいたみ 岩うつなみの をのれのみ くだけてものを おもふころかな  
×滝山 …かせをいたみ 岩うつ波の をのれのみ くだけて物を 思ふころかな

右12信明

清水谷 …あたら夜の 月と花とを おなしくは あはれしれらん 人にみせはや  
ボストン…あたら夜の 月と花とを おなしくは あはれ□れらん □□□□や  
久能山 …あたら夜の 月と花とを おなしくは あはれしれらん 人にみせはや  
×滝山 …あたら夜の 月とはなとを おなしくは あはれしれらむ ひとに見せはや

右13順

清水谷 …水のおもに てる月なみを かそふれは こよひそあきの もなかなりける  
ボストン…水のおもに てる月なみを かそふれは こよひそあきの もなかなりける  
久能山 …水のおもに てる月なみを かそふれ□ こよひそあきの もなかなりける  
×滝山 …水のおもに てる月なみを かそふれは こよひそあきの 最中なりける

右14元輔

清水谷 ..をとなしの 河とそつゐに なかれいつる いはて物おもふ 人の涙は  
 ボストン ..をとなしの 河とそつ□□ □□れ□つる いはてもの思ふ 人のなみたは  
 久能山 ..をとなしの 河とそつゐに なかれ□つる いはて物おもふ 人の涕は  
 ×滝山 ..をとなしの 河とそついに なかれいつる いはて物おもふ 袖の涕は

右15元真

清水谷 ..なつ草は しけりにけりな 玉ほこの みちゆき人も むすふはかりに  
 ボストン ..なつ草は しけりにけりな 玉ほこの みちゆき人も むすふはかり□  
 久能山 ..なつ草は しけりにけりな 玉ほこの みちゆき人も むすふはかりに  
 ×滝山 ..夏草は 茂りにけりな 玉鉾の みちゆきひとも むすふはかりに

右16仲文

清水谷 ..有明の 月のひかりを まつほとに わかよのいたく ふげにけるかな  
 ボストン ..有明の 月のひかりを まつほとに わかよのいたく ふげにけるかな  
 ×久能山 ..有明の 月のひかりを まつ程に わか世のいたく ふげにけるかな  
 ×滝山 ..有曙の 月の光を まつ程に わかよのいたく 更にける哉

右17忠見

清水谷 ..恋すてふ わか名はまたき たちにけり 人しれすこそ おもひそめしか  
 ボストン ..恋すてふ わか名□またき たちにけり 人しれすこそ 思ひそめしか  
 久能山 ..恋すてふ わか名はまたき たちにけり 人しれすこそ おもひそめしか

×滝山 …恋すてふ 我名はまたき 立にけり 人しれすこそ 思ひそめしか

右18中務

清水谷	…秋風の	ふくにつけても	とはぬかな	おきの葉ならば	をとはしてまし
ポストン	…秋風の	ふくにつけても	とはぬかな	おきの葉ならば	をとはしてまし
久能山	…秋風の	ふくにつけても	とはぬかな	おきの葉ならば	をとはしてまし
×滝山	…秋風の	ふくにつけても	とはぬかな	おきの葉ならば	音はしてまし

表2から、北野天満宮蔵「清水谷歌仙」と久能山本、さらに滝山本の歌仙和歌は、すべて同じ和歌であることが確認される。

ただし、北野天満宮蔵「清水谷歌仙」と久能山本の文字遣いには、ままた異同が見られる。「清水谷歌仙」を基準として、文字遣いに一字でも異なるのは、×印を付した久能山本の十四首三十五字、滝山本の三十四首一八八字である。

「清水谷歌仙」と久能山本の本文異同の数は、表1に示した「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」と日光本の異同二十五首六十七字、水戸本との二十九首七十二字と比較すると、はるかに少ない。

後水尾天皇宸翰に記されていたように、久能山本の歌仙和歌本文は、北野天満宮蔵「清水谷歌仙」をそのまま継承した可能性が高い。さらに詳細な調査を要するが、「清水谷歌仙」とは、北野天満宮蔵「清水谷歌仙」そのものであったという可能性がさらに高まったとみてよいであろう。

## 第五節 むすび―日光本系統と久能山本系統

元和三年（一六一七）に成立した最初の東照宮三十六歌仙扁額、日光本・久能山本を基準に、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙和歌本文の性格を検討したところ、次のような結果を得た。

第一に、山作氏が指摘されたように、日光本は「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」に類する『三十六歌仙』を祖本とするのみでよい。

また、日光本の歌仙和歌三十六首と、すべて歌仙和歌が一致するのは、七本のうち、水戸本のみである。

第二に、藏中氏が指摘したように、久能山本は「清水谷歌仙」を祖本とする可能性がきわめて高い。

また、久能山本歌仙和歌三十六首と、すべて歌仙和歌が一致するのは、七本のうち、滝山本のみである。したがって、これら四本については、次のような二系統を想定することが可能である。

日光本系統・世尊寺流「草之形」に類する『三十六歌仙』↓日光本↓水戸本

久能山本系統・北野天満宮蔵「清水谷歌仙」↓ポストン美術館本↓久能山本↓滝山本

元和三年（一六一七）に成立した最初期の東照宮三十六歌仙扁額、日光本と久能山本は、後水尾天皇宸翰に述べられていたように、いずれも徳川秀忠の依頼によって、後水尾天皇が揮毫したものであった。

日光本は、祖本として「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」に類する「世尊寺芳翰」を「模写」していた。歌仙和歌そのものは一致するが、文字遣いには、日光本との間に二十五首六十七字、時代が下る水戸本との間には二十九首七十二字の異同がみられた。

久能山本は、祖本として北野天満宮蔵「清水谷歌仙」を「謄」していた。歌仙和歌そのものは同じであるが、文字遣いには、久能山本との間に十四首三十五字、時代が下る滝山本との間には三十四首一八七字の異同がみられた。

「模写」された日光本、「謄」された久能山本とも、それぞれに歌仙和歌本文をも忠実に祖本から継承していた。ただし、仮名の字母といった文字遣いは、かなり自由であったとが確認された。

なお、この二系統に属さない世良田東照宮三十六歌仙扁額・金沢東照宮三十六歌仙扁額・仙波東照宮三十六歌仙扁額三本の歌仙和歌本文が異なるのは、奉納者である三代将軍家光が、前代の二代将軍秀忠とは異なる形式の三十六歌仙扁額を制作しようとしたからではないかと考えられる。

後水尾天皇は、「世尊寺芳翰」や北野天満宮の「清水谷歌仙」を模範に、公家の伝統的な形式を継承した。二代將軍秀忠は、このような京都の公家文化を導入しようとして、後水尾天皇に、三十六歌仙扁額の執筆を依頼した。

これに対して、三代將軍家光は、この二代將軍秀忠の代とは異なる形式の三十六歌仙扁額を、独自に制作しようとしたのではないか。

例えば、仙波東照宮の扁額三十六歌仙も、家光が奉納したものである。このとき、起用された絵師は、独特の画風を見せる絵師・岩佐又兵衛である。家光の代に入ると、岩佐又兵衛のような絵師に歌仙絵を依頼するようになっていく。家光は、歌仙和歌についても、それまでの秀忠の代とは異なった趣向を凝らそうとした一面があり、その特徴をより検討する必要があると思われる。今後、さらに慎重に調査検討を加えてゆきたい。

#### 注

- (1) 拙稿「江戸初期の東照宮と三十六歌仙扁額―日光東照宮・久能山東照宮・仙波東照宮・滝山東照宮について」(『大東文化大  
学日本語学科二十周年記念論文集』二〇一三年一月、大東文化大学外国語学部日本語学科)。同じ「東照宮扁額三十六歌仙  
における歌仙絵の類型性―女歌仙絵・僧侶歌仙絵を中心に」(『東アジア比較文化研究』第十三号、二〇一四年六月、東ア  
ジア比較文化国際会議)
- (2) 山作良之「日光東照宮蔵三十六歌仙扁額製作の経緯」(『大日光』第七十九号、二〇〇九年三月、日光東照宮)
- (3) 『久能山叢書 第四編 資料編下』(一九七六年、久能山東照宮社務所)
- (4) 新井栄蔵『「書」の秘伝―入木道の古典を読む』(一九九四年四月、平凡社)
- (5) 早川純三郎編『日本書画苑』(一九一四年十月、国書刊行会) 所収
- (6) (2) 前掲論文。
- (7) 新藤協三『「三十六人歌合」と入木道』(『三十六歌仙叢考』二〇〇四年五月、新典社)
- (8) 世尊寺流「草之形」の歌仙和歌本文は、国文学研究資料館に保管されるマイクロフィルムを使用させていただいた。日光本

の歌仙和歌本文は、いわき明星大学教授・田嶋一夫氏を介して、日光東照宮宝物館・山作良之氏よりいただいた画像に拠った。水戸本の歌仙和歌本文は、土浦市立博物館編『茨城の歌仙絵―華麗なる歌人の姿』（第23回特別展、一九九九年十月、土浦市立博物館）の画像に拠った。

(9) 森暢「扁額歌仙絵」（『歌合絵の研究 歌仙絵』一九七八年六月、角川書店）

(10) 藏中しのぶ「花もて縁とせり」（『京都新聞』連載、一九九六年十二月～一九九七年十一月）

藏中しのぶ『江戸期宮廷文化サロンにおける扁額歌仙の制作―曼殊院・北野天満宮と「清水谷歌仙」』（第十四回ヨーロッパ日本研究協会国際会議（14th International Conference of the EASJ）発表、二〇一四年八月二九日、スロベニア・リュブリヤナ大学）

(11) (9) 前掲論文。

(12) 「清水谷歌仙」の歌仙和歌本文は、森暢氏の翻刻を参照した。ボストン美術館本の歌仙和歌本文は、ボストン美術館のウェブサイトに (<http://www.mfa.org/collections/asia>) に公開されている画像に拠った。久能山本の歌仙和歌本文は、神戸女子大学教授・鈴木千代乃氏及び清州市日吉神社・三輪隆裕宮司を介して、久能山東照宮・落合偉洲宮司よりいただいた画像に拠った。滝山本の歌仙和歌本文は、大東文化大学教授・藏中しのぶ氏よりいただいた、故・藏中スミ氏が撮影された写真に拠った。また、岡崎市立美術館編『松平・徳川氏の寺社―岡崎に残る遺産と歴史』（特別企画展、二〇〇〇年四月、岡崎市立美術館）の画像をも参観した。



## 第二章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の書

### ―『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』と日光本を中心に―

#### 第一節 はじめに

日光東照宮に伝来する三十六歌仙扁額（以下、日光本と略称）は、二代将軍徳川秀忠の願いによって元和三年に奉納された。その歌仙和歌の筆者は後水尾天皇であった。久能山東照宮に残る後水尾天皇の宸翰によって、以下のことが明らかとなった。後水尾天皇は、まず、曼殊院門跡良恕法親王に相談してから、日光本の歌仙和歌の染筆に際して、親王から借りた「世尊寺芳翰」を模写したことが窺える。山作良之氏は、「世尊寺芳翰」を九州大学附属図書館蔵の『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』（以下、世尊寺流「草之形」と略称）に類するものとされ、その歌仙和歌の本文が日光本と一致しているのを指摘された<sup>(1)</sup>。前章では、元和七年（一六二二）成立の水戸東照宮三十六歌仙扁額（以下、水戸本と略称）の歌仙和歌本文が日光本と一致していることを検証し、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙和歌本文において、世尊寺流「草之形」に類するものが祖本となる「日光本系統」の存在を定位した。

なお、後水尾天皇の宸翰によれば、歌仙和歌本文のみならず、その「哥のちらし」に関しても、世尊寺流「草之形」に類するものが日光本の祖本であることが、次のことから窺える<sup>(2)</sup>。

日光の哥仙、哥のちらし作者等、先度借用申し候内、世尊寺芳翰を以て模写せしめ候。

山作氏は、世尊寺流「草之形」と日光本の散らし書きを比較した結果、次のことを指摘された<sup>(3)</sup>。

次に日光東照宮歌仙額と「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」の散らし書きの様式を比べると、文字を置く位置やかな遣いが

若干異なっていたり、ひらがなを漢字で書いたりしているところもあるが、各々の句の配置など、様式面においてはほとんど一致する。その様を幾枚かの写真によって見ていただこう。上が「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」、下が日光東照宮歌仙額である。他も同様であり、これにより、日光東照宮歌仙額の雛形とされた「世尊寺芳翰」は「世尊寺家三十六人歌合草之形散形」に類した資料であったことが推測しうる。

前章では、世尊寺流「草之形」の歌仙和歌本文を江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙和歌本文と照合した結果、それが日光本と水戸本一致することを確認した。

本章では、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本のうち、日光本に注目して、歌仙和歌の書における世尊寺流「草之形」と日光本の類似性を検討する(4)。第一に、世尊寺流「草之形」と日光本の書体を対照し、文字の位置づけとその配列を視覚的に大観する。第二に、山作氏が指摘された「文字を置く位置」に関する異同に着目し、その数を確認する。最後に、中世から世尊寺流に伝わる書論書『麒麟抄』を基に、世尊寺流「草之形」と日光本の書体の比較検討に確認された文字の位置の異同の性格を証し、世尊寺流「草之形」と日光本は書においても同格の意匠を凝らしたものととして密接な関係を有することを主張する。

## 第二節 世尊寺流「草之形」と日光本の書の比較検討

本節では、世尊寺流「草之形」と日光本の書の翻字を施し、文字の位置づけとその配列を基準に、両作の書体を視覚的に比較検討をする。なお、その文字をゴチック体で示す。

左1人麿・左3家持・右1貫之・右3赤人・右10頼基五首の書体の考察は、「行」に着目して行うことにする。そのため、これら五首の翻字では、行の上に通し番号を付する。

その外の歌仙和歌三十一首の書体の考察は、行が集まる箇所に着目して行うことにする。この箇所を「集段」と呼び、その一行目の上にも通し番号を付しておく。各集段の位置づけと配列を確認し、集段中の文字の配置を精査する。また、各集段が提示する本文を考慮して、各集段の構成を証すことも目的とする。

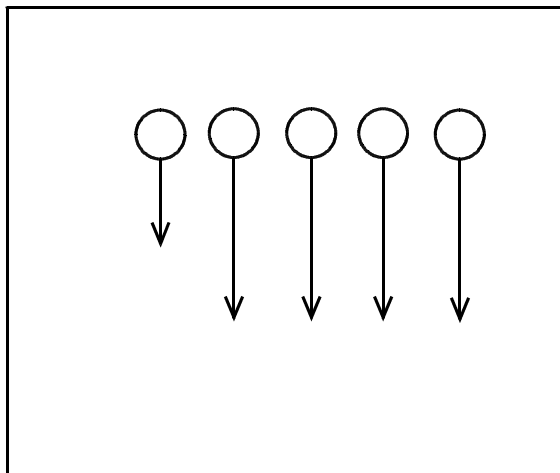
左1人麿 「ほのぼのと あかしのうらの あさきりに しまがくれゆく ふねをしぞおもふ」

世尊寺流「草之形」

日光本

柿本人麿  
1 ほのく とあか  
2 しの浦のあさ  
3 きりにしまか  
4 くれ行舟をしそ  
5 おもふ

左 柿本人麿  
1 ほのく とあか  
2 しのうらのあさ  
3 霧にしま□  
4 くれ行舟を  
5 しそおもふ



左1人麿の歌仙和歌が五行に書かれている。各行の頭は同じ高さである。  
また、漢字仮名遣いに違いがあるにもかかわらず、一行目から三行目にわたって、各行の本文は同じである。  
異同は、四行目と五行目である。世尊寺流「草之形」四行目の脚にある「しぞ」は、日光本で五行目の頭に送られている。

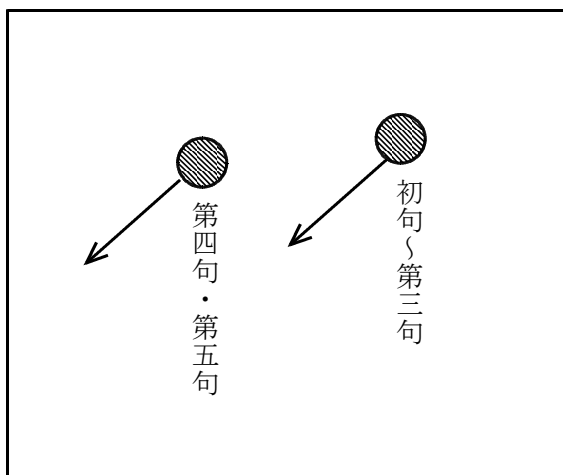
左2躬恒 「すみよしの まつをあきかせ ふくからに こゑうちそふる おきつしらなみ」

世尊寺流「草之形」

日光本

二左 躬恒  
 1 すみよしの松を  
 秋かせふく  
 からに  
 2 こゑうちそふる  
 おきつしら  
 なみ

左 躬恒  
 1 すみよしの松を  
 秋かせふく  
 からに  
 2 こゑうちそふる  
 おきつしら  
 なみ



左2躬恒の歌仙和歌がふたつの集段に構成されている。左側の集段は三行からなり、第三句までの本文を提示する。右側の集段も三行からなり、第四句と第五句の本文を提示する。集段の間の余白は著しい。

左3家持 「まきもくの ひばらのいまだ くもらねば こまつかはらに あはゆきぞふる」

世尊寺流 「草之形」

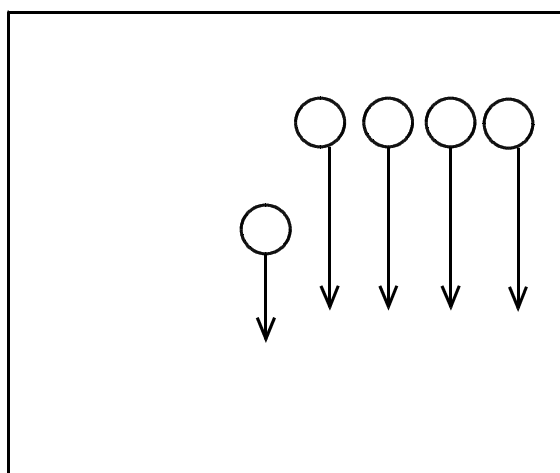
日光本

三左  
中納言家持

- 1 まきもくのひはら
- 2 のいまたくも
- 3 らねはこ松か
- 4 はらにあは雪
- 5 そふる

左  
中納言家持

- 1 まきもくのひはら
- 2 のいまたくも
- 3 らねは小松か
- 4 はらにあは雪
- 5 そふる

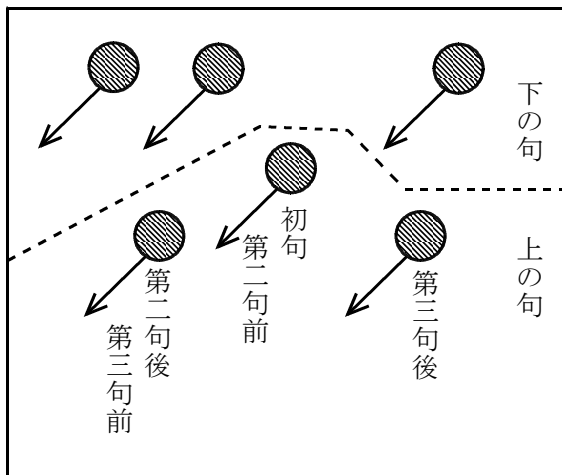
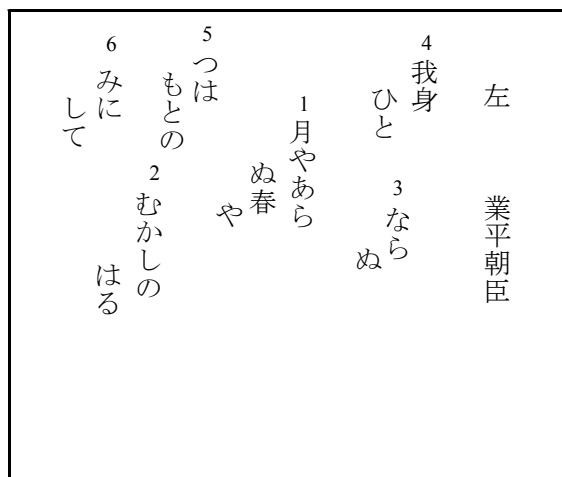
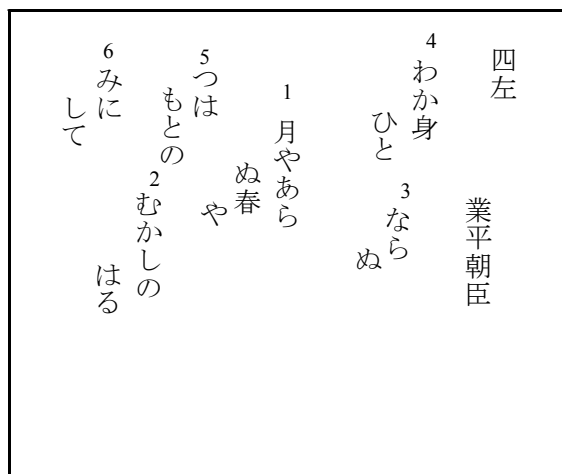


左3家持の歌仙和歌は五行に書かれている。一行目から四行目まで各行の頭の高さが揃い、五行目は大きく下げられている。各行の本文からしても、世尊寺流「草之形」の書と日光本の書は同じである。

左4業平 「つきやあらぬ はるやむかしの はるならぬ わがみひとつは もとのみにして」

世尊寺流「草之形」

日光本



左4業平の歌仙和歌は六つの集段に構成されている。1集段・2集段・3集段は紙面の中央・下段を占め、4集段・5集段・6集段は紙面上段に置かれている。また、本文の上の句は中央・下段に置かれる三つの集段に記され、第四句と第五句は上段の三つの集段に記されている。

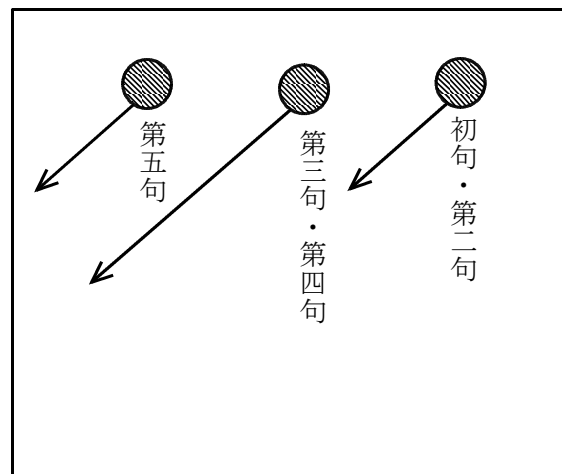
左5素性 「をとにのみ きくのしらつゆ よるはをきて ひるはおもひに あへずけぬべし」

世尊寺流「草之形」

日光本

五左 素性法師  
 1をとにのみ  
 きくのしら  
 露  
 2よるは  
 をきて  
 て  
 ひるは  
 3あへす おもひ  
 けぬへし  
 に

左 素性法師  
 1をとにのみ  
 きくのしら  
 露  
 2よるは  
 をきて  
 ひるは  
 3あへす おもひ  
 けぬへし  
 に



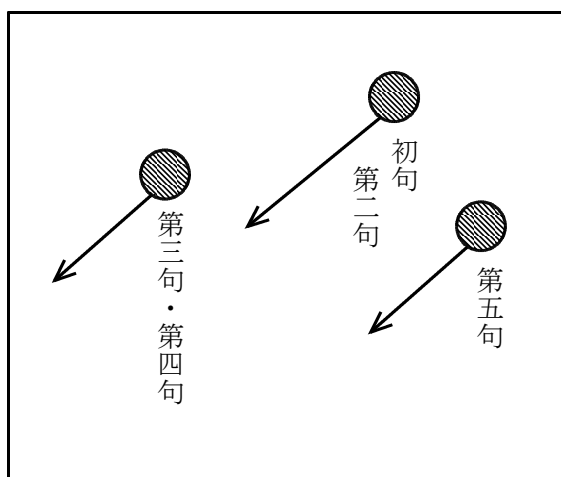
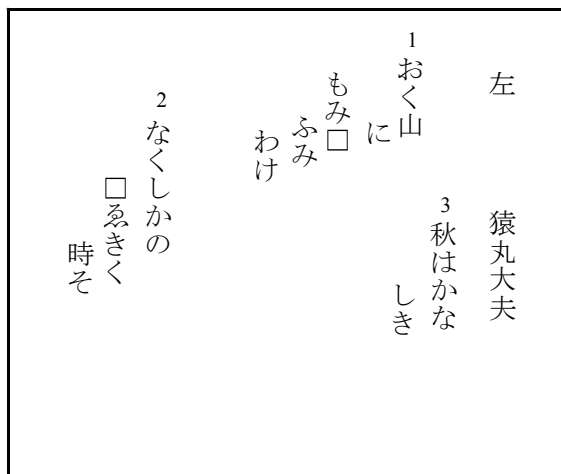
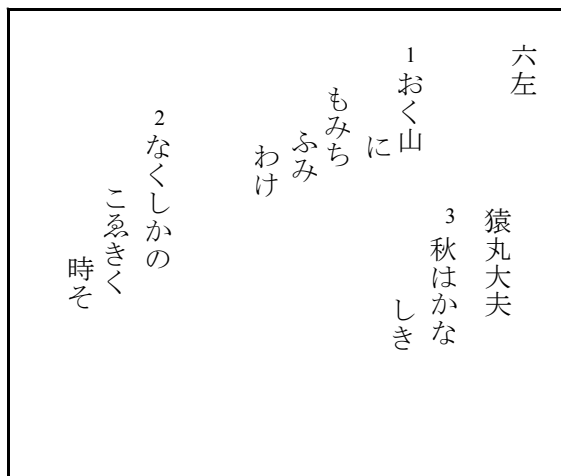
左5素性の歌仙和歌は、三つの集段に構成されている。1集段は初句と第二句、2集段は第三句と第四句、3集段は第五句の本  
 文を示す。

1集段と2集段の間の余白が著しい。また、2集段は最も長く、3集段の下へ流れていく。  
 異同は2集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、第三句「よるはをきて」は三行にわたり、四段活用「をく」の連用形につ  
 いた接続助詞「て」は三行目を占める。それに対して、日光本では第三句が二行に構成され、接続助詞「て」が「をく」と同じ行  
 に書かれている。

左6猿丸 「おくやまに もみぢふみわけ なくしかの こゑきくとときぞ あきはかなしき」

世尊寺流 「草之形」

日光本



左6猿丸の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段は初句と第二句、2集段は第三句と第四句、3集段は第五句の本文を示す。

1集段は紙面の右上に置かれ、2集段はそれに続いて紙面の左側を占める。3集段は右側の下段、1集段の下に置かれている。



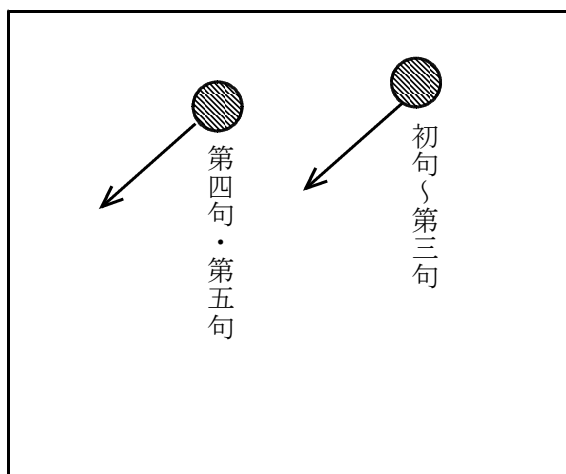
左7兼輔 「みじか夜の ふけゆくままに たかさごの みねのまつかぜ ふくかとぞきく」

世尊寺流「草之形」

日光本

七左 中納言兼輔  
 1 みじか夜の  
 ふけ行まゝに  
 たかさごの  
 2 みねのまつ  
 かせふく  
 かと  
 そ  
 きく

左 中納言兼輔  
 1 みじか夜の  
 ふけ行まゝに  
 高砂の  
 2 みねのまつ  
 かせ  
 ふくかと  
 そ  
 きく



左7兼輔の歌仙和歌はふたつの集段に構成されている。左側の集段は初句から第三句まで、右側の集段は第四句と第五句の本文を記す。

集段の間の余白は著しい。

異同は二点ある。一点目は1集段にある。世尊寺流「草之形」は三行に作るが、日光本は四行に作り、第二句末の格助詞「に」を三行目に配置する。二点目は2集段にある。世尊寺流「草之形」には、二行目が第四句後半「かぜ」と第五句初頭「ふく」からなる。日光本では、二行目が「まつ」で切られ、第五句初頭「ふく」は三行目に送られている。

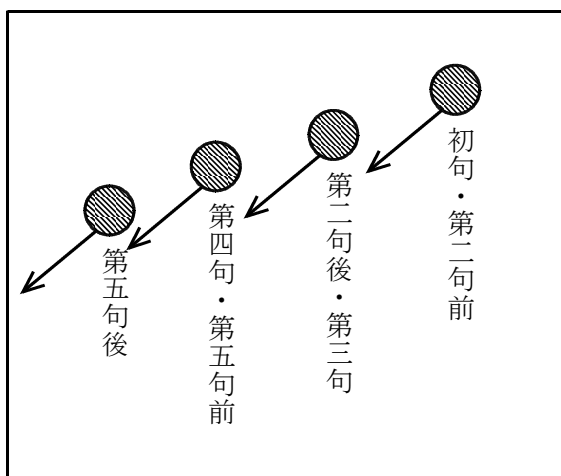
左8敦忠 「いせのうみ ちひろのはまに ひろふとも いまはなにてふ かひかあるべき」

世尊寺流「草之形」

日光本

八左 中納言敦忠  
 1 伊勢の海  
 ちひろの  
 2 はまに  
 ひろふ  
 とも  
 3 いまはなに  
 てふかひ  
 か  
 4 あるべき

左 中納言敦忠  
 1 伊勢のうみ  
 ちひろの  
 2 はまに  
 ひろふ  
 とも  
 3 今はなに  
 てふかひ  
 か  
 4 あるべき



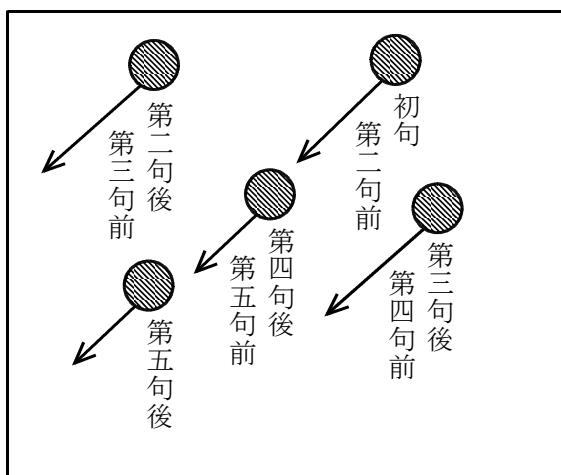
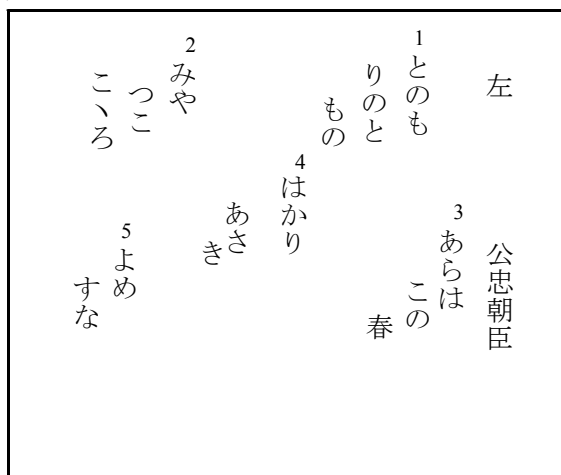
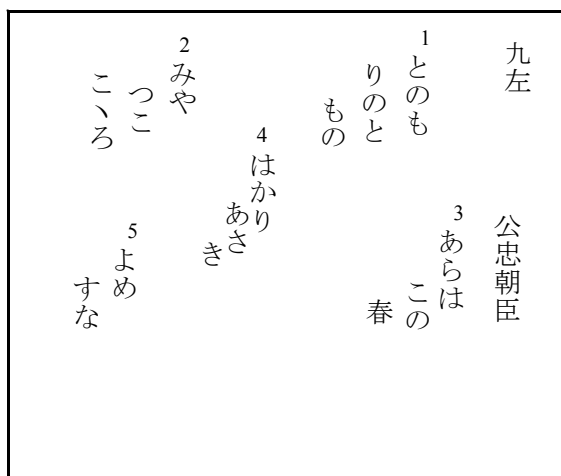
左8敦忠の歌仙和歌は四つの集段に構成されている。集段の間に余白がない。また、集段が右上から左下へと続いて配列されているのは左8敦忠の書の特徴的な書体である。1集段から3集段まで各々三行からなる。

異同は4集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、4集段が第五句後半の本文「あるべき」を示す。一行目は「あるべ」、助動詞「べし」の活用語尾「き」は二行目に送られている。それに対して日光本では、4集段の行数は一行に留まり、世尊寺流「草之形」よりその配置が下になっている。

左9公忠 「とのもりの とものみやつこ こころあらば このはるばかり あさきよめすな」

世尊寺流 「草之形」

日光本



左9公忠の歌仙和歌は五つの集段に構成されている。1集段は初句と第二句初頭「とのも」まで、2集段は第二句と第三句「このころ」まで、3集段は第三句と第四句「この春」まで、4集段は第四句と第五句初頭「きよめ」の「き」まで、5集段は第五句の本文を示す。1集段は紙面の右上に、2集段は左上に置かれる。3集段紙面の右下に、5集段は左下に置かれる。4集段は紙面の中央を占める。

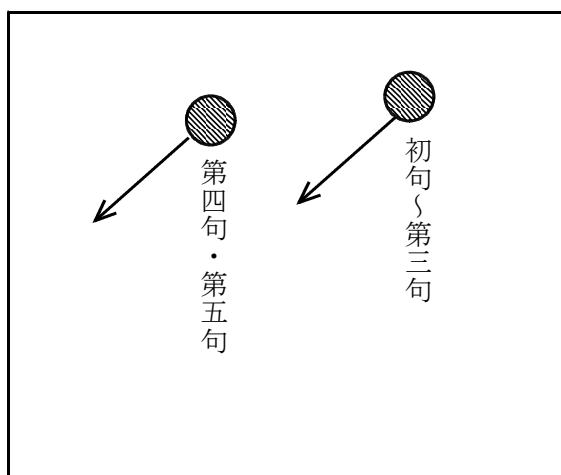
左10 齋宮女御 「そでにさへ あきのゆふべは しられけり きえしあさちか つゆをかけつつ」

世尊寺流 「草之形」

日光本

十左 齋宮女御  
 1 袖にさへ秋の  
 ゆふへは  
 しられ  
 けり  
 2 きえし  
 あさちか  
 露を  
 かけ  
 つつ、

左 齋宮女御  
 1 袖にさへ秋の  
 ゆふへは  
 しられ  
 けり  
 2 きえし  
 あさちか  
 露を  
 かけ  
 つつ、



左10 齋宮女御の歌仙和歌はふたつの集段に構成されている。右側の集段は紙面の右上から中央に流れ、第三句までの本文を示す。左側の集段は第四句と第五句の本文を示す。集段の間の余白は著しい。

左11敏行 「あきはぎの はなさきにけり たかさこの おのへのしかは いまやなくらむ」

世尊寺流「草之形」

日光本

十一左  
敏行朝臣

1 秋はぎの  
花さきに  
けり

2 たかさこの  
おのへの

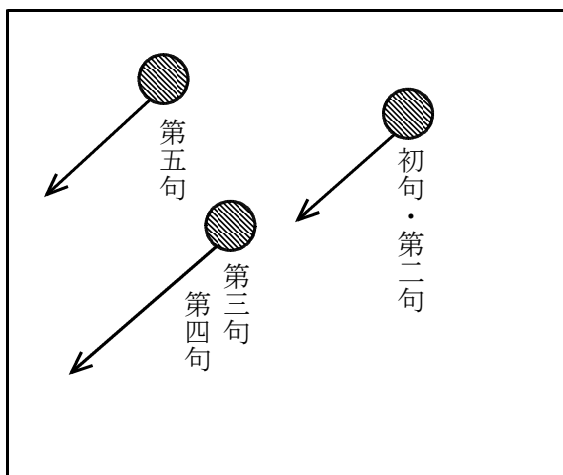
3 いまや  
なくらん  
鹿は

左  
敏行朝臣

1 秋はぎの  
花さきに  
けり

2 たかさこの  
おのへの

3 今や  
なくらん  
鹿は



左11敏行の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段は三行からなり、初句と第二句の本文を示す。2集段は五行からなり、第三句と第四句の本文を示す。3集段は三行からなり、第五句の本文を示す。

1集段は紙面の右上、3集段は紙面の左上に置かれ、2集段は中央から左下へと流れ、3集段の下に配置される。

異同は2集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、2集段一行目は「たかさ」となっており、二行目はその続き「この」を示すため、「たかさこの」といった歌枕が切断され、二行に跨がる。それに対して、日光本では、2集段一行目が「たかさこの」となっており、二行目は格助詞「の」のみを記す。

左12宗于 「やまさとは ふゆぞさびしさ まさりける ひとめもくさも かれぬとおもへば」

世尊寺流「草之形」

日光本

十二左  
宗于朝臣

1 やまさとは  
は  
冬そ

2 さひしさ  
まさり  
ける

3 人めも  
草も

4 かれぬと  
おもへば

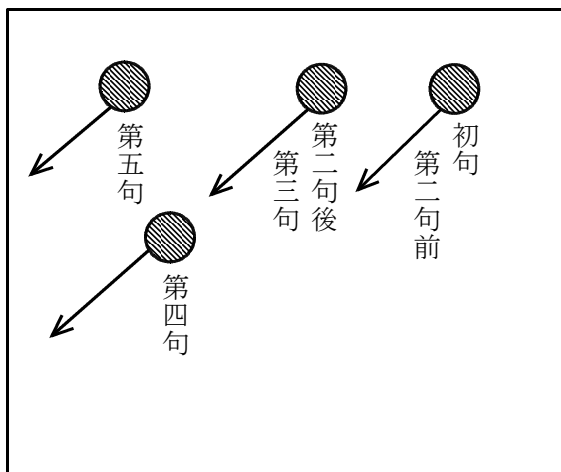
左  
宗于朝臣

1 やまさとは  
は  
冬そ

2 さひしさ  
まさり  
ける

3 人めも  
草も

4 かれぬと  
おもへば

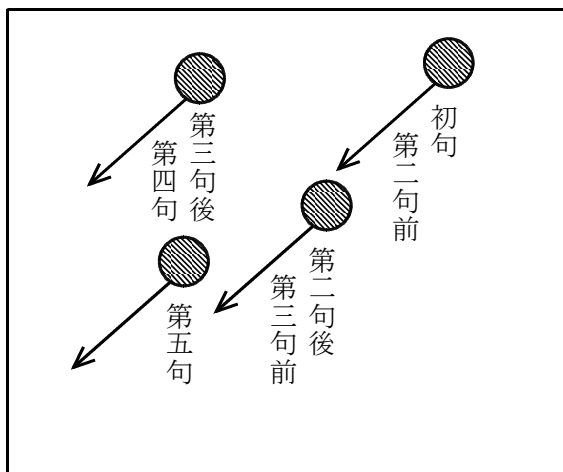
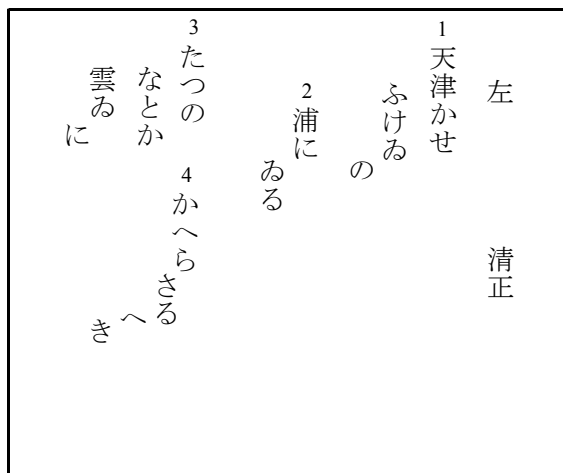
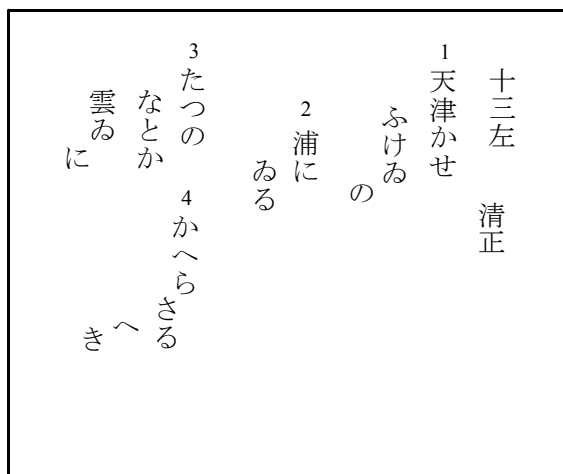


左12宗于の歌仙和歌は四つの集段に構成されている。1集段は紙面の右上に置かれ、三行からなる。2集段は紙面上段の中央に置かれ、三行からなる。3集段は2集段に続いて紙面の左下に置かれ、二行からなる。最後に、4集段は紙面の左上に配置される。また、1集段は初句から第二句初頭「冬」まで、2集段は第二句と第三句、3集段は第四句、4集段は第五句の本文を示す。異同は4集段にある。世尊寺流「草之形」では、4集段が四行からなり、第五句末の接続助詞「ば」を四行目に配置する。それに対して、日光本では4集段が三行からなり、第五句末の接続助詞「ば」が本動詞「おもふ」に繋がっている。

左13 清正 「あまつかせ ふけるのうらに あるたつの などかくもゐに かへらざるべき」

世尊寺流「草之形」

日光本



左13 清正の歌仙和歌は四つの集段に構成されている。1集段は紙面の右上に配置され、2集段は紙面の中央を占める。3集段は紙面の左上、4集段は3集段の下に配置される。

また、1集段は初句から第二句「あまつかせ」まで、2集段は第二句の後半から第三句「ある」まで、3集段は第三句の後半から第四句まで、4集段は第五句の本文を示す。

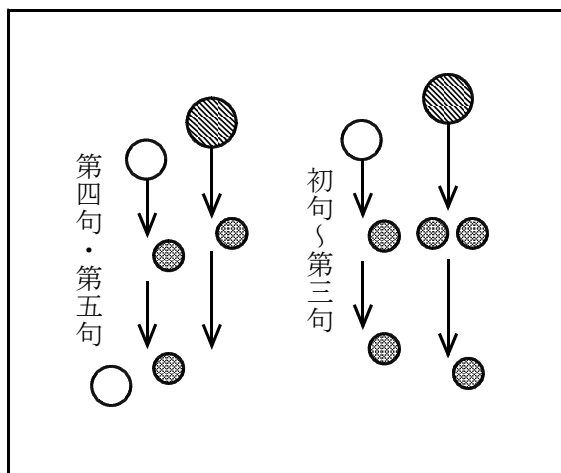
左14興風 「ちぎりけむ こころぞつらき たなばたの としにひとたび あふはあふかは」

世尊寺流「草之形」

日光本

十四左 興風  
 1 ちぎりけむこころそ  
     む 柵機の  
     つらき  
 2 としにひとたび  
     あふはあふかは

左 興風  
 1 ちぎりけむこころそ  
     む 織女の  
     つらき  
 2 としにひとたび  
     あふはあふかは



左14興風の歌仙和歌はふたつの集段に構成されている。右側の集段は二行からなり、初句から第三句までの本文を示す。左側の集段は三行からなり、第四句と第五句の本文を示す。

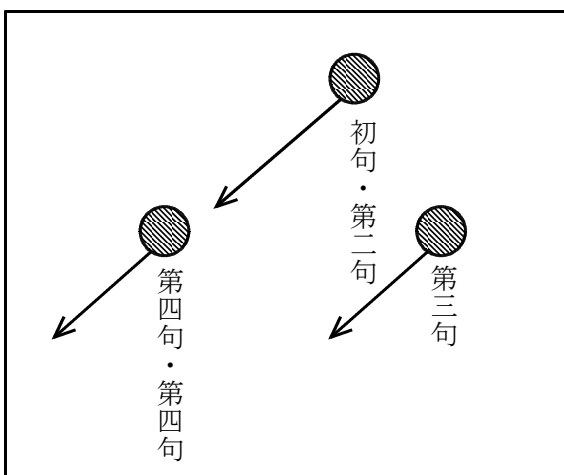
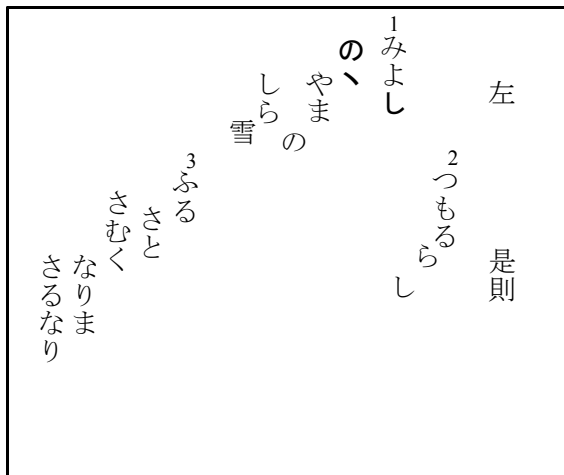
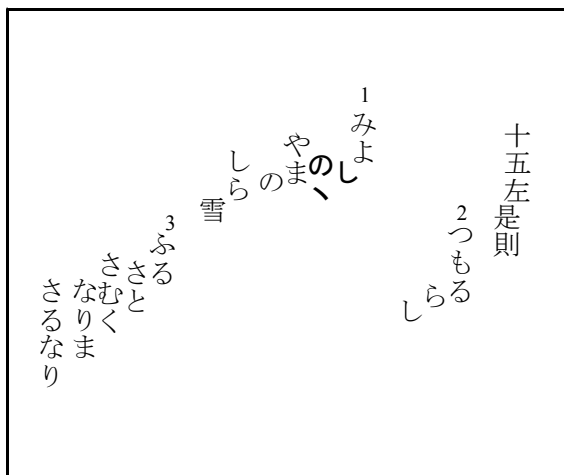
1集段一行目にある格助詞「ぞ」、二行目にある活用語尾「き」と格助詞「の」、また2集段一行目にある格助詞「に」と二行目にある疑問詞「か」、合計六字は行の右寄せに小さく書かれている。そして、1集段一行目にある四段活用動詞の連用形「ちぎり」に接続している助動詞「けむ」二字も他の文字より小さく書かれている。以上の八字の書体は、左14興風と右14元輔の散らし書きの特徴である。



左15是則 「みよしのの やまのしらゆき つもるらし ふるさとさむく なりまさるなり」

世尊寺流「草之形」

日光本



左15是則の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段は紙面の中央を占め、2集段は右下、3集段は左下に配置される。1集段は初句と第二句、2集段は第三句、3集段は第四句と第五句の本文を示す。

異同は1集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、初句「みよしのの」は三行にわたり、二行目は「みよし」の「し」一字か  
らなる。それに対して、日光本では初句が二行にわたり、「みよし」は切断されずに一行目に収められている。また、日光本1集  
段二行目「のの」は、世尊寺流「草之形」1集段三行目「のの」より高く配置されている。

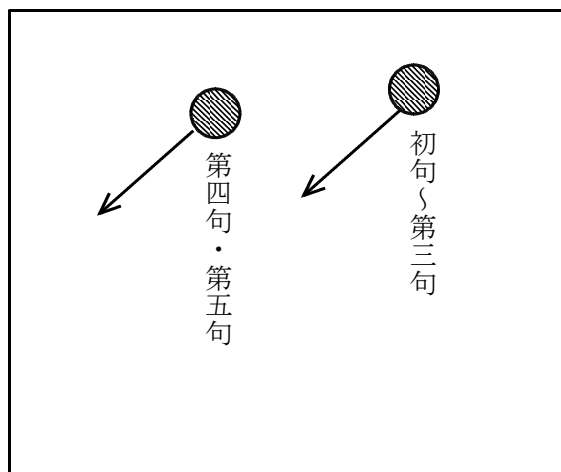
左16小大君 「おほいかは そまやまかせの さむければ たついはなみを ゆきかとぞみる」

世尊寺流「草之形」

日光本

十六左 小大君  
1 おほゐ河そま  
やまかせの  
さむければ  
2 たついはなみ  
を  
ゆきかと  
そ  
見る

左 小大君  
1 おほゐ河そま  
山かせの  
さむければ  
2 たついはなみ  
を  
雪かと  
そ  
見る



左16小大君の歌仙和歌はふたつの集段に構成されている。右側の集段は三行からなり、初句から第三句までの本文を示す。左側の集段は五行からなり、第四句と第五句の本文を示す。また、集段の間の余白が著しい。

左17能宣 「みかきもり ゑしのたくひの ひるはきえ よるはもえつつ ものをこそおもへ」

世尊寺流「草之形」

日光本

十七左 能宣朝臣

1 みかきもり  
ゑしのたく  
火の

2 よるはもえ  
ひるはき  
え

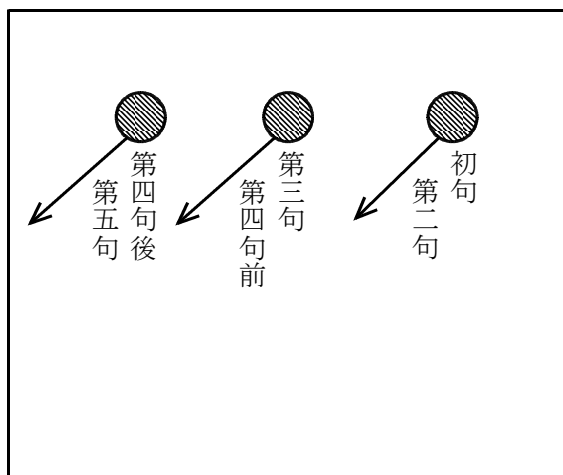
3 つゝものを  
こそおもへ

左 能宣朝臣

1 みかきもり  
ゑしかたく  
火の

2 よるはもえ  
ひるはき  
え

3 つゝものを  
こそ思へ



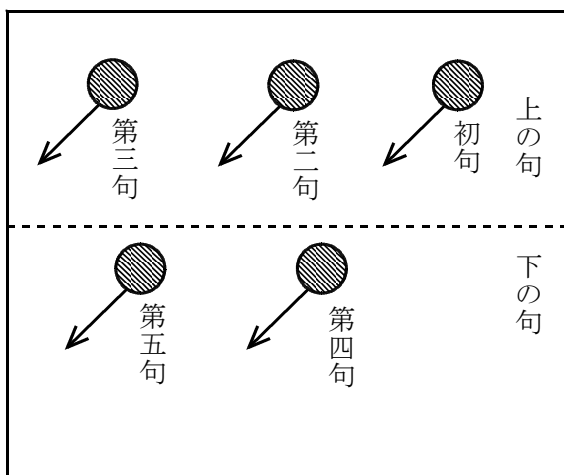
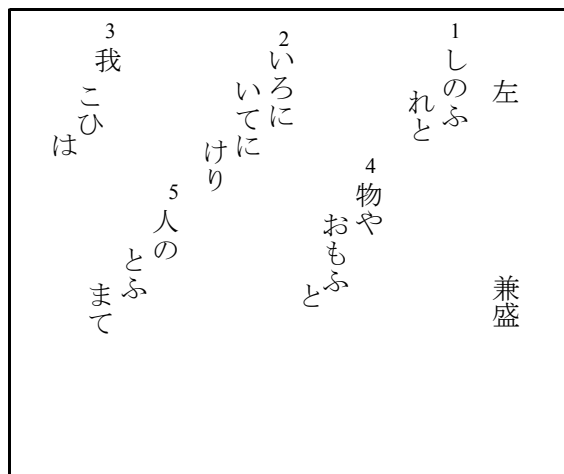
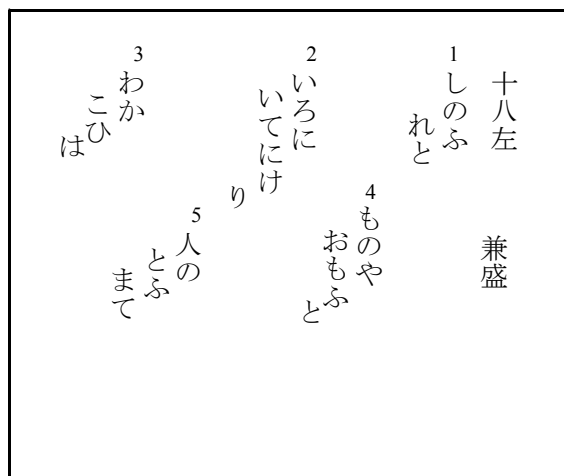
左17能宣の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段は紙面の右側に配置され、三行からなる。2集段は紙面の中央に配置され、三行からなる。3集段は紙面の左側に配置され、二行からなる。世尊寺流「草之形」では、集段の間の余白が明確であるが、日光本では、2集段と3集段の間の余白が比較的狭い。

また、1集段は初句と第二句、2集段は第三句と第四句「ひるはきえ」まで、3集段は第四句「つつ」と第五句の本文を示す。

左18兼盛 「しのぶれど いろにいでにけり わがこひは ものやおもふと ひとのとふまで」

世尊寺流「草之形」

日光本



左18兼輔の歌仙和歌は五つの集段に構成されている。1集段・2集段・3集段は紙面の upper 段に、4集段と5集段は紙面の lower 段に配置されている。また、1集段は初句、2集段が第二句、3集段が第三句の本文を示すので、左18兼盛の歌仙和歌の上の句の本文すべては紙面の upper 段に配置されることになる。それに、4集段が第四句、5集段が第五句の本文を示すため、下の句の本文すべては紙面の lower 段に配置されることになる。

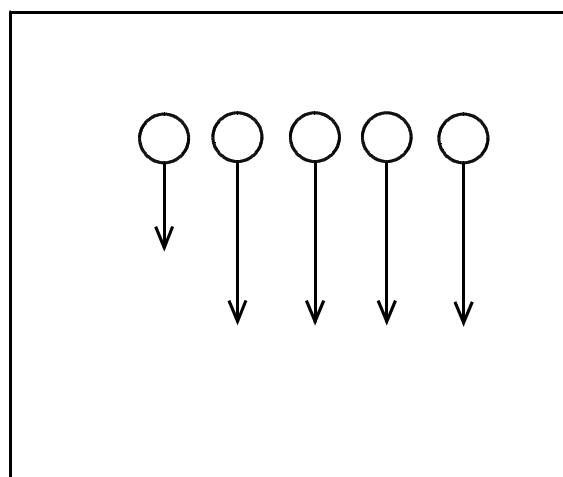
右1貫之 「むすぶての しづくにこる やまのみの あかでもひとに わかれぬるかな」

世尊寺流「草之形」

日光本

一右 貫之  
1 むすぶてのしつ  
2 くにこる山  
3 の井のあかても  
4 人にわかれぬ  
5 るかな

右 貫之  
1 むすぶてのしつ  
2 くにこる山  
3 の井のあかても  
4 人にわかれぬ  
5 るかな



右1貫之の歌仙和歌は五行に書かれている。各行の頭は同じ高さである。その構成は、左1人麿の構成と対応している。

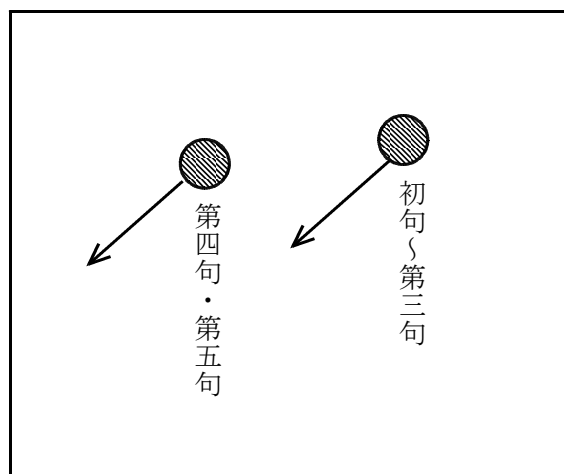
右2伊勢 「みわのやま いかにまちみむ としふとも たづぬるひとも あらじとおもへば」

世尊寺流 「草之形」

日光本

二右 伊勢  
1 三輪のやま いかに  
まちみむとし  
ふとも  
2 たつぬる人も  
あらしと  
おもへは

右 伊勢  
1 三輪のやま いか、  
まちみむとし  
ふとも  
2 たつぬる人も  
あらしと  
おもへは



右2伊勢の歌仙和歌はふたつの集段に構成されている。右側の集段は三行からなり、初句から第三句までの本文を示す。左側の集段は五行からなり、第四句と第五句の本文を示す。また、集段の間の余白が著しい。

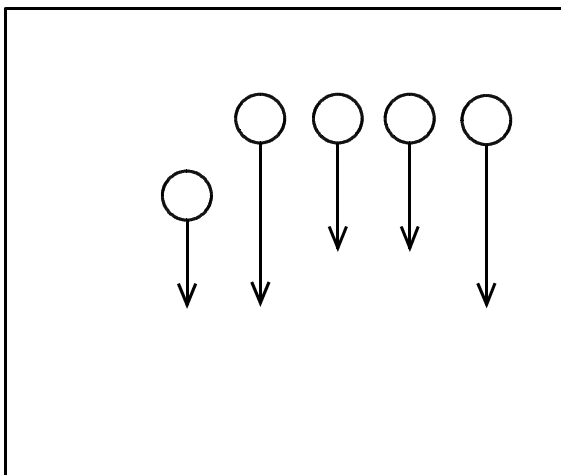
右3 赤人 「わかのうらに しほみちくれば かたをなみ あしべをさして たつなきわたる」

世尊寺流 「草之形」

日光本

三右 赤人  
 1 わかのうらにしほ  
 2 みちくれば  
 3 かたをなみ  
 4 あしへをさしてたつ  
 5 なきわたる

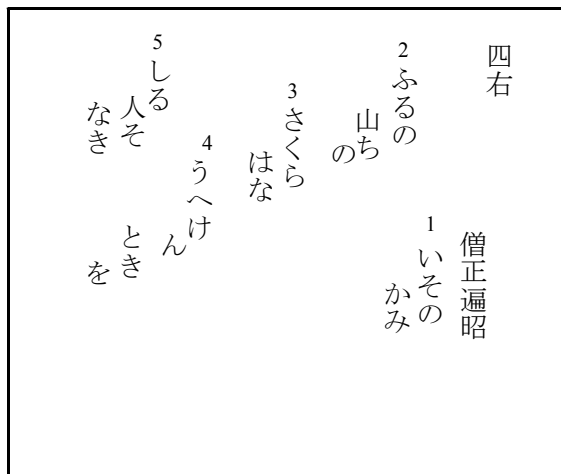
右 赤人  
 1 わかのうらに塩  
 2 みちくれば  
 3 かたをなみ  
 4 あしへをさしてたつ  
 5 なきわたる



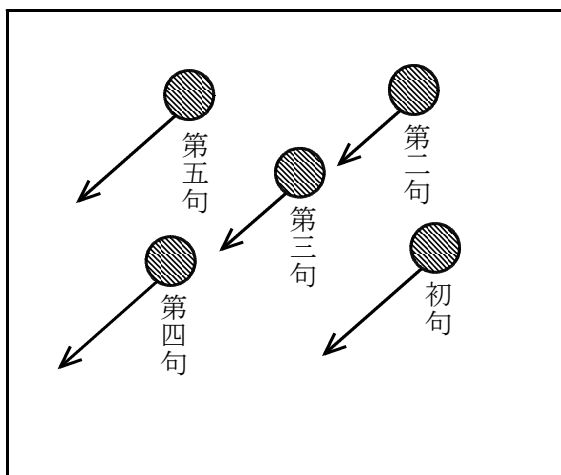
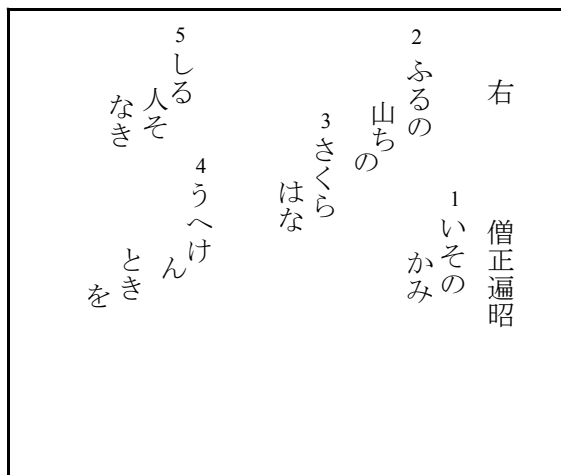
右3 赤人の歌仙和歌は五行に書かれている。一行目から四行目まで各行の頭の高さが揃い、五行目は大きく下げられている。各行の本文からしても、世尊寺流「草之形」の書と日光本の書は同じである。

右4遍昭 「いそのかみ ふるのやまぢの さくらばな うへけんときを しるひとぞなき」

世尊寺流「草之形」



日光本



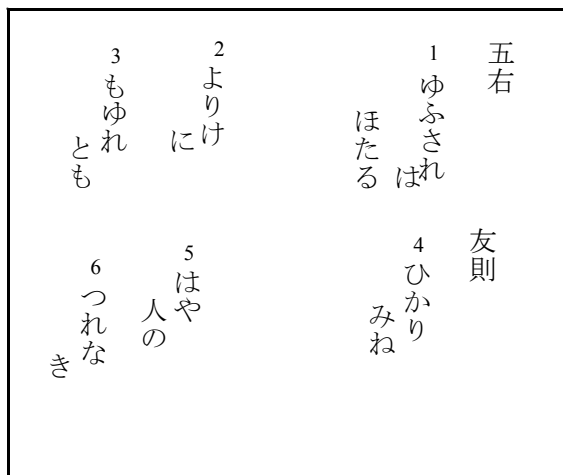
右4遍昭の歌仙和歌は五つの集段に構成されている。1集段は紙面の右下、2集段はその上に配置される。3集段と4集段は2集段に続いて紙面の中央から左下へと流れていく。5集段は紙面の左上に置かれる。

また、1集段が初句、2集段が第二句、3集段が第三句、4集段が第四句、5集段が第五句の本文を示す。

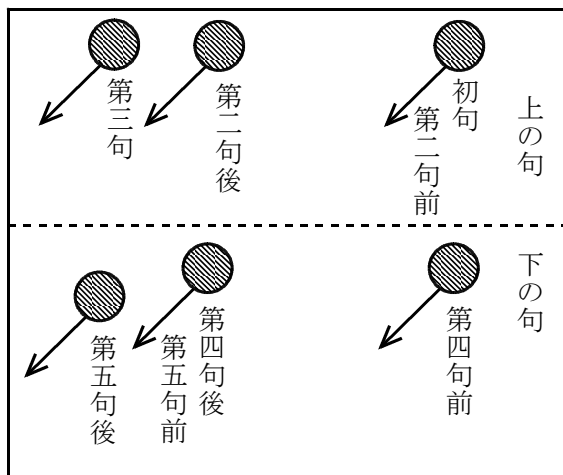
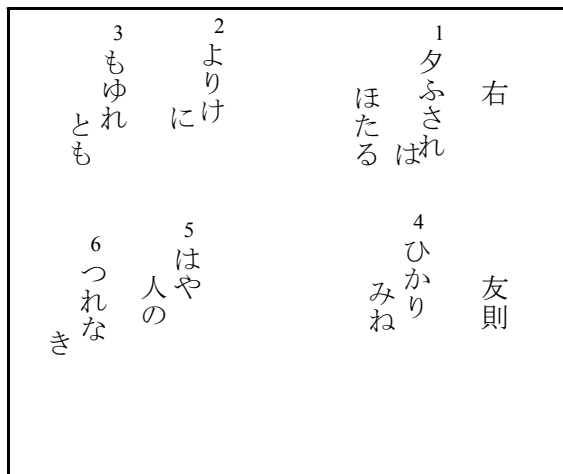


右5友則 「ゆふされば ほたるよりげに もゆれども ひかりみねばや ひとつれなき」

世尊寺流 「草之形」



日光本



右5友則の歌仙和歌は六つの集段に構成されている。1集段から3集段までの三つの集段は紙面上段を占め、右から左の方へ配列されている。4集段から6集段までの三つの集段は紙面の下段を占め、右から左の方へ配列される。上段三つの集段は和歌本文の上の句、下段三つの集段は下の句を示す。

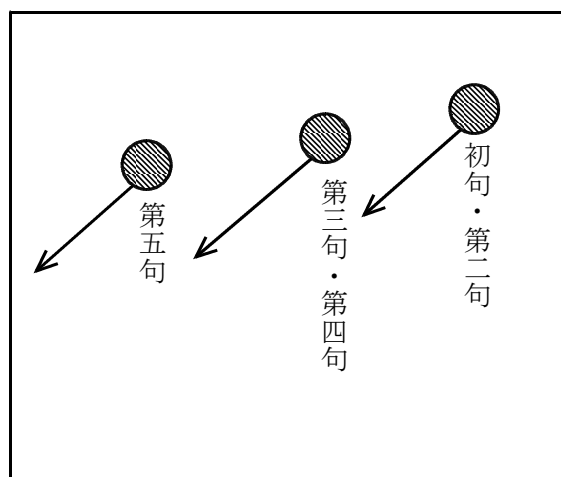
右6小町 「わびぬれば 身をうきさの ねをたえて さそふみずあらば いなむとぞおもふ」

世尊寺流「草之形」

日光本

六右 小野小町  
 1 わひぬれば  
 身をうき草  
 の  
 2 ねをたえ  
 て  
 さそふ水  
 あらは  
 3 いなむと  
 ぞ  
 おもふ

右 小野小町  
 1 わひぬれば  
 身をうき草  
 の  
 2 ねをたえ  
 て  
 さそふ水  
 あらは  
 3 いなむと  
 ぞ  
 思ふ

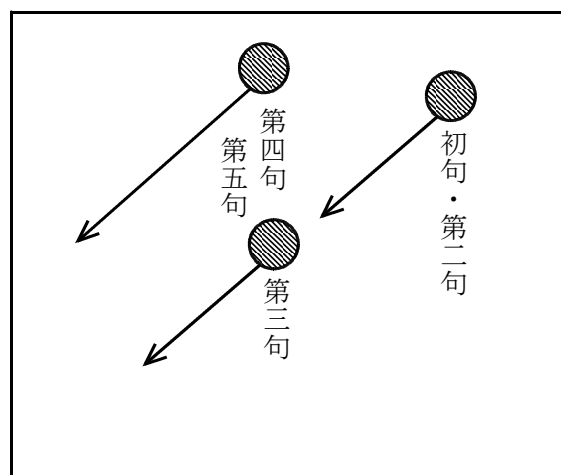
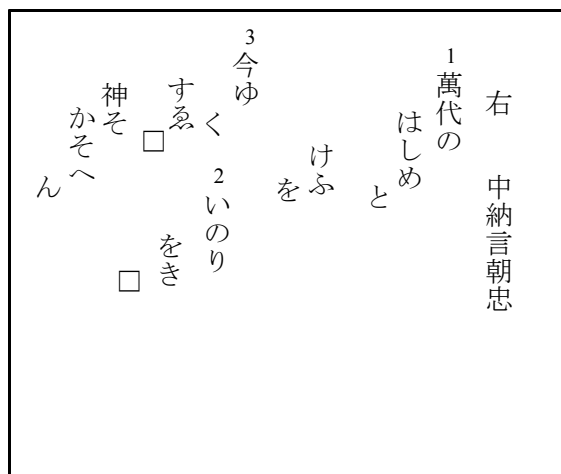
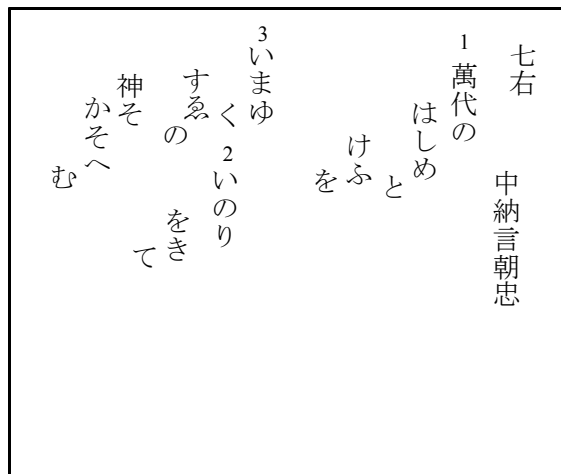


右6小町の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段に従い、2集段と3集段は右から左へと並列されている。1集段は初句と第二句、2集段は第三句と第四句、3集段は第五句の本文を示す。異同は3集段に見られる。世尊寺流「草之形」では、3集段が三行からなる。一方、日光本では、3集段が二行からなる。つまり、世尊寺流「草之形」において3集段二行目を占める格助詞「ぞ」は、日光本において次の行頭に置かれたのである。

右7朝忠 「よろづよの はじめとけふを いのりおきて いまゆくすゑの かみぞかぞへむ」

世尊寺流「草之形」

日光本

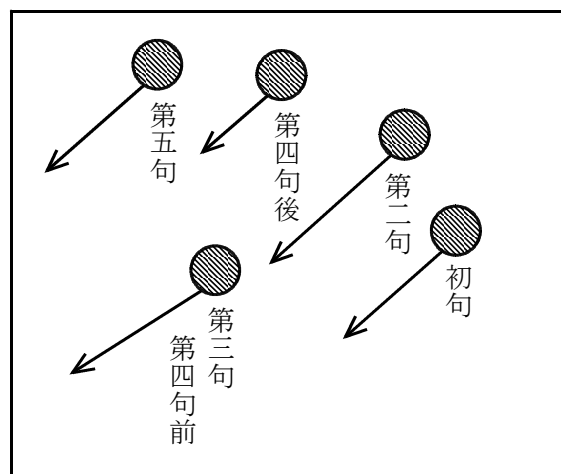
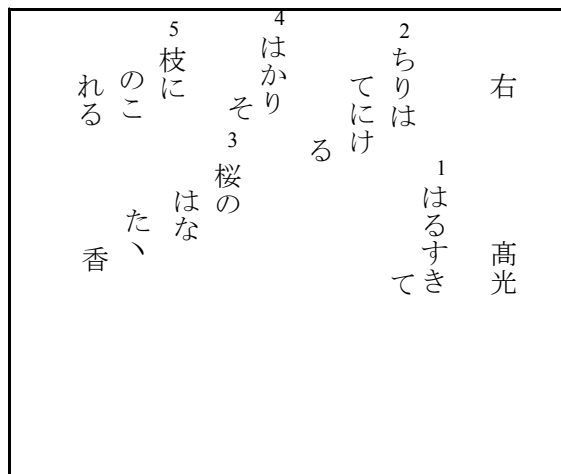
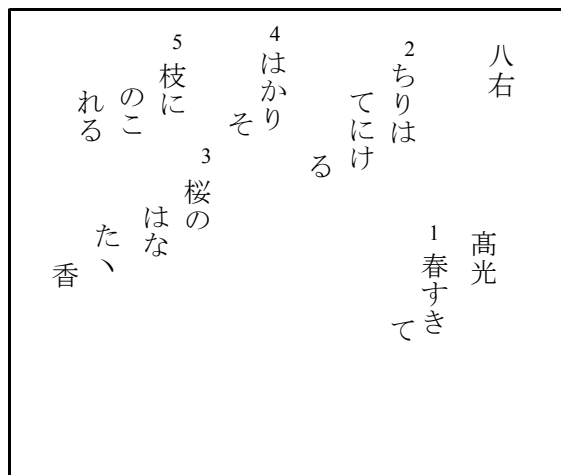


右7朝忠の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段は右上、2集段はそれに続き紙面の中央から左下へと流れ、3集段は2集段の上に配置されている。また、1集段は初句と第二句、2集段が第三句、3集段が第四句と第五句の本文を示す。

右8高光 「はるすぎて ちりはてにける さくらのはな ただかをりばかりぞ えだにのこれる」

世尊寺流 「草之形」

日光本



右8高光の歌仙和歌は五つの集段に構成されている。1集段は紙面の右下に配置され、2集段・4集段・5集段は紙面の右上から左上へと配列されている。3集段は5集段の下に、紙面の中央から左下へと流れる。また、1集段が初句、2集段が第二句、3集段が第三句と第四句前半「香」まで、4集段が第四句後半、5集段が第五句の本文を示す。

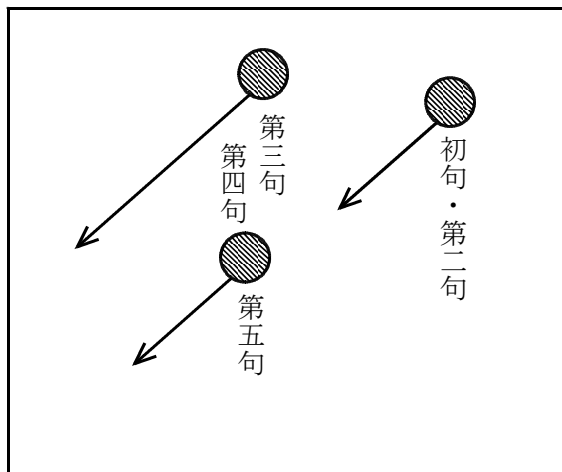
右9忠岑 「はるたつと いふばかりにや みよしのの やまもかすみて けさはみゆらむ」

世尊寺流「草之形」

日光本

九右 忠峯  
 1 春たつと  
 いふばかり  
 にや  
 2 みよし  
 の、  
 山もか  
 すみ  
 て  
 3 けさは  
 見ゆら  
 む

右 忠岑  
 1 春たつと  
 いふばかり  
 にや  
 2 みよし  
 の、  
 山もか  
 すみ  
 て  
 3 けさは  
 みゆら  
 む



右9忠岑の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段は紙面の右上に置かれ、2集段は左上で1集段と対立している。3集段は2集段の下に置かれている。また、1集段が初句と第二句、2集段が第三句と第四句、3集段は第五句の本文を示している。

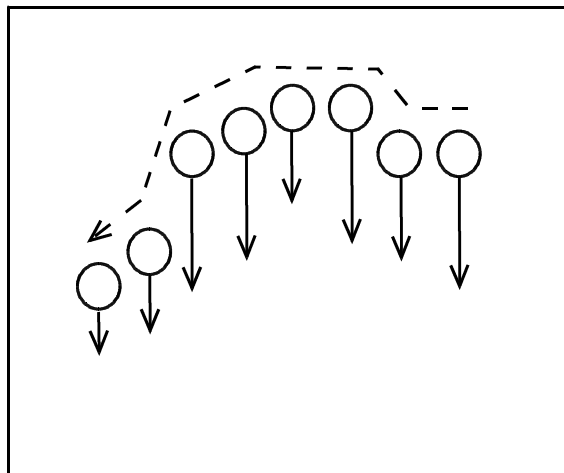
右10頼基 「ねのひする のべにこまつを ひきつれて かへるやまぢに うぐひすぞなく」

世尊寺流 「草之形」

日光本

十右 頼基朝臣  
 1 ねのひする  
 2 墅へにこ  
 3 まつをひき  
 4 つれて  
 5 かへる山  
 6 ちにうくひ  
 7 すそ  
 8 なく

右 頼基朝臣  
 1 ねのひする  
 2 墅へにこ  
 3 松を引  
 4 つれて  
 5 かへる山  
 6 路にうくひ  
 7 すそ  
 8 なく



右10頼基の歌仙和歌は八行に書かれている。一行目と二行目は行頭を揃える。三行目と四行目は前行より行頭を上げて老いる。その次の五行目から八行目まで、各行がだんだん行頭を下げっていく。果たして、右10頼基の歌仙和歌は、波動のような形態に思われるのである。

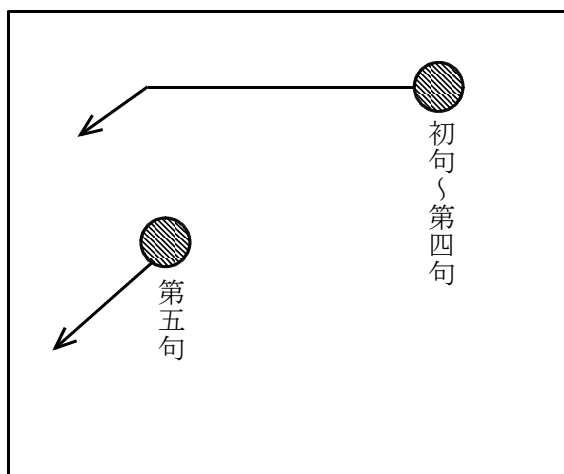
右11重之 「なつかりの たまえのあしを ふみしたき むれゐるとりの たつそらぞなき」

世尊寺流「草之形」

十一右	重之
1夏かり の	
たまえ の	
あしを ふみ	
したき むれ	
ゐる 鳥	2たつ
の	空そ
	なき

日光本

右	重之
1夏かり の	
玉江 の	
あしを ふみ	2たつ
したき むれ	空そ
ゐる 鳥	なき
の	



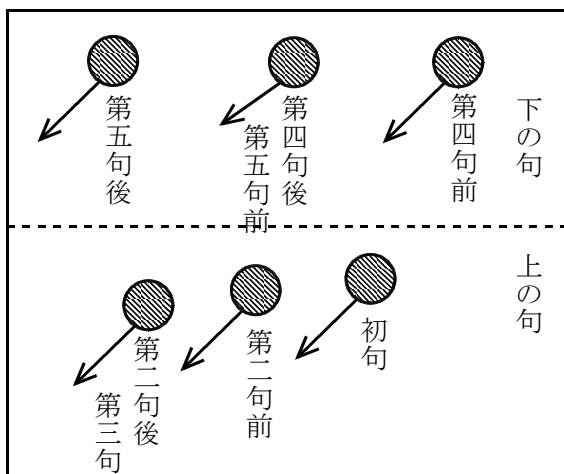
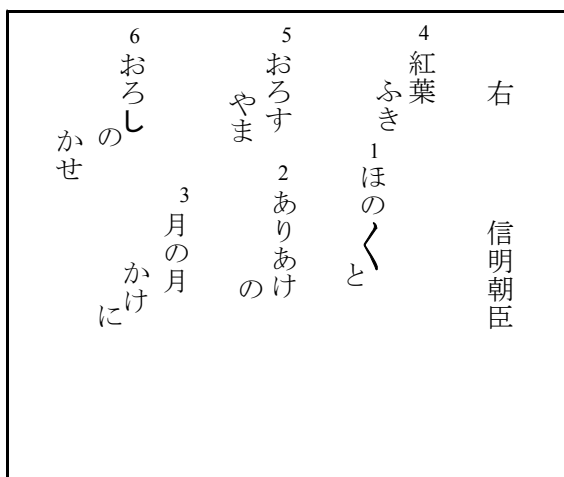
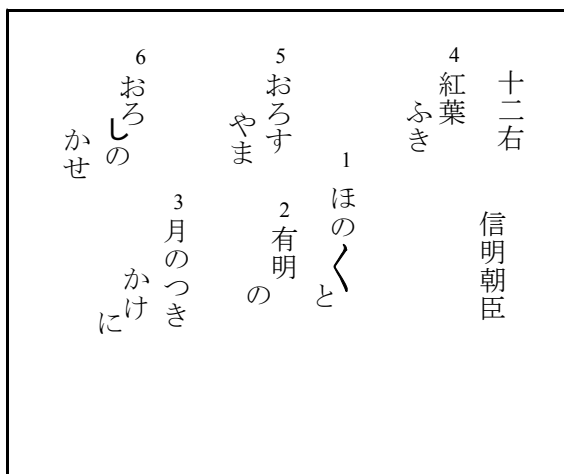
右11重之の歌仙和歌は二つの集段に構成されている。1集段は紙面の右端から左端まで貫いている。この右11重之の1集段は、世尊寺流「草之形」と日光本において、独特な構成を見せている、2集段は紙面の左下に配置される。また、1集段は初句から第四句までの本文を示し、2集段は第五句の本文を示す。

異同は1集段にある。世尊寺流「草之形」では1集段が十一行からなるのに対して、日光本では十行目「鳥」が前行に詰められて1集段は全体で十行になっている。

右12信明 「ほのぼのと ありあけのつきの つきかげに もみぢふきおろす やまおろしのかぜ」

世尊寺流「草之形」

日光本



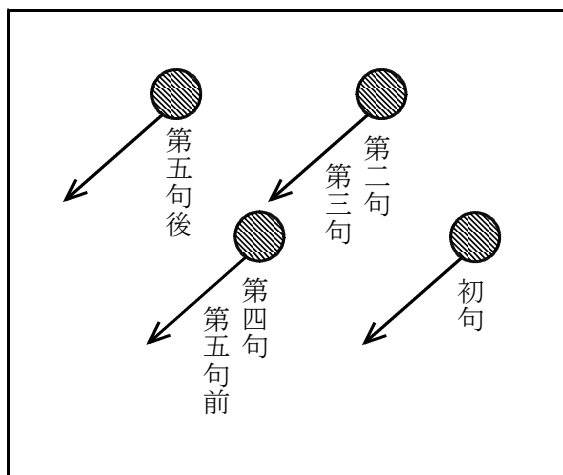
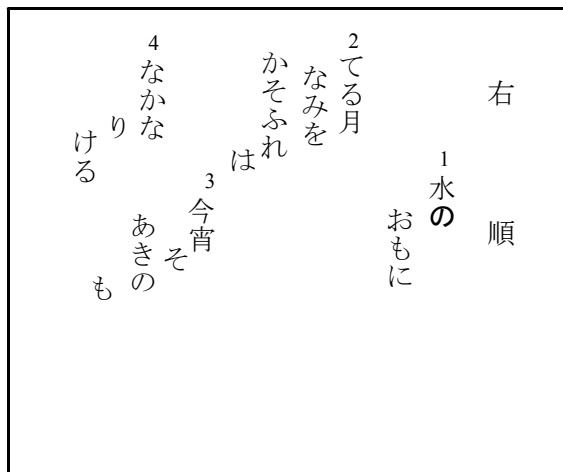
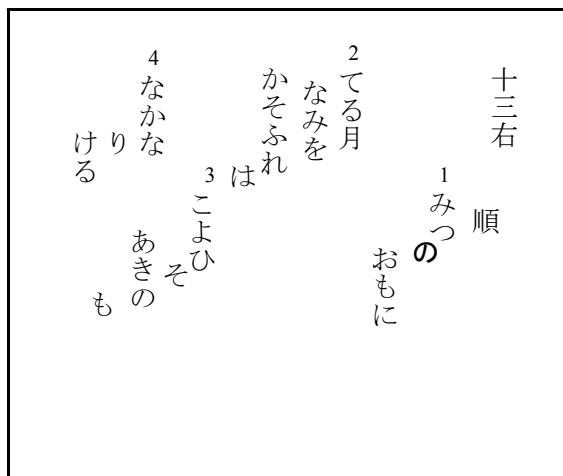
右12信明の歌仙和歌は六つの集段に構成されている。1集段から3集段までの三つは、右から左へと紙面の下段に配列される。4集段から6集段までの三つは、右から左へと紙面の上段に配列される。果たして、上の句と下の句が上下二段に分割され、さらに三つの集段に書かれる。



右13順 「みづのおもに てるつきなみを かぞふれば こよひぞあきの もなかなりける」

世尊寺流「草之形」

日光本



右13順の歌仙和歌は四つの集段に構成されている。1集段は紙面中央の右側に置かれる。2集段は紙面中央の最も上に配置され、3集段は2集段の末尾から始まり紙面の左下へと流れる。4集段は紙面の左上に置かれる。また、1集段が初句、2集段が第二句と第三句、3集段が第四句と第五句の前半、4集段が第五句の後半を示す。異同は1集段にある。世尊寺流「草之形」では、1集段が三行からなり、二行目が格助詞「の」一字からなる。一方、日光本では1集段が二行からなり、格助詞「の」が一行目の末に配されている。

右14元輔 「ちぎりきな かたみにそでを しほりつつ すゑのまつやま なみこさじとは」

世尊寺流「草之形」

十四右 元輔

1 ちぎりきな かたみに  
そでをしほり つゝ

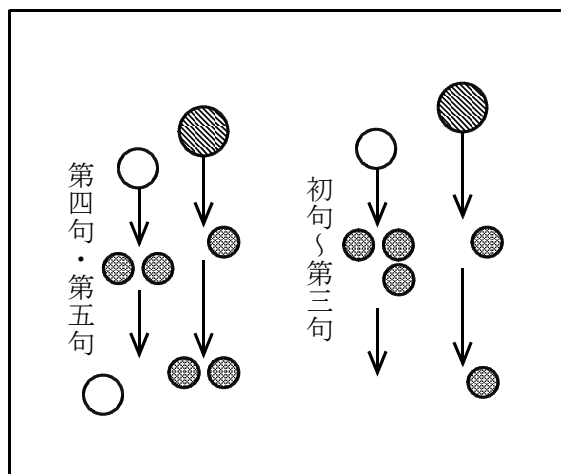
2 すゑの まつや  
なみこさしとは

日光本

右 元輔

1 ちぎりきな かたみに  
そでをしほり つゝ

2 すゑの まつや  
なみこさしとは



右14元輔の歌仙和歌は二つの集段に構成されている。1集段は二行、2集段は三行からなる。また、1集段は初句から第三句までの本文、2集段は第四句と第五句の本文を示している。

さらに、左14興風に見られたように、右14元輔の歌仙和歌には、行の右寄せに小さく書かれているいくつかの文字がある。これらは、他の歌仙和歌の書体に見られない特徴である。果たして、世尊寺流「草之形」と日光本にも左14興風と右14元輔の歌仙和歌の書体は対応的に構成されたのであろう。

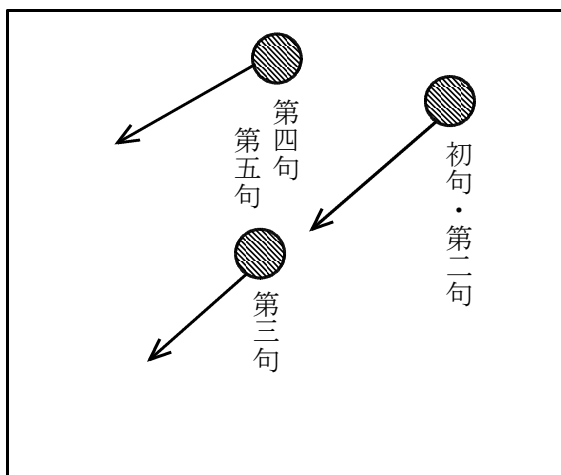
右15元真 「さきにけり わがやまざとの うのはなは かきねにきえぬ ゆきとみるまで」

世尊寺流「草之形」

十五右 元真  
 1 さきに  
 けり  
 わか山  
 さとの  
 の  
 3 かきね  
 に  
 きえぬ  
 雪と  
 みる  
 まて  
 2 卯の  
 はな  
 は

日光本

右 元真  
 1 さきに  
 けり  
 わかやま  
 さとの  
 の  
 3 かきね  
 に  
 きえぬ  
 雪と  
 見る  
 まて  
 2 うの  
 はな  
 は



右15元真の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。1集段は紙面の右側、2集段は紙面の左下に配置される。3集段は中央上段から始まり、紙面上段の左側まで長く流れている。1集段末尾と2集段冒頭の間の余白が著しい。異同は1集段にある。世尊寺流「草之形」では、1集段が五行からなり、五行目が格助詞「の」一字からなる。一方、日光本では、1集段が四行からなり、格助詞「の」が四行目の末に配されている。

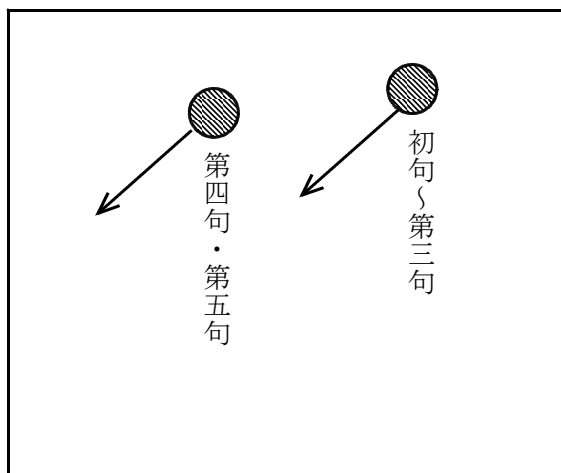
右16仲文 「おもひしる ひとにみせばや よもすがら わがとこなつに おきぬたるつゆ」

世尊寺流「草之形」

十六右 仲文  
1 おもひしる人に  
みせはや夜も  
すから  
2 わかとこなつに  
おきぬたる  
露

日光本

右 仲文  
1 おもひしる人に  
みせはや夜も  
すから  
2 我とこなつに  
おきぬたる  
露



右16仲文の歌仙和歌は二つの集段に構成されている。右側の集段は初句から第三句まで、左側の集段は第四句と第五句の本文を示す。

また、集段の間の余白が著しい。

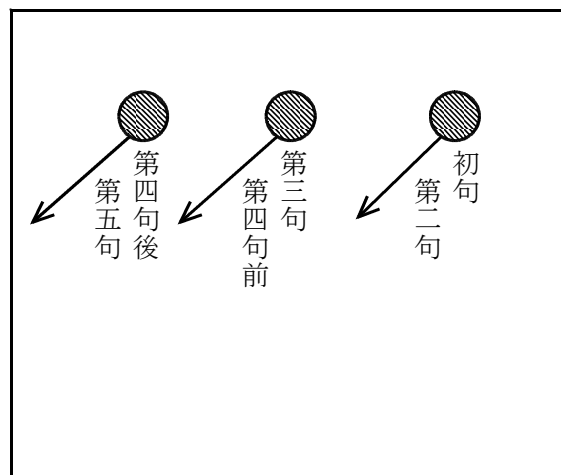
右17忠見 「こひすてふ わがなはまだき たちにけり ひとしれずこそ おもひそめしか」

世尊寺流 「草之形」

日光本

十七右 忠見  
 1 こひすてふ  
 我なはまた  
 き  
 2 たちにけり  
 人しれ  
 す  
 3 こそおもひ  
 そめし  
 か

右 忠見  
 1 恋すてふ  
 我名はまた  
 き  
 2 たちにけり  
 人しれ  
 す  
 3 こそおもひ  
 そめし  
 か



右17忠見の歌仙和歌は三つの集段に構成されている。各集団は紙面の右上から左上へと配列されている。また、1集段と2集段の間の余白が著しい。

1集段は初句と第二句、2集段が第三句と第四句「しれず」まで、3集段が第四句後半と第五句の本文を示す。

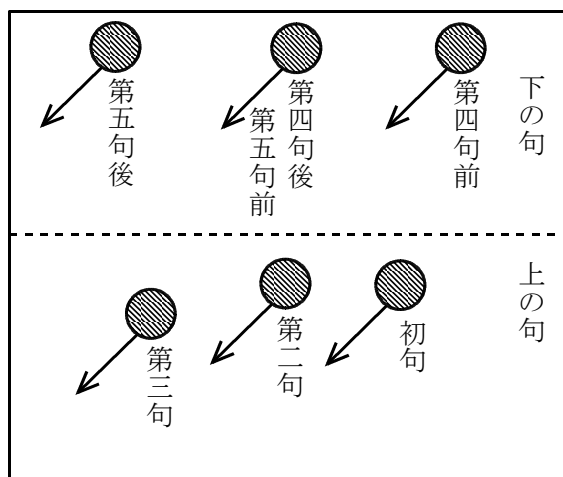
右18中務 「あきかぜの ふけにつけても とはぬかな おぎのはならば をとはしてまし」

世尊寺流「草之形」

日光本

十七右	中務
4 荻の葉	
1 あき風の	
5 ならば	2 ふけにつけても
を	と
6 はし	3 とはぬかな
まし	

右	中務
4 荻の葉	
1 秋かせの	
5 ならば	2 ふけにつけても
を	と
6 はし	3 とはぬかな
まし	



右18中務の歌仙和歌は六つの集段に構成されている。1集段・2集段・3集段は紙面の下段、4集段・5集段・6集段は紙面上段に配置される。また、1集段が初句、2集段が第二句、3集段が第三句の本文を示す。4集段は第四句前半、5集段が第四句後半から第五句前半まで、6集段は第五後半の本文を示す。

異同は4集段にある。世尊寺流「草之形」では、4集段が二行からなり、二行目が「葉」一字からなる。それに対して、日光本では、4集段が一行からなり、「葉」一字が次行に送られていない。

まず、世尊寺流「草之形」と日光本の歌仙和歌の書体を三種類に整理することができる。

第一に、行をいくつかの集段に集約し、集段を四方に散布する書体がある。そのため、行間の幅に規定がなく、よく集段の間に空白がある。概ね集段は、一行目を高く配置し、それに沿って次行の行頭を下げていく形態となり、和歌本文の区切れで構成される。しかし、左4業平の歌仙和歌の書体に見られたように、句の途中で構成される集段も存在する。

この書体を見せる歌仙和歌は世尊寺流「草之形」と日光本において、左1人麿・左3家持・左8敦忠・右1貫之・右3赤人・右10頼基六首以外の三十首であり、両作に共通している。

第二に、左1人麿・左3家持・右1貫之・右3赤人・四首の書体がある。これらは右から左へと行を配置し、行間の幅を固定させ、また行の高さに大きな変化を付けないのがその特徴である。この書体を見せる歌仙和歌も、世尊寺流「草之形」と日光本に共通している。

第三に、左8敦忠と右10頼基の歌仙和歌の書体がある。これらは、行の高さを変化させるが、行間の幅にさほどの変化をつけない書体である。とりわけ特徴的な書体でありながらも、これらも世尊寺流「草之形」と日光本に共通している。

以上のことから、世尊寺流「草之形」と日光本と歌仙和歌の書体すべては、集段と行の位置づけ・配列が共通しており、概ね同様の形態をとっていることが明らかとなった。

異同は、表1にまとめておく

表1・世尊寺流「草之形」と日光本の書体の異同

番号	歌仙名	異同の位置
①	左1人麿	四行目・五行目
②	左5素性	2集段

⑬	⑫	⑪	⑩	⑨	⑧	⑦	⑥	⑤	④	③
右15元真	右13順	右12信明	右11重之	右6小町	左15是則	左12宗于	左11敏行	左8敦忠	左7兼輔	左7兼輔
1集段	1手段	5集段	1集段	3集段	1集段	4集段	2集段	4集段	2集段	1集段



表1から、山作氏が指摘された「文字を置く位置」における異同はすべて集段の中にあることが確認される。次に、この異同の性格について考察を加えておきたい。

### 第三節 異同の性格

世尊寺流「草之形」と日光本の書の間、行を集めた集段の中に文字の位置における異同十四例確認された。十四世紀中ごろに成立したとされる書論書『麒麟抄』には、散らし書きにおいて、このような文字の位置の異同に類似する記述がある。

『麒麟抄』巻五には、世尊寺流に伝わった散らし書きの基本型三つ紹介されている(5)。一番目は「立石」といい、その実態は次のとおりである。

#### 【本文】

一 歌ヲ書ニ三ノ品可有之立石藤花木立ト云也先立石者五七ノ句ノ九字一行七字一行一字一行下ヲヒトシク頭ヲ不同也次七々ノ句ヲ半七字一行六字一行一字一行二行姿巖ノソビエタルガ並テ立タル様ニ可書以之立石ト名付諭バ是ヲ四行木立トモ云  
ほのくとかあしの 九

うらのあさきり 七

に 一

島かくれゆく 七

ふねをしそおも 六

ふ 一

【訓み下し文】

一歌を書くに、三の品の有るべし。「立石」「藤花」「木立」と云ふなり。先づ、「立石」は、五七の句の九字一行、七字一行、一字一行、下をひとしく、頭を同じからずなり。次の七々の句を、半ば七字一行、六字一行、一字一行に、行の姿、巖のそびえたるが並びて立ちたる様に書くべし。之を以て、「立石」と名付く。喩へば、是を「四行木立」とも云ふ。

「立石」は、巖が並んでいる姿に由来する型である。行頭を揃えず、行脚を揃えて書く技法は、巖が地面に立っている様子を例えたものである。三行分と六行分が一字ずつから成立することは、「立石」独特の様相である。別名は「四行木立」ということから、「立石」と「木立」の緊密な関係が想定される。次に「木立」をみてみよう。

【本文】

木立者は八初之如立石雖書散字ノ数ハ各別也仮者初ノ句ヲバ七字一行七字一行三字一行次句ハ七字一行五字一行二字一行是ヲバ三字二字充聳タル質ニカクベキ也

やをかゆくはま 七

のまさことわか 七

こひは 三

いつれまされる 七

おきつしま 五

もり 二

【訓み下し文】

「木立」は、是は初の「立石」の如く書き散らすと雖へども、字の数は各別なり。仮へば、初の句をば、七字一行、七字一行、

三字一行、次の句は七字一行、五字一行、二字一行。是をば、三字・二字充ち聳へたる質にかくべきなり。

「木立」も、「立石」のように和歌を上句と下句に区分して、それぞれを三行に書く型である。また、行頭を揃えないで書くことも、両方に共通している特徴である。

「立石」と「木立」の性格の差は、各句末尾の行の構成に表れる。「木立」は、字数に制限がないため、上の句末尾の行を三字に作り、下の句末尾の行を二字に作る。一方「立石」は、各句末尾の行を必ず一字に作り、はたしてそれは「巖のそびえたるが並びて立ちたる様」となる様相であると思われる。

右に取り上げた「立石」と「木立」それぞれの書体は、ふたつの文字集段に構成されたものとして、世尊寺流「草之形」と日光本との書体に類似していると考えられる。図1は、その類似性を示したものである。

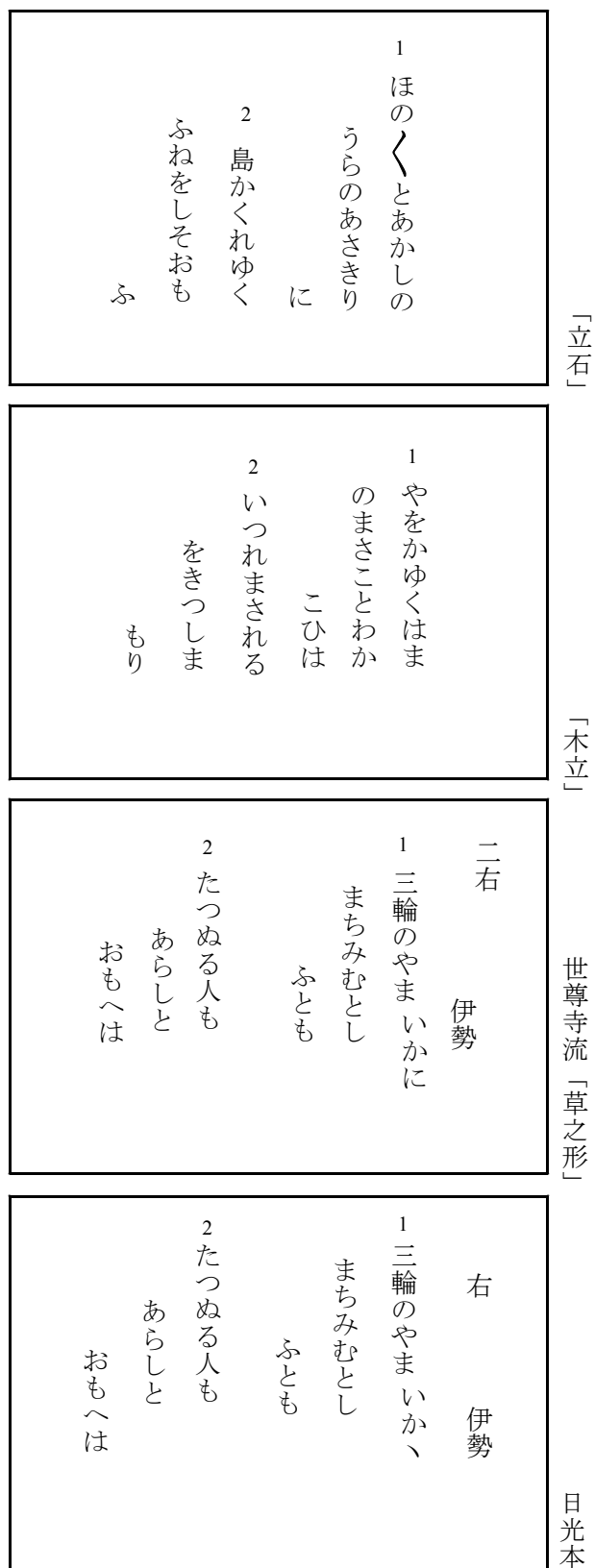


図1 「立石」「木立」と世尊寺流「草之形」・日光本の書体

ちびに、

喩へば、是を「四行木立」とも云ふ。

とあるように、集段末尾の行を調整することによって、「立石」を「四行木立」に変形することが可能である。図2は、「立石」の変形を世尊寺流「草之形」と日光本の書体に見られた集段中の異同に照合して示したものである。

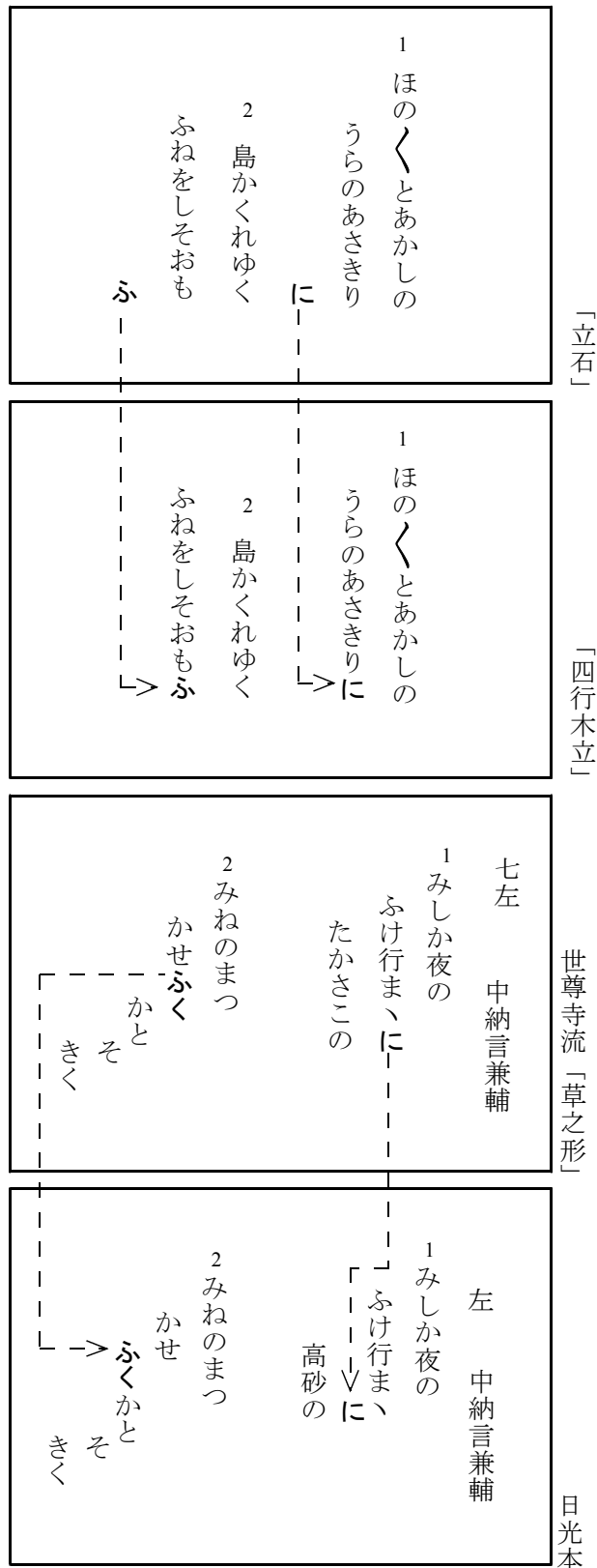


図2 「立石」の変形と  
世尊寺流「草之形」・日光本の書体

最後に「藤花」の型をみておこう。

【本文】

藤花者五七五ノ句一行七々ノ句一行是ヲバ頭ヲヒトシク下ヲ不同ニ朗詠ノ歌ト懷紙ヲモ如此書ベキ也「異本ニ短冊ニカヤウニ書ト云々」

ほのく／＼とあかしの浦のあさきりに

しまかくれゆくふねをしそ思ふ

五行ニカク藤花ノ様アリ是ハ杳冠等ノ歌ヲカク時ノ風情也

からころも

五

きつゝなれにし

七

つましあれは

五

はるくきぬる

七

たひをしそおもふ

七

【訓み下し文】

「藤花」は、五七五の句一行、七々の句一行。是をば、頭をひとしく、下を同じからざるに、朗詠の歌と懷紙をも此くの如く書くべきなり。「異本に「短冊にかやうに書く」ト云々」

是を「二行木立」とも云ふ

(中略)

五行にかく藤花の様あり。是は杳冠等の歌かく時の風情なり。

(中略)

「藤花」は、藤の花がぶらさがる姿を模型とする型である。したがって、行脚を揃えず、行頭を揃えて書くのは必然である。さらに、「五行藤花」は、「杳冠」の歌、つまり折句の技巧を有する歌の執筆に使用する「藤花」の独特な変形である。

以上のことから、散らし書きは、とりわけ自由な表現を可能にするものの、十四世紀から「立石」「藤花」「木立」の三つの基本型が伝承されていることが確認できた。この三つのうち、「藤花」は懐紙や冊子本専用の型であったため、三十六歌仙扁額とは関係があると想定できない。その一方、「立石」と「木立」の使用には制限がなく、扁額に用いられたことも考えられるのである。

『麒麟抄』巻五に記されている用例から、「立石」と「木立」の基本型は二つの集段に構成されていることが分かる。ただし、「立石」の集段末尾の行は必ず一字となる。「木立」は、集段末尾の行が数字から。さらに、『麒麟抄』巻五の叙述によれば、集段末尾の行を調整することによって、「立石」を「木立」に変形することが可能であると明記されている。ここで注目したいのは、「立石」と「木立」の変形には、行数の異同があるものの、集段に収められる本文、つまり集段の構成には変化がないという点である。本文が同じである限り、一行や二行の異同があっても集段は同様であり、はたして書体も全体的に同様であると見なしえるのである。

それを踏まえると、世尊寺流「草之形」と日光本の書体に見られた集段中の異同の原理は、『麒麟抄』巻五に記されている「立石」の変形と同格な原理と考えられる(図2)。

#### 第四節 むすび

世尊寺流「草之形」と日光本の歌仙和歌の歌仙和歌は、左1人麿・左3家持・右1貫之・右3赤人・右10頼基五首以外、行間の幅を大きく変化させ、行をいくつかの集段に集約して、その集段を四方に散布する書体を見せる。本章の比較検討では、集段の構成、及びその位置づけと配列において、世尊寺流「草之形」と日光本の歌仙和歌の書体が同様であることが明らかになった。また、特徴的な書体を見せる左1人麿・左3家持・右1貫之・右3赤人・右10頼基五首においても、世尊寺流「草之形」と日光本の書体の類似性が明らかとなった。

また、山作氏が指摘された「文字の位置」における異同は、『麒麟抄』巻五に見られたように、集段中の行の調整による異同であることが確認された。集段の構成とその位置づけ・配列が同様である以上、世尊寺流「草之形」と日光本の歌仙和歌の書体に大

きな変化が認められなかった。これは、山作氏が指摘された「各々の句の配置など、様式面においてはほとんど一致する」現象であるとも思われる。

最後に、集段の位置づけと配列を基に、世尊寺流「草之形」と日光本の歌仙和歌の書体の類型について述べておきたい。

第一には、集段を四方に散布する三十一首の書体があり、この類型を仮に「雁行書き」と名付けておきたい。さらに、集段の位置づけを基に、雁行書きのを「縦長」と「横長」の二種類に分析したい。

縦長の雁行書きの特徴は、紙面の右上から左下へと最も長い集段を配置することである(図3)。この集段は、歌仙和歌の書の中心軸となり、他の集段は脇軸として、その上下に配置される。そこで、中心軸の上に配置される脇軸は、紙面の左側を占める。その一方、中心軸の下に配置される脇軸は、紙面の右側を占める。縦長の雁行書きには中心軸が必要不可欠な様相であるものの、片方の脇軸が欠けることも確認された。したがって、縦長の雁行書きは三種類ある。まずは、中心軸の上下に脇軸を配置するものには、左4業平・右4遍昭・左5素性・右5友則・右8高光・左9公忠・右12信明・右13順・左18兼盛・右18中務の十首がある。その類型は図3・1のとおりである。次に、上の脇軸を欠いて、下の脇軸のみを配置するものには、左6猿丸・左15是則の二首がある。その類型は図3・2のとおりである。最後に、下の脇軸を欠いて、上の脇軸のみを配置するものには、右7朝忠・右9忠岑・左11敏行・左12宗于・左13清正・右15元真の六首がある。その類型は図3・3のとおりである。

右11重之の一首の書体は例外である。これは、二つの集段を上下に重ねながら、中心軸の位置が見出しがたく、特殊な形態を見せるものと考えられる。ここで大事なものは、特殊な右11重之も含み、縦長の雁行書きの十九首は、世尊寺流「草之形」と日光本において一致することである。

横長の雁行書きの特徴は、集段を左右に配列することである(図4)。したがって、左右に並ぶ集段の数によって、横長の雁行書きを三種類に分類することができる。まず、二つの集段を横長に列べるものには、左2躬恒・右2伊勢・左7兼輔・左10斎宮女御・左14興風・右14元輔・左16小大君・右16仲文の八首がある。その類型は図4・1のとおりである。次に、三つの集段を横長に列べるものには、右6小町・左17能宣・右17忠見の三首がある。その類型は図4・2のとおりである。最後に、四つの集段を横長に列べるものには左8敦忠一首がある。その類型は図4・3のとおりである。

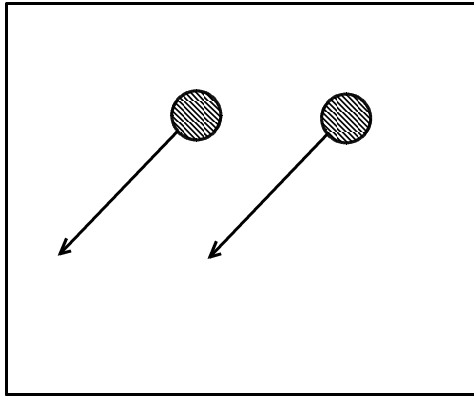


図4 横長雁行書きの書体

図4・1

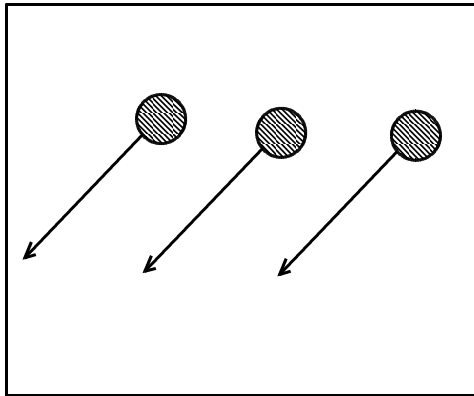


図4・2

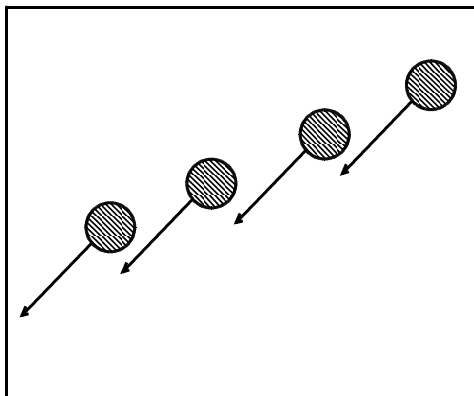


図4・3

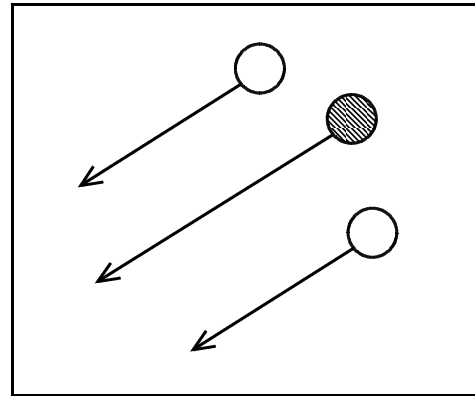


図3 縦長雁行書きの書体

図3・1

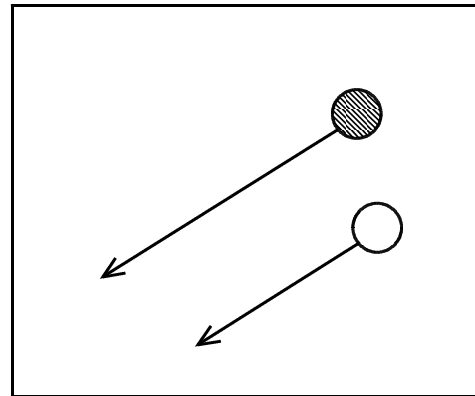


図3・2

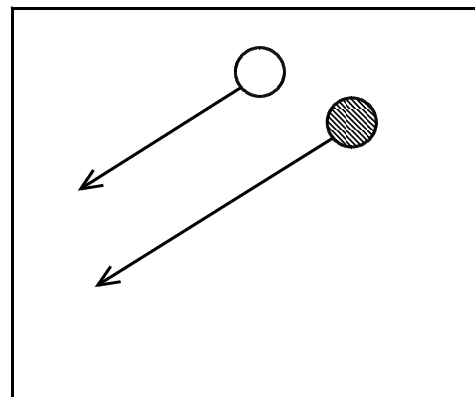


図3・3



第二には、左1人麿・右1貫之・左3家持・右3赤人・右10頼基の五首の書体の類型がある。日光本においてこの五首は、世尊寺流「草之形」に見られる行数が同等であり、各行の配置、またその頭と脚の高低も「草之形」に一致している。以上のことから、日光本は世尊寺流「草之形」に類する歌仙和歌の書体を受容したことが確認できた。したがって、後水尾天皇の宸翰に記されている「日光の哥仙、哥のちらし作者等、先度借用申し候内、世尊寺芳翰を以て模写せしめ候」という内容は、歌仙和歌の書において、世尊寺流「草之形」に類するものが日光本の祖本であることを指すものということが、従来よりも一層鮮明となった。

注

- (1) 山作良之「日光東照宮蔵三十六歌仙扁額製作の経緯」(『大日光』第七十九号、二〇〇九年三月、日光東照宮)
- (2) 『久能山叢書 第四編 資料編下』(一九七六年、久能山東照宮社務所)
- (3) (1) 前掲論文。
- (4) 世尊寺流「草之形」の書は、国文学研究資料館に保管されるマイクロフィルムを使用させていただいた。日光本の書は、いわき明星大学教授・田嶋一夫氏を介して、日光東照宮宝物館・山作良之氏よりいただいた画像に拠った。
- (5) 早川純三郎編『日本書画苑』(一九一四年十月、国書刊行会) 所収

### 第三章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵 —装束を中心に—

#### 第一節 はじめに

元和三年（一六一七）、最古の東照宮三十六歌仙扁額二本が奉納されてから正保三年（一六四六）までの二十九年間、各地の東照宮に奉納されて今日に伝わる三十六歌仙扁額は、次のとおりである（1）。

- (1) 元和三年（一六一七） 栃木・日光東照宮（以下、「日光本」と略称）
- (2) 元和三年（一六一七） 静岡・久能山東照宮（以下、「久能山本」と略称）
- (3) 元和七年（一六二一） 茨城・水戸東照宮（以下、「水戸本」と略称）
- (4) 寛永十七年（一六四〇） 埼玉・仙波東照宮（以下、「仙波本」と略称）
- (5) 寛永二十一年（一六四四） 群馬・世良田東照宮（以下、「世良田本」と略称）
- (6) 寛永二〇年（一六四三） 石川・尾崎神社（以下、「金沢本」と略称）
- (7) 正保三年（一六四六） 愛知・滝山東照宮（以下、「滝山本」と略称）

本章では、装束を基準に、これら七本の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵の様式を検討し、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵の主流を明らかにすることを目的とする（2）。

三十六歌仙絵は、「女歌仙絵」「僧侶歌仙絵」「男歌仙絵」に分類することができる。

女歌仙絵五名の装束はすべて女房装束であり、僧侶歌仙絵二名の装束は僧衣である。一方、男歌仙絵の装束に著しい相違点が見られた。以下、これら男歌仙絵二十九名に注目し、その装束について考察を加える。

## 第二節 束帯の男歌仙絵

男歌仙二十九名の装束は、次の五種類に描き分けられる。

- (1) 文官束帯
- (2) 武官束帯
- (3) 衣冠
- (4) 狩衣
- (5) 直衣

(1) 文官束帯・(2) 武官束帯にみられる「束帯」とは、「昼の装束」ともいい、平安時代以降の有位男性の正装である。「束帯」は、衣服の腰を帯で束ねるといふ意味である。衣服令に規定された朝服が和様化したもので、礼服の着用が即位儀に限られるようになると、実質上の礼装ともなった。

束帯の構成は、冠・位袍・半臂はんび・半襲はんじゆ・衿しん・表袴おもてのはかま・大口・右帯・魚袋・襪しゃく・履しん・笏しやく・檜扇・帖紙たとうである。ここからは、(1) 文官束帯・(2) 武官束帯の歌仙絵の装束を確認することとする。

### (1) 文官束帯

文官束帯は、垂纓すいぎの冠、縫腋ほうえきの袍を着け、勅許を得た者は平緒を結んで帯剣する。日光本と久能山本では、文官束帯の男歌仙は左3家持(☒1)・左7兼輔(☒2)・左8敦忠(☒3)・左17能宣(☒4)・右2貫之(☒5)・右5友則(☒6)・右7朝忠(☒7)・左9公忠(☒8)・左15是則(☒9)の九名である。



图2-4 世良田本



图2-1 日光本



图1-4 世良田本



图1-1 日光本



图2-5 仙波本



图2-2 久能山本



图1-5 仙波本



图1-2 久能山本



图2-6 金沢本



图2-3 水戸本



图1-6 金沢本



图1-3 水戸本



图2-7 滝山本



图1-7 滝山本



图4-4 世良田本



图4-1 日光本



图3-4 世良田本



图3-1 日光本



图4-5 仙波本



图4-2 久能山本



图3-5 仙波本

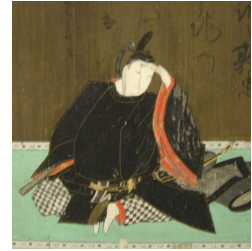


图3-2 久能山本



图4-6 金沢本



图4-3 水戸本



图3-6 金沢本



图3-3 水戸本



图4-7 滝山本



图3-7 滝山本



图6-4 世良田本



图6-1 日光本



图5-4 世良田本



图5-1 日光本



图6-5 仙波本



图6-2 久能山本



图5-5 仙波本



图5-2 久能山本



图6-6 金沢本



图6-3 水戸本



图5-6 金沢本



图5-3 水戸本



图6-7 滝山本



图5-7 滝山本



图8-4 世良田本



图8-1 日光本



图7-4 世良田本



图7-1 日光本



图8-5 仙波本



图8-2 久能山本



图7-5 仙波本



图7-2 久能山本



图8-6 金沢本



图8-3 水戸本



图7-6 金沢本



图7-3 水戸本



图8-7 滝山本



图7-7 滝山本

日光本と久能山本をはじめ、六本では垂纓冠をかぶり、袍と表袴を着用し、笏を右手で持っている。また、背中から裾が延びている。その一方、仙波本のみでは、裾がなく表袴から指貫への転換がある上、衣冠で描かれている。



図9-1 日光本



図9-2 久能山本



図9-3 水戸本



図9-4 世良田本



図9-5 仙波本



図9-6 金沢本



図9-7 滝山本

日光本と久能山本をはじめ、六本では垂纓冠をかぶり、袍と表袴を着用し、笏を右手で持っている。また、背中から裾が延びている。その一方、仙波本のみでは、裾がなく表袴から指貫への転換がある上、衣冠で描かれている。

## (2) 武官束帯

武官束帯は、武官は卷纓の冠に綬を加え、袍を着けて帯剣し、弓矢を入れた胡を装備する。

日光本と久能山本では、武官束帯の男歌仙は左4業平(図10)・左11敏行(図11)・右8高光(図12)・右9忠岑(図13)の四名である。日光本によって装束を示すと、次のとおりである。





图11-4 世良田本



图11-1 日光本



图10-4 世良田本



图10-1 日光本

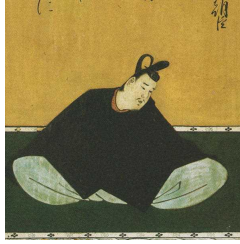


图11-5 仙波本



图11-2 久能山本



图10-5 仙波本



图10-2 久能山本



图11-6 金沢本



图11-3 水戸本



图10-6 金沢本



图10-3 水戸本



图11-7 滝山本



图10-7 滝山本

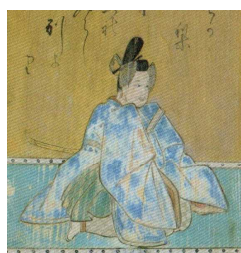


图13-4 世良田本

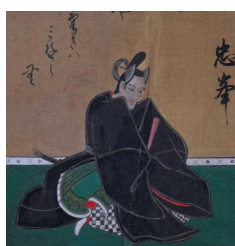


图13-1 日光本

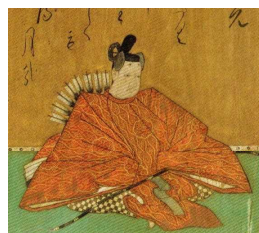


图12-4 世良田本



图12-1 日光本



图13-5 仙波本



图13-2 久能山本



图12-5 仙波本



图12-2 久能山本



图13-6 金沢本



图13-3 水戸本



图12-6 金沢本



图12-3 水戸本



图13-7 滝山本

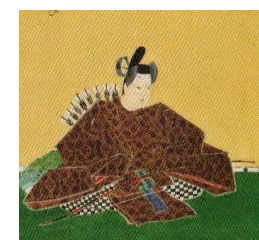


图12-7 滝山本

### 第三節 衣冠の男歌仙絵

衣冠は、束帯の略装で、宿直の際に用いたため、宿衣ともいう。臨時の行幸啓の供奉の際や私的な行事の際などに着用され、宮中への参内には、特例を除いて平安時代末までは認められなかった。

日光本と久能山本では、衣冠の男歌仙は左2躬恒(図14)・左12宗子(図15)・右10頼基(図16)の三名である。日光本によって装束を示すと、次のとおりである。



図14-4 世良田本



図14-1 日光本



図14-5 仙波本



図14-2 久能山本



図14-6 金沢本



図14-3 水戸本



図14-7 滝山本



图16-4 世良田本



图16-1 日光本



图15-4 世良田本



图15-1 日光本



图16-5 仙波本



图16-2 久能山本



图15-5 仙波本



图15-2 久能山本



图16-6 金沢本



图16-3 水戸本



图15-6 金沢本



图15-3 水戸本



图16-7 滝山本



图15-7 滝山本

#### 第四節 狩衣の男歌仙絵

狩衣は、公家男子の略装で、狩猟に用いる衣服の意である。天皇・東宮以外は趣向を凝らして広く用いた。盤領・闕腋の襖の一種で、狩襖ともいい、身幅が狭く、袖には緒をつける。烏帽子・狩衣衣・単・指貫(狩袴)・下袴・扇・帖紙・浅沓の組合せで用いる。

狩衣の男歌仙は左6猿丸(図17)・左13清正(図18)・左14興風(図19)・左18兼盛(図20)・右3赤人(図21)・右11重之(図22)・左12信明(図23)・左13順(図24)・左14元輔(図25)・左15元真(図26)・左16仲文(図27)・左17忠見(図28)の十二名である。日光本によって装束を示すと、次のとおりである。



図17-4 世良田本



図17-1 日光本



図17-5 仙波本

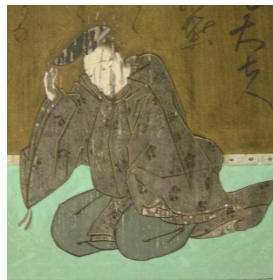


図17-2 久能山本



図17-6 金沢本



図17-3 水戸本



図17-7 滝山本



图19-4 世良田本



图19-1 日光本



图18-4 世良田本

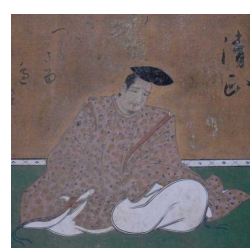


图18-1 日光本



图19-5 仙波本

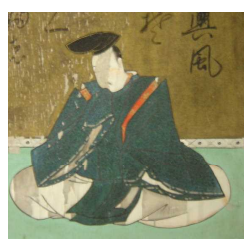


图19-2 久能山本



图18-5 仙波本



图18-2 久能山本



图19-6 金沢本



图19-3 水戸本



图18-6 金沢本



图18-3 水戸本



图19-7 滝山本

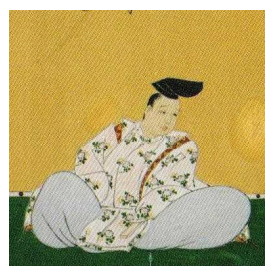


图18-7 滝山本



图21-4 世良田本



图21-1 日光本

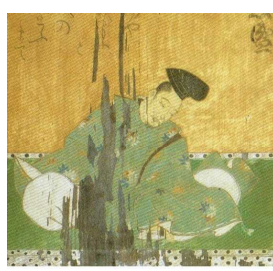


图20-4 世良田本

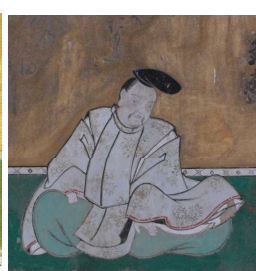


图20-1 日光本

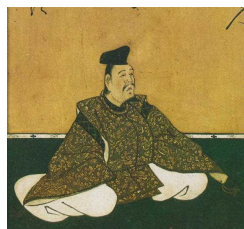


图21-5 仙波本



图21-2 久能山本



图20-5 仙波本



图20-2 久能山本



图21-6 金沢本



图21-3 水戸本



图20-6 金沢本



图20-3 水戸本



图21-7 滝山本



图20-7 滝山本



图23-4 世良田本



图23-1 日光本



图22-4 世良田本



图22-1 日光本



图23-5 仙波本



图23-2 久能山本



图22-5 仙波本



图22-2 久能山本



图23-6 金沢本



图23-3 水戸本



图22-6 金沢本



图22-3 水戸本

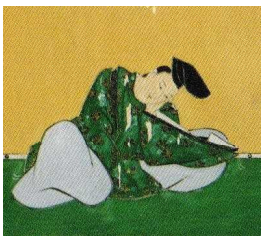


图23-7 滝山本



图22-7 滝山本





图25-4 世良田本



图25-1 日光本



图24-4 世良田本



图24-1 日光本



图25-5 仙波本



图25-2 久能山本



图24-5 仙波本



图24-2 久能山本



图25-6 金沢本



图25-3 水戸本



图24-6 金沢本



图24-3 水戸本



图25-7 滝山本



图24-7 滝山本



图27-4 世良田本



图27-1 日光本

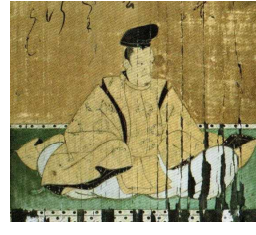


图26-4 世良田本



图26-1 日光本

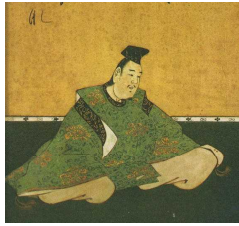


图27-5 仙波本



图27-2 久能山本



图26-5 仙波本



图26-2 久能山本



图27-6 金沢本



图27-3 水戸本



图26-6 金沢本



图26-3 水戸本



图27-7 滝山本



图26-7 滝山本



図28-1 日光本



図28-2 久能山本



図28-3 水戸本

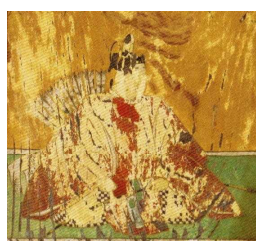


図28-4 世良田本

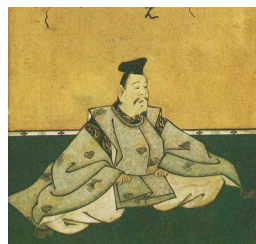


図28-5 仙波本



図28-6 金沢本



図28-7 滝山本

図28 壬生忠見には、装束の異同が見られる。

日光本と久能山本をはじめ、六本では烏帽子をかぶり、狩衣と指貫を着用して描かれている。世良田本に限って、巻纓の冠をかぶり、袍を着用し弓矢を構える武官束帯で描かれている。

### 第五節 直衣の男歌仙絵

直衣は、平安時代以降、天皇・上皇以下の上級貴族・公家が用いた日常着である。位色に関係しないため、位袍に対して、雑袍とよばれる。本来は私邸内での常用着であったが、雑袍宣旨、すなわち直衣勅許を受けた臣下は、参内の際にも着用することが許された。形態的には盤領・有欄・縫腋という朝服の袍に準ずるもので、直衣装束は冠・直衣・当帯・衣・单・指貫・下袴・檜扇・浅沓で構成される。通常は烏帽子をかぶるが、参内の際に冠は文武官とも垂纓の冠を用いた(冠直衣)。さらに改まった際には、直衣

装束に下襲を加えた(直衣布袴)。

直衣の歌仙絵は、左1柿本人麿(図29)のみである。烏帽子をかぶり、直衣・着袍・指貫を着する。



図29-1 日光本



図29-2 久能山本



図29-3 水戸本



図29-4 世良田本



図29-5 仙波本



図29-6 金沢本

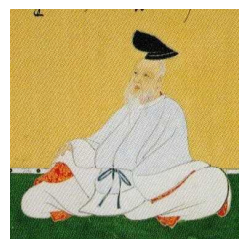


図29-7 滝山本

## 第六節 むすび

以上では、女歌仙五名・僧侶歌仙二名・男歌仙二十三名、合計三十名の歌仙の装束は、七本ともに同じ装束で描かれていることが確認された。三十六名のうち三十名という数字は、三十六歌仙の約八十三パーセントを占める。故に、装束を基準に、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵の様式の類似性は、かなり高い。

装束の異同を見せる歌仙絵は六名であり、その異同は仙波本と世良田本の二本のみに見られた。そのため、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本のうち、日光本・久能山本・水戸本・金沢本・滝山本の五本は歌仙絵すべての装束が同じであることが明らかと

なる。

歌仙絵すべての装束が同じであることによって、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵の原型の存在が想定される。このような歌仙絵の原型の性格を明かすにはさらなる検討が必要と思われるが、ここで装束に関して完全に一致する日光本・久能山本・水戸本・金沢本・滝山本五本の歌仙絵の様式を、仮に江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の主流としておきたい。

装束の異なる歌仙絵が、仙波本と世良田本に限って、左9公忠・左11敏行・左12宗子・左15是則・右10頼基・右17忠見の六名である。

この六名の装束の異同は、何を意味するのであろうか。以下、この歌仙絵六名の装束を江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵の主流と照合して、その異同の性格を考察しておきたい。

第一に、仙波本に限る異同がある。これは、左9公忠・左15是則・右10頼基の三名である。左9公忠(図8)・左15是則(図9)の二名の装束は衣冠である。右10頼基(図16)の装束は文官束帯である。東照宮の主流では、左9公忠・左15是則の二名は文官束帯であり、右10頼基は衣冠である。つまり、仙波本の装束の異同は、文官束帯と衣冠との交替にあたるものである。その理由として考えられるのは、衣冠が束帯の略装であることで、両方が有位男性の装束であったことである。同類の冠をかぶることも衣冠と束帯の高度で強力な類似性を表しており、はたして、仙波本のこの歌仙絵三名に見られた束帯から衣冠への変換はさほど大きな問題とならない。したがって、仙波本のこの歌仙絵三名の装束の異同は、それぞれの人物像に大きな変化をもたらすものではなく、東照宮の主流に近いものと見なされるのである。

第二に、世良田本に限る異同がある。これは、右17忠見(図16)一名のみである。東照宮の主流で狩衣の姿で描かれるのに対して、世良田本には武官束帯で描かれている。狩衣と文官束帯とは、冠がまったく異なる。したがって、狩衣から束帯への転換は、歌仙として描かれるときに、大きな位階の格差が生じるのである。故に、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵において、世良田本のこの右17忠見の装束は最も大きな異同である。したがって、世良田本のこの右17忠見は、東照宮の主流とは別系の歌仙絵の様式が元となったと推測される。

第三に、仙波本と世良田本に共通する異同がある。これは、左11敏行(図16)と左12宗子(図16)の二名である。東照宮の主流では、敏行が武官束帯であり、宗子が衣冠であるのに対して、仙波本と世良田本には、敏行が衣冠となり、宗子が武官束帯となる。

この場合も、仙波本限定の異同で見られたように、束帯と衣冠との交替が行われている。そのため、仙波本・世良田本のこの歌仙絵二名はその装束の異同がさほど大きな問題とならず、東照宮の主流に近いと推測される。

以上の異同を整理すれば、仙波本に限るものと仙波本・世良田本に共通するものは、本格的な異同ではなく、東照宮の主流に対するバリエーションと見なされるのである。このように、東照宮の主流の原型は、三十六名において固定された装束ではなく、ある程度の多様性を許したと考えられる。ただし、バリエーションが許された範囲は、位階における歌仙絵の描写を根本的に変えない程度であったことは、さきに確認したとおりである。したがって、東照宮の主流の歌仙絵には、一定の拘束力が働いていることが重要である。

その一方、世良田本の右17忠見の描写の意図が根本的に変化したことは、さきに述べた世良田本に限る異同で確認したとおりである。これは、世良田本における大きな問題点である。ここで強調しておきたいことは、世良田本には東照宮の主流と明確に異なる様式の歌仙絵が見られたことである。なぜ右17忠見一名の性格は東照宮の主流の様式から外れているのか。さらに調査を進めることとし、続稿を期することにする。

以上のことから、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本のうち、五本は装束を基準に歌仙絵の様式が完全一致することが確認された。したがって、この五本の歌仙絵は同一の原型が基となったと思われる。類似するこの五本の歌仙絵の様式はここで東照宮の主流と考え、その特徴が男歌仙絵二十九名を五種類の装束で描き分けることである。さらに、性格が近い束帯と衣冠の交替を許す多様性も、東照宮の歌仙絵の主流の特徴の一つである。

注

- (1) 拙稿「江戸初期の東照宮と三十六歌仙扁額―日光東照宮・久能山東照宮・仙波東照宮・滝山東照宮について」(『大東文化大学日本語学科二十周年記念論文集』二〇一三年一月、大東文化大学外国語学部日本語学科)。同じ「東照宮扁額三十六歌仙における歌仙絵の類型性―女歌仙絵・僧侶歌仙絵を中心に」(『東アジア比較文化研究』第十三号、二〇一四年六月、東アジア比較文化国際会議)

(2) 日光本の歌仙絵は、いわき明星大学教授・田嶋一夫氏を介して、日光東照宮宝物館・山作良之氏よりいただいた画像に拠った。久能山本の歌仙絵は、神戸女子大学教授・鈴鹿千代乃氏及び清州市日吉神社・三輪隆裕宮司を介して、久能山東照宮・落合偉洲宮司よりいただいた画像に拠った。水戸本の歌仙絵は、土浦市立博物館編『茨城の歌仙絵―華麗なる歌人の姿』(第23回特別展、一九九九年十月、土浦市立博物館)の画像に拠った。世良田本の歌仙絵は、世良田東照宮編『板面著色「三十六歌仙図」修理報告書』(二〇〇八年、世良田東照宮)の画像に拠った。仙波本の歌仙絵は、ZOOM美術館編『岩佐又兵衛―歌仙絵』(一九八四年六月、ZOOM美術館)の画像に拠った。また、川越市立博物館編『徳川三代の時代と川越』(開館十周年特別展、二〇〇〇年十月、川越市立博物館)及び折井貴恵編『小江戸川越江戸絵画―職人尽絵と三十六歌仙額』(開館十周年・市制施行九十周年記念特別展、二〇一二年十一月、川越市立美術館)をも参観した。金沢本の歌仙絵は、金沢市立玉川図書館近世資料館編『加賀の東照宮 尾崎神社展』(二〇〇八年十一月、金沢市立玉川図書館近世資料館)の画像に拠った。滝山本の歌仙絵は、大東文化大学教授・藏中しのぶ氏よりいただいた、故・藏中スミ氏が撮影された写真に拠った。また、岡崎市立美術館編『松平・徳川氏の寺社―岡崎に残る遺産と歴史』(特別企画展、二〇〇〇年四月、岡崎市立美術館)の画像をも参観した。

## 第四章 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵 — 構図を中心に —

### 第一節 はじめに

元和三年（一六一七）、最古の東照宮三十六歌仙扁額二本が奉納されてから正保三年（一六四六）までの二十九年間、各地の東照宮に奉納されて今日に伝わる東照宮歌仙扁額は、次のとおりである（1）。

- (1) 元和三年（一六一七） 栃木・日光東照宮（以下、「日光本」と略称）
- (2) 元和三年（一六一七） 静岡・久能山東照宮（以下、「久能山本」と略称）
- (3) 元和七年（一六二一） 茨城・水戸東照宮（以下、「水戸本」と略称）
- (4) 寛永十七年（一六四〇） 埼玉・仙波東照宮（以下、「仙波本」と略称）
- (5) 寛永二十一年（一六四四） 群馬・世良田東照宮（以下、「世良田本」と略称）
- (6) 寛永二〇年（一六四三） 石川・尾崎神社（以下、「金沢本」と略称）
- (7) 正保三年（一六四六） 愛知・滝山東照宮（以下、「滝山本」と略称）

本章では、江戸初期の東照宮に重要な装飾品の一つとして奉納された三十六歌仙扁額の歌仙絵の構図を、人物の身体と顔の向きを基準に調査し、それが定型的な様式を見せるものか否かについて検討する（2）。

見通しとして、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵の構図は、主に同一の様式によると考えられ、第三章で述べたように、その様式はある程度の多様性を許すことを示したい。



## 第二節 身体・顔の向き的重要性と歌仙絵の構図

扁額にいかにかに歌仙絵を描くべきであったのか、その旨については九州大学付属図書館蔵『世尊寺家三十六人歌合真之形散形』（以下、世尊寺流「真之形」と略称）から知られる(3)。

世尊寺流「真之形」は、世尊寺流の伝書の集成・書写に努めた森尹祥が書写したものである。『世尊寺家三十六人歌合行之形散形』（以下、世尊寺流「行之形」と略称）と『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』（以下、世尊寺流「草之形」と略称）とともに、神前に飾る歌仙和歌の書法を書き留めるものである。

「真之形」「行之形」「草之形」ともに、歌仙和歌の書のみならず、紙面の下段に歌仙絵の上部を記す。

世尊寺流「真之形」の奥書では、「真」「行」「草」三つの歌仙和歌の書法について次のように記されている(4)。

### 【本文】

以這散形為真其故者人丸貫之兼盛中務共以向合也以其体書者為真以頭面之向書者為行各從左以順書者為草已下可点見云尔

### 【訓み下し文】

這の散らし形を以て「真」と為す。

其の故は、人丸・貫之、兼盛・中務、共に向き合ふを以てなり。

其の体を以て書くは、「真」と為す。

頭面の向きを以て書くは、「行」と為す。

各、左に従り順を以て書くは、「草」と為す。

已下、点見すべし、「云」尔。

### 【現代語訳】

この散らし書きは「真」の形である。

その理由は、人丸と貫之の一番組から兼盛と中務十八番組までの三十六歌仙は、二人ずつ左右に配置される上で向き合うからである。

その体裁を基に歌仙和歌の散らし書きを書くのは、「真」の形である。

歌仙絵の頭面の向きを基に歌仙和歌の散らし書きを書くのは、「行」の形である。

各歌仙和歌の散らし書きを、歌仙からの視点の左より順調に書くのは「草」の形である。それより下、点見するべきである。

この奥書で論じられているのは、「真之形」「行之形」「草之形」三つの書法における歌仙和歌の方向である。「真之形」の歌仙和歌の方向を規定するのは、「共に向き合ふ」「其の体」である。この点について、新藤協三氏は次のとおりに解釈された(5)。

先に、構図については三冊(引用者注:「真之形」「行之形」「草之形」)とも基本的に一致する旨を述べたが、三冊に共通する歌仙絵姿は必ずしも左右歌人が向き合う図柄となっておらず、したがって、「人丸貫之兼盛中務共以向合」―人丸・貫之と兼盛・中務の二組にのみ限定する意図ではなく、巻頭歌人と巻末歌人とを掲げて全体を代表させる―は、歌仙絵姿の図柄の向き説明ではなく、書写された和歌について指摘するものとわかる。即ち、〈真之形〉の散形は左右歌人の歌が向き合う体裁、左方歌人は左から右へ、右方歌人は右から左へと和歌を書写してある。

世尊寺流「行之形」の歌仙絵に関して記される「頭面の向き」を再確認すると、左10齋宮女御・左16小大君・右11重之の三名のみの顔の向きが判然としておらず、その他すべての歌仙絵の身体が明瞭に左右に向き合う姿を示していることが確認できる。問題となるこの三名の歌仙絵は次のとおりである。

齋宮女御(図1)は、最古の歌仙絵『佐竹本三十六歌仙絵巻』より特殊な構図をとる歌仙絵である。まず、几帳の蔭で姿を隠している唯一の歌仙である。これは、齋宮女御が村上天皇の女御すなわち皇室の人物であったことによるものである。その姿に関して、几帳から出る顔の半分しか窺えない。しかし、その頭面が几帳の左端から出ていることから、身体がおおむね左の方に向いて

いることが察せられるのである。

小大君(図2)は、世尊寺流「行之形」のうち、斜め後ろ姿で描かれている唯一の歌仙絵である。斎宮女御のように、小大君も紙面の左の方に顔を振り向いていることから、身体もおおむね左を向くことになるのである。

重之(図3)は、世尊寺流「行之形」のうち、顔が正面に向いている唯一の歌仙絵である。これは、『藤房本三十六歌仙絵巻』にも見られる重之の姿である(6)。しかし、左手でほおづえをついていることから、頭部を左手に委ねていると言え、それ故、身体は右の方に向くことになるのである。

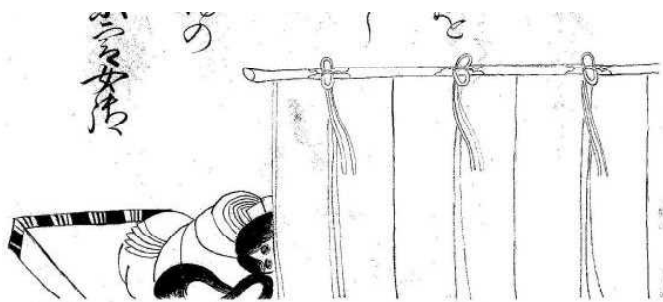


図1 世尊寺流「行之形」  
斎宮女御

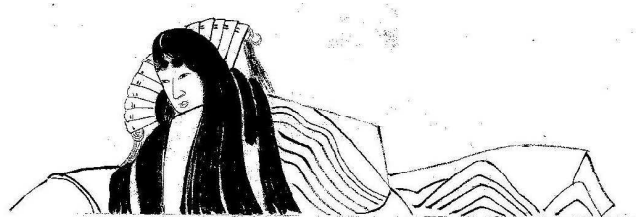


図2 世尊寺流「行之形」  
小大君

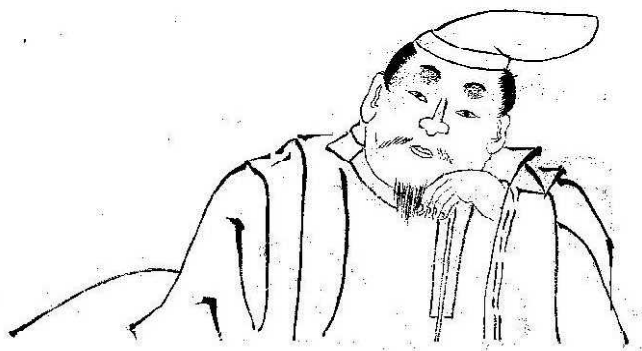


図3 世尊寺流「行之形」  
重之

さらに、世尊寺流「行之形」では、歌仙和歌の発生点となる基準は、歌仙絵の頭面の向きであるとされる。山作良之氏は、その

内容を図4のとおりにまとめられた(7)。

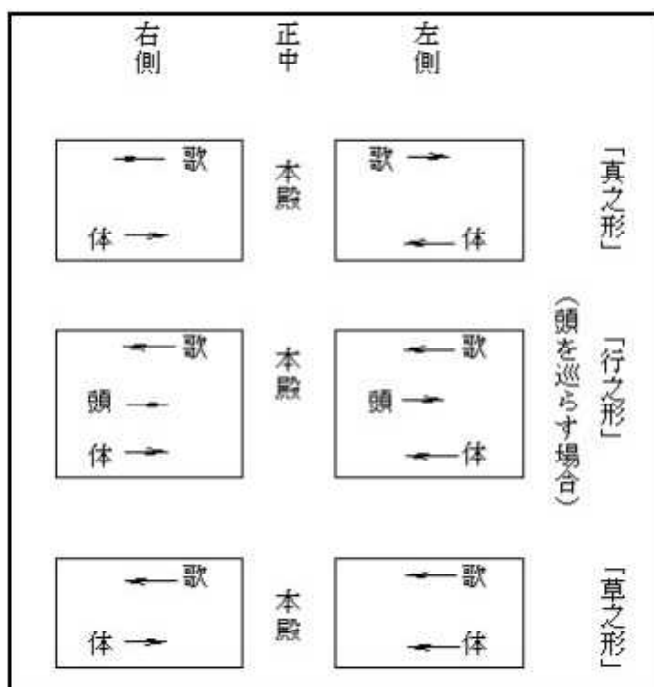


図4 「真」「行」「草」の歌仙和歌と歌仙絵の向き

世尊寺流「行之形」では、顔が左に向いている左側歌仙の場合、歌仙和歌が左から右へと書かれる。顔が右に向いている右側歌仙の場合、歌仙和歌は右から左へと書かれる。しかし、左側歌仙のうち、顔が左ではなく右に向くように描かれる歌仙絵もある。この場合、歌仙和歌は右側歌仙と同じく、右から左へと書かれることになる。これによって、扁額に描かれる歌仙絵の構図において、三つの類型の存在が確認される。

第一に、身体も顔も左向きに描かれる歌仙絵である。これらは、すべて左側の歌仙絵である。第二に、身体も顔も右向きに描かれる歌仙絵である。これらは、すべて右側の歌仙絵である。第三に、身体と顔の向きが交差する歌仙絵である。第三番の構図の歌仙絵は、世尊寺流「行之形」においてすべて左側に配置されるものである。このように、右側の歌仙絵が身体も顔も右向きであるのに対して、左側の歌仙絵は二つの構図に描かれていることとなる。

世尊寺流「行之形」の歌仙絵の構図は、次のとおりに整理できる。

- (1) 身体も顔も左向き …… 左1人麿・左4業平・左5素性・左6猿丸・左7兼輔・左9公忠・左10斎宮女御・左11敏行  
 左12宗子・左14興風・左16小大君・左17能宣(十二名)
- (2) 身体と顔の向きが交差…… 左2躬恒・左3家持・左8敦忠・左13清正・左15是則・左18兼盛(六名)

〈3〉 身体も顔も左向き

… 右 1 貫之・右 2 伊勢・右 3 赤人・右 4 遍昭・右 5 友則・右 6 小町・右 7 朝忠・右 8 高光  
右 9 忠岑・右 10 頼基・右 11 重之・右 12 信明・右 13 順・右 14 元輔・右 15 元真・右 16 仲文  
右 17 忠見・右 18 中務 (十八名)

以上のことから、問題となる左 10 齋宮女御・左 16 小大君・右 11 重之三名の歌仙絵の向きは、歌仙和歌の方向を規定するものとして、予測どおりに意図されていることが確認される。それぞれの歌仙和歌の方向を基に、特徴的な描き方を示しながら左 10 齋宮女御と左 16 小大君は左向きで、右 11 重之が右向きの歌仙絵となっていることが明らかとなる。

最後に、世尊寺流「草之形」は歌仙和歌を「従左以順書」く書法である。これについて、新藤氏は次のとおりに述べられた(8)。

〈草之形〉は三六首全て「右」から左へ書写するので、「従左」は書面の左ではなく、絵姿の歌人から見ての「左従り」の意かと推測される。

世尊寺流「草之形」の歌仙和歌は全て右から左へと書かれることで、この書法は歌仙絵の姿と一切関係がない。

つまり、世尊寺流「行之形」の奥書では、神前に奉納される三十六歌仙の歌仙絵の向きの重要性について言及されたのである。三十六歌仙扁額の歌仙絵の向きは、扁額が拝殿の壁に掲げられた位置を基に「左」か「右」に意図されていたものと考えられる。江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵も、どの様な構図で意図されたのであろうか。その歌仙絵の構図の類似性を論じるには、世尊寺流「行之形」の歌仙絵ではなく、最初に制作された日光本の歌仙絵を基準に用いることが妥当である。

### 第三節 日光本における歌仙絵の構図の類型

次に、日光本の歌仙絵の向きの分析を試みることにする。

身体と顔の向きを基準に、日光本の歌仙絵は三つの構図に意図されたことが確認される。

第一に、身体も顔も左向きの歌仙絵がある。その姿は、次のとおりである。



图13 左12宗子



图9 左7兼輔



图5 左1人麿



图14 左14興風



图10 左9公忠



图6 左4素性



图15 左16小大君



图11 左10斎宮女御

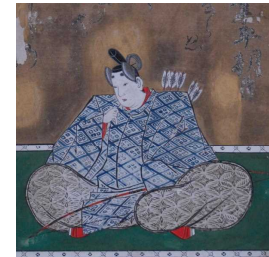


图7 左5業平



图16 左17能宣



图12 左11敏行



图8 左6猿丸

図5から図16までの図版は、日光本において身体も顔も左向きに描かれる十二名の歌仙絵である。これら十二名は、すべて拝殿の左側に配置される歌仙絵である。この歌仙絵十二名の向きは、世尊寺流「行之形」の歌仙絵にも共通している。第二に、身体と顔の向きが交差する歌仙絵がある。その姿は、次のとおりである。



図17 左2射恒



図18 左3家持



図19 左8敦忠



図20 左14清正



図21 左15是則



図22 左18兼盛

図17から図22までの図版は、日光本において身体と顔の向きが交差するように描かれている六名の歌仙絵である。それらはすべて、構図が身体を左に向けながら、顔を右の方に向けるという共通性がある。また、それらはすべて拝殿の左側に配されている歌仙絵である。この歌仙絵六名の向きも、世尊寺流「行之形」の歌仙絵に共通している。このように、左側の歌仙絵においては、世尊寺流「行之形」と日光本は構図が同様な様式であることが判明した。

第三に、身体も顔も右向きの歌仙絵がある。その姿は、次のとおりである。



图38 右16仲文

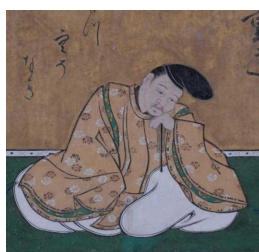


图33 右11重之



图28 右6小町



图23 右1貫之



图39 右17忠見

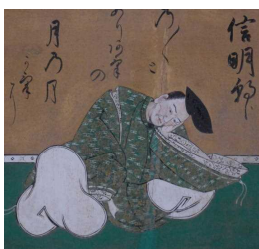


图34 右12信明



图29 右7朝忠

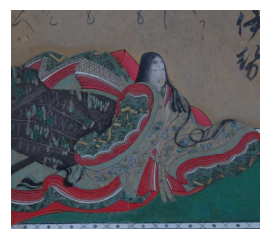


图24 右2伊勢



图40 右18中務



图35 右13順



图30 右8高光



图25 右3赤人



图36 右14元輔



图31 右9忠岑



图26 右4遍昭



图37 右15元真



图32 右10頼基



图27 右5友則



図23から図40までの図版は、日光本において身体も顔も右向きに描かれている十八名の歌仙絵である。これらすべては、拝殿の右側に配置される歌仙絵である。

以上の考察をまとめると、身体と顔の向きを基準に、日光本の歌仙絵を次の類型に分析することができる。

〈1〉身体も顔も左向き …… 左1人麿・左4業平・左5素性・左6猿丸・左7兼輔・左9公忠・左10斎宮女御・左11敏行

左12宗于・左14興風・左16小大君・左17能宣(十二名)

〈2〉身体と顔の向きが交差…左2躬恒・左3家持・左8敦忠・左13清正・左15是則・左18兼盛(六名)

〈3〉身体も顔も右向き …… 右1貫之・右2伊勢・右3赤人・右4遍昭・右5友則・右6小町・右7朝忠・右8高光

右9忠岑・右10頼基・右11重之・右12信明・右13順・右14元輔・右15元真・右16仲文

右17忠見・右18中務(十八名)

以上のことから、日光本の歌仙絵は身体と顔の向きを基に三つの類型に描かれていることが判明した。また、この三十六歌仙絵の構図の設定は、世尊寺流「行之形」にも共通していることから、日光本の歌仙絵が奉納される三十六歌仙扁額として意図されたことも推定される。日光本以降に制作された他の江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額六本の歌仙絵の多くは、その構図が日光本に見られる〈1〉〈2〉〈3〉類型に類似する。次節では、各種の東照宮三十六歌仙扁額における歌仙絵の構図の異同を考察したい。

#### 第四節 水戸本の異同

本節では、水戸本に限定する歌仙絵の構図の異同を調査する。これらは、左10斎宮女御(図41)と左16小大君(図42)にあたるものである。



图42-7 水戸本



图42-1 日光本



图42-2 久能山本



图42-3 世良田本

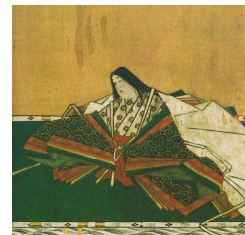


图42-4 仙波本



图42-5 金沢本

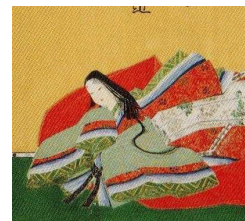


图42-6 滝山本



图41-7 水戸本



图41-1 日光本



图41-2 久能山本

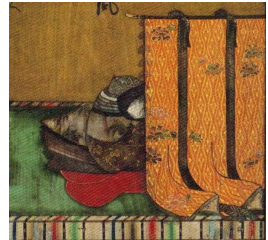


图41-3 世良田本

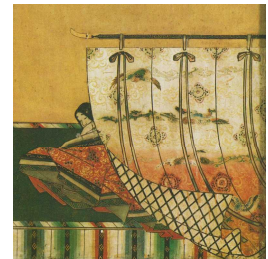


图41-4 仙波本



图41-5 金沢本



图41-6 滝山本



図43-7 仙波本



図43-1 日光本



図43-2 久能山本



図43-3 水戸本



図43-4 世良田本



図43-5 金沢本



図44-6 滝山本

### 第五節 仙波本の異同

水戸本の異同は、左10齋宮女御・左16小大君・右18中務の三名に当たるものとして、すべて女歌仙絵であることが判明した。左10齋宮女御と左16小大君は、顔・身体の向きが左である〈1〉類型から、顔と身体の向きが交差する〈2〉類型へと変容した。

本節では、仙波本に限定する歌仙絵の構図の異同を調査する。これらは、右5友則(図43)・左7兼輔(図44)・右7朝忠(図45)・左11敏行(図46)・右14元輔(図47)にあたるものである。



图45-7 仙波本



图45-1 日光本



图44-7 仙波本



图44-1 日光本



图45-2 久能山本



图44-2 久能山本



图45-3 水戸本



图44-3 水戸本



图45-4 世良田本



图44-4 世良田本



图45-5 金沢本



图44-5 金沢本



图45-6 滝山本



图44-6 滝山本



图47-7 仙波本



图47-1 日光本



图46-7 仙波本



图46-1 日光本



图47-2 久能山本



图46-2 久能山本



图47-3 水戸本



图46-3 水戸本

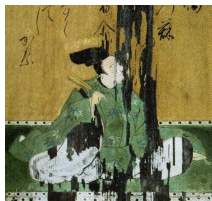


图47-4 世良田本

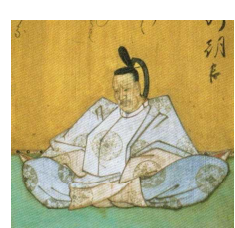


图46-4 世良田本



图47-5 金沢本



图46-5 金沢本



图47-6 滝山本



图46-6 滝山本

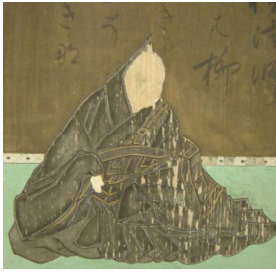


図48-6 久能山本



図48-7 水戸本



図48-1 日光本



図48-2 世良田本

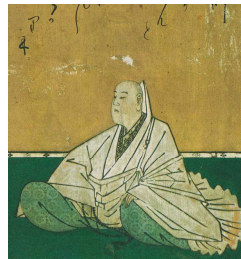


図48-3 仙波本



図48-4 金沢本



図48-5 滝山本

最後に、左5素性(図48)と右18中務(図49)における構図の異同を調査する。これらは、一本に限る異同ではない。

### 第六節 素性と中務における異同

仙波本の異同は、もつとも数が多い。左側の歌仙絵における異同は左2躬恒・左13家持・左7兼輔・左8敦忠・左11敏行・左13清正・左18兼盛、すべて男歌仙絵にあたるものである。左2躬恒・左13家持・左13清正・左18兼盛の四名には、(2)類型から(1)類型への変換が確認された。左7兼輔・左8敦忠・左11敏行の三名には、(1)類型から(2)類型への変換が確認された。このような異同は、同一の様式が許す多様性として理解される。その一方、左側の男歌仙絵の顔の向きを反転させる意図の基に生じた異同であるという見方もできる。右側の歌仙絵における異同は右5友則・右7朝忠・右14元輔・右18中務の四名に当たるものである。この異同のすべては、他の東照宮三十六歌仙扁額に見られない顔の向きを示したものである。しかし、これらの場合にも、顔の向きを反転させる意図があったことを推定することができるのである。よって、仙波本は、数多くの歌仙絵の顔の向きを反転させることで珍しさを狙う特殊な三十六歌仙扁額であると考えられる。

日光本では、素性は身体も顔も左向きの〈1〉類型の構図に描かれている。同一の構図となっているのは世良田本・仙波本・金沢本・滝山本の四本である。その一方、久能山本と水戸本では、素性の身体が左向きで顔が右向きの〈2〉類型の構図に描かれていることが確認できる。

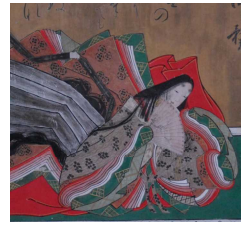


図49-1 日光本



図49-2 久能山本



図49-3 世良田本



図49-4 金沢本



図49-5 滝山本



図41-6 水戸本

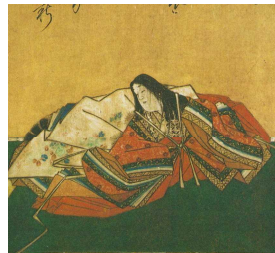


図41-7 仙波本

日光本では、中務は身体も顔も右向きの〈3〉類型の構図に描かれている。金沢本と滝山本は、同一の構図となっている。久能山本と世良田本では、斜め後ろ姿だが、頭部の動きから身体も顔も右向きであると見なされるため、久能山本・滝山本の中務は〈3〉類型の構図に描かれたことが分かる(9)。その一方、水戸本と仙波本では、顔は左向きになる。

## 第七節 むすび

江戸初期の東照宮において、三十六歌仙扁額は拝殿の重要な装飾品として奉納された。最古の東照宮三十六歌仙扁額の日光本の歌仙絵に着目し、身体と顔の向きを基準に調査した結果、三類型の構図に描き分けられていることが判明した。さらに、後に制作された各種の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵の構図を調査した結果、次の二点が明らかになった。

第一に、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本にわたって多くの歌仙絵は、日光本に見られた三類型に描かれている点である。装束の色彩や文様をはじめ、顔の様子までさまざまな描き方をみせる東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵は、身体と顔の向きが三類型に定型化している。それは、各地の東照宮の拝殿に奉納するものとして、歌仙絵の構図を統一する一定の意図が働いたことによるであろう。これによって、日光本・久能山本・世良田本・金沢本・滝山本五本に見られる歌仙絵の構図三類型が、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の主流であるとしておきたい。

第二に、構図の異同は二種類ある点である。

まず、左5素性の構図は、東照宮の主流三類型の中で入れ替わる異同である。このような異同は、〈1〉と〈2〉類型二種類を許す左側の歌仙絵に限定される。したがって、このような異同を見せる歌仙絵は、別系のもではなく、東照宮の主流にあたって許された多様性として理解されよう。

次に、東照宮の主流三類型に含まれない構図を見せる異同である。これらは、水戸本と仙波本のみに見出すことができるものであり、右側の歌仙絵に限定される。東照宮の主流では、右側の歌仙絵のすべてが〈3〉類型となるため、このような異同を見せる水戸本と仙波本の歌仙絵は別系のものでして理解されよう。

東照宮の主流より別系の構図を見せる歌仙絵を整理すれば、水戸本と仙波本の特異性について次のことが明らかになる。

水戸本の異同は、左10斎宮女御・左16小大君・右18中務の三名に当たるものとして、すべて女歌仙絵であることが重要である。左10斎宮女御と左16小大君は〈1〉類型から〈2〉類型へと変容し、右18中務は東照宮系統に見られない左向きの顔を示している。これによって、女歌仙絵の構図に多様性を求める水戸本の特異な意図があったことが分かる。

仙波本の異同は、もつとも数が多い。左側の歌仙絵における異同は左2躬恒・左13家持・左7兼輔・左8敦忠・左11敏行・左13



清正・左18兼盛、すべて男歌仙絵にあたるものである。左2躬恒・左13家持・左13清正・左18兼盛の四名には、〈2〉類型から〈1〉類型への変換が確認された。左7兼輔・左8敦忠・左11敏行の三名には、〈1〉類型から〈2〉類型への変換が確認された。このような異同は、東照宮の主流が許す多様性として理解される。その一方、左側の男歌仙絵の顔の向きを反転させる意図の基に生じた異同であるという見方もできる。右側の歌仙絵における異同は右5友則・右7朝忠・右14元輔・右18中務の四名に当たるものである。この異同のすべては、東照宮の主流に見られない顔の向きを示したものである。しかし、これらの場合にも、顔の向きを反転させる意図があったことを推定することができるのである。よって、仙波本は、東照宮の主流にあたって許された左側歌仙絵の構図の多様性を右側歌仙絵までにも応用し、数多くの歌仙絵の顔の向きを反転させることで珍しさを狙う特殊な三十六歌仙扁額であると考えられる。

以上のことから、本章で協調しておきたいのは、身体と顔の向きを基準にすれば、江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵の構図には、主流となるものが存在することである。それは、第三章でも確認された主流である。また、その構図の主流は、主流でありながらも、第三章で確認されたように、多様性を許すものでもあった。

注

(1) 拙稿「江戸初期の東照宮と三十六歌仙扁額―日光東照宮・久能山東照宮・仙波東照宮・滝山東照宮について」(『大東文化大  
学日本語学科二十周年記念論文集』二〇一三年一月、大東文化大学外国語学部日本語学科)。同じ「東照宮扁額三十六歌仙  
における歌仙絵の類型性―女歌仙絵・僧侶歌仙絵を中心に」(『東アジア比較文化研究』第十三号、二〇一四年六月、東ア  
ジア比較文化国際会議)

(2) 日光本の歌仙絵は、いわき明星大学教授・田嶋一夫氏を介して、日光東照宮宝物館・山作良之氏よりいただいた画像に拠つ  
た。久能山本の歌仙絵は、神戸女子大学教授・鈴鹿千代乃氏及び清州市日吉神社・三輪隆裕宮司を介して、久能山東照宮  
・落合偉洲宮司よりいただいた画像に拠った。水戸本の歌仙絵は、土浦市立博物館編『茨城の歌仙絵―華麗なる歌人の姿』  
(第23回特別展、一九九九年十月、土浦市立博物館)の画像に拠った。世良田本の歌仙絵は、世良田東照宮編『板面著色

「三十六歌仙図」修理報告書』(二〇〇八年、世良田東照宮)の画像に拠った。仙波本の歌仙絵は、MOA美術館編『岩佐又兵衛―歌仙絵』(一九八四年六月、MOA美術館)の画像に拠った。また、川崎市立博物館編『徳川三代の時代と川越』(開館十周年特別展、二〇〇〇年十月、川崎市立博物館)及び折井貴恵編『小江戸川越江戸絵画―職人尽絵と三十六歌仙額』(開館十周年・市制施行九十周年記念特別展、二〇一二年十一月、川崎市立美術館)をも参観した。金沢本の歌仙絵は、金沢市立玉川図書館近世資料館編『加賀の東照宮 尾崎神社展』(二〇〇八年十一月、金沢市立玉川図書館近世資料館)の画像に拠った。滝山本の歌仙絵は、大東文化大学教授・藏中しのぶ氏よりいただいた、故・藏中スミ氏が撮影された写真に拠った。また、岡崎市立美術館編『松平・徳川氏の寺社―岡崎に残る遺産と歴史』(特別企画展、二〇〇〇年四月、岡崎市立美術館)の画像をも参観した。

- (3) 世尊寺流「行之形」の歌仙絵は、国文学研究資料館に保管されるマイクロフィルムを使用させていただいた。
- (4) 新藤協三「『三十六人歌合』と入木道」(『三十六歌仙叢考』二〇〇四年五月、新典社)
- (5) (4) 前掲論文。
- (6) 寺島恒世「変容する三十六歌仙絵―藤房本の特異性」(人間文化研究機構国文学研究資料館編『絵が物語る日本』二〇一四年三月、三弥井書店)
- (7) 山作良之「日光東照宮蔵三十六歌仙扁額製作の経緯」(『大日光』第七十九号、二〇〇九年三月、日光東照宮)
- (8) (4) 前掲論文。
- (9) 中務一面がとりわけ剥落が激しいため、ここでは、世良田東照宮編『板面着色「三十六歌仙図」修理報告書』(二〇〇八年、世良田東照宮)に掲載される復元模写を使用させていただいた。

## 第五章 世良田東照宮三十六歌仙扁額の伝来

### ―日光東照宮移管説の批判―

#### 第一節 はじめに

世良田東照宮は寛永二十一年（一六四四）、徳川家の発祥の地という伝承をもつ群馬・世良田に三代将軍徳川家光の発願により造営された。その拝殿は、日光東照宮の大造替に際して、日光から移築されたものである。そこに、重要文化財に指定された三十六歌仙扁額（以下、世良田本）が伝来している。歌仙を一人ずつ扁額一面に描き、合計三十六面すべてが現存している。寸法は縦四十九・四セ、横三十三・五セである。歌仙絵は、狩野探幽の弟、狩野源四郎をはじめ、狩野休白と狩野元俊三人の合作である（1）。世良田本の伝来について、『東照宮宝物志』に次の記述がある（2）。

事は当宮創建当時に近き寛永年間でありますから、爰に併記致します事は如何とも思はれますが、一度は当宮に納められ、又当宮で御使用に成った御品の事であるのに、従来殆んど忘れられた傾でありますから、一言その顛末を記して、事の由来を明らかにして置きます。群馬県新田郡世良田村鎮座の東照宮は、彼地の所伝に依れば、寛永二十一年十月十一日、当宮御造替以前の御宮即ち元和造営の建造物を移し建てられたものと言はれて居り、又此事は彼地の旧記並に当山の古記上にも見えて居ります。而して此時奥宮に奉安してあつた、東照公の御神像を遷座し、且つ公が御著初の御甲冑を始め神宝・神饌具等を御移したと云はれ、現に右の御甲冑・三十六歌仙扁額・東照大権現勅額・高坏・瓶子以下三十五点の神饌具等を伝えられてあります。殊に同宮所伝の国宝了戒作の御太刀は、後水尾上皇御寄進と申し伝えられる品で、その御拵の上から察して、正に左様の品と拝されるものであります。或はこの御太刀は寛永十三年第二十一回神忌に同院から当宮に御寄進になった品が移されたのではないかと考へられる、由緒深い御品であります。

右の説によれば世良田本は、拜殿の移築の際に、日光から世良田へ移管されて、今日に伝わったことになる。移管とは、日光東照宮から世良田東照宮に渡り、世良田東照宮の奉納品となったということである。

世良田に移築された社殿は、寛永年間の大造替まで日光東照宮にあった奥社である。その奥社は日光東照宮造営時の建築物であり、二代將軍徳川秀元の寄進した三十六歌仙扁額は忠奉納されていた。この三十六歌仙扁額の歌仙和歌は後水尾天皇の宸翰であり、絵師が狩野孝信、また制作年が元和三年（一六一七）とされる(3)。

現在、世良田東照宮に伝来する三十六歌仙扁額は、はたして元和三年に日光東照宮の奥社に奉納されていた秀忠ゆかりのものであろうか。

本稿では、世良田本の歌仙和歌本文と書の形態、および歌仙絵の絵姿を調査し、『東照宮宝物志』に見られる日光東照宮移管説の真偽を検討する。

## 第二節 世尊寺流「草之形」・日光本と世良田本の歌仙和歌本文

もし世良田本が日光東照宮に奉納されていたものであるならば、その歌仙和歌は後水尾天皇の宸翰となるはずである。

元和三年、後水尾天皇が秀忠から日光東照宮のための神号と三十六歌仙扁額の染筆の依頼を受けた。三十六歌仙扁額の染筆の際に、後水尾天皇は当時曼殊院門跡を務めていた良恕法親王に相談した上で、世尊寺流に伝わる何某の方式を用いることにしたのである。その旨は、良恕法親王宛ての後水尾天皇の宸翰から窺える(4)。

日光の哥仙、哥のちらし作者等、先度借用申し候内、世尊寺芳翰を以て模写せしめ候。

現在、日光東照宮には、後水尾天皇宸翰の伝承をもつ三十六歌仙扁額（以下、日光本）が伝来している。漢字と仮名遣いに多少の変化があるものの、三十六首のすべてが類似することから、山作良之氏は後水尾天皇の用いた世尊寺流何某の方式が世尊寺流の

伝書『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』（以下、世尊寺流「草之形」）に類するものであったとされ、本書の第一章と第二章では、世尊寺流「草之形」と日光本の歌仙和歌本文及びその書体の関係性をより一層明らかにした(5)。

したがって、世良田本が日光東照宮から移管された後水尾天皇宸翰の三十六歌仙扁額であれば、日光本と同様に、その歌仙和歌本文のすべてが世尊寺流「草之形」に類似するはずであろう。

本節では、世良田本の歌仙和歌本文を日光本、およびその祖本に類するとされる世尊寺流「草之形」の本文に照らし合わせ、それぞれの歌仙和歌本文の類似性を検討する。

表1では、世良田本の歌仙和歌本文を、世尊寺流「草之形」と日光本の本文に並べて示す。歌仙の配列は、日光本も世良田本の祖本となったはずの「草之形」の順に従った。世良田本の歌仙和歌本文が「草之形」、および日光本と異なる場合、その冒頭に「×」を付した。さらに、一文字に限る本文異同をゴチック体で示した。

表1 世尊寺流「草之形」・日光本と世良田本の歌仙和歌本文

左1人麿			
世尊寺	..ほのくくと	あかしの浦の	あさ霧に
日光本	..ほのくくと	あかしのうらの	あさ霧に
世良田本	..ほのくくと	あかしの浦の	朝きりに
			しまかくれ行
			しま□くれ行
			舟をしそおもふ
			舟をしそおもふ
			舟をしそおもふ
左2躬恒			
世尊寺	..すみよしの	松を秋かせ	ふくからに
日光本	..すみよしの	松を秋かせ	ふくからに
×世良田本	..我宿の	花みかてらに	くる人は
			散なむ後そ
			こゑうちそふる
			おきつしらなみ
			おきつしらなみ
			こひしかるへき

左3家持

世尊寺 ..まきもくの ひはらもいまた くもらねは こ松かはらに あは雪そふる  
日光本 ..まきもくの ひはらもいまた くもらねは 小松かはらに あは雪そふる  
×世良田本 ..さをしかの 朝たつをの、 秋はきに 玉とみるまで をけるしらつゆ

左4業平

世尊寺 ..月やあらぬ 春やむかしの はるならぬ わか身ひとつは もとのみにして  
日光本 ..月やあらぬ 春やむかしの はるならぬ 我身ひとつは もとのみにして  
×世良田本 ..世の中に たえて桜の なかりせは 春の心は のとけからまし

左5素性

世尊寺 ..をとにのみ きくのしら露 よるはおきて ひるはおもひに あへすけぬへし  
日光本 ..をとにのみ きくのしら露 よるはをきて ひるはおもひに あへすけぬへし  
×世良田本 ..いまこんと いひしはかりに なか月の あり明の月を 待出つるかな

左6猿丸

世尊寺 ..おく山に もみちふみわけ なくしかの こゑきく時そ 秋はかなしき  
日光本 ..おく山に もみちふみわけ なくしかの □ゑき□時そ 秋□かなしき  
世良田本 ..おく山に もみちふみ分 なくしかの こゑきく時そ 秋はかなしき

左7兼輔

世尊寺 ..みしか夜の ふけ行まゝに たかさこの みねのまつかせ ふくかとそきく

日光本 …みしか夜の ふけゆくまゝに 高砂の みねのまつかせ ふくかとそきく  
世良田本 …みしか夜の ふけゆくまゝに 高砂の みねのまつかせ ふくかとそきく

左8 敦忠

世尊寺 …伊勢の海 ちひろのはまに ひろふとも いまはなにてふ かひかあるへき  
日光本 …伊勢のうみ ちひろのはまに ひろふとも 今はなにてふ かひかあるへき  
×世良田本 …あひみての 後の心に くらふれは むかしは物も おもはさりけり

左9 公忠

世尊寺 …とのもりの とものみやつこ こゝろあらは この春はかり あさきよめすな  
日光本 …とのもりの とものみやつこ こゝろあらは この春はかり あさきよめすな  
×世良田本 …ゆきやらて 山ちくらしつ ほとゝきす いま一聲の きかまほしさに

左10 斎宮女御

世尊寺 …袖にさへ 秋のゆふへは しられけり きえしあさちか 露をかけつゝ  
日光本 …袖にさへ 秋のゆふへは しられけり きえしあさちか 露をかけつゝ  
×世良田本 …ことの音に 峯の松風 かよふらし いつれのをより しらへ初けん

左11 敏行

世尊寺 …秋はきの 花さきにけり たかさこの おのへの鹿は いまやなくらん  
日光本 …秋はきの 花さきにけり たかさこの をのへの鹿は 今やなくらん  
×世良田本 …秋きぬと めにはさやかに みえねとも 風の音にそ おとろかれぬる

左12宗干

世尊寺 .. やまさとは 冬そさひしさ まさりける 人めも草も かれぬとおもへは  
 日光本 .. やまさとは 冬そさひしさ まさりける 人めも草も かれぬとおもへは  
 世良田本 .. 山里は 冬そさひしさ まさりける 人めも草も かれぬとおもへは

左13清正

世尊寺 .. 天津かせ ふけゐの浦に ゐるたつの なとか雲井に かへらさるへき  
 日光本 .. 天津かせ ふけゐの浦に ゐるたつの なとか雲井に かへらさるへき  
 世良田本 .. 天津かせ ふけ□の浦に いるたつの なとか雲□□ かへらさる□□

左14興風

世尊寺 .. ちきりけむ こゝろそつらき 棚機の としにひとたひ あふはあふかは  
 日光本 .. ちきりけむ こゝろそつらき 織女の としにひとたひ あふはあふかは  
 世良田本 .. 契劍 心そつらき 織女の 年に一たひ あふは逢かは

左15是則

世尊寺 .. みよしの、 やまのしら雪 つもるらし ふるさとさむく なりまさるなり  
 日光本 .. みよしの、 やまのしら雪 つもるらし ふるさとさむく なりまさるなり  
 世良田本 .. みよしの、 山のしら雪 つもるらし ふるさとさむく なりまさる也

左16小大君

世尊寺 .. おほゐ河 そまやまかせの さむければ たついはなみを ゆきかとそ見る



日光本 ..おほる河 そま山かせの さむければ たついはなみを 雪かとそ見る  
×世良田本 ..岩はしの よるの契も たえぬへし あくるわひしき かつらきの神

左17能宣

世尊寺 ..みかきもり 忽しのたく火の よるはもえ ひるはきえつゝ ものをこそおもへ  
日光本 ..みかきもり 忽しかたく火の よるはもえ ひるはきえつゝ ものをこそ思へ  
世良田本 ..みかきもり 忽しのたく火の よるはもえ ひるはきえつゝ ものをこそ思へ

左18兼盛

世尊寺 ..しのふれと いろにいてにけり わかこひは ものやおもふと 人のとふまで  
日光本 ..しのふれと いろにいてにけり 我こひは 物やおもふと 人のとふまで  
世良田本 ..しのふれと 色に出にけり 我こひは 物やおもふと 人のとふまで

右1貫之

世尊寺 ..むすふての しづくにゝこる 山の井の あかても人に わかれぬるか  
日光本 ..むすふ手の しづくにゝこる 山の井の あかても人に わかれぬるかな  
×世良田本 ..桜散 このしたかせ さむからて 空にしられぬ 雪そふりける

右2伊勢

世尊寺 ..三輪のやま いかにまちみむ としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
日光本 ..三輪のやま いかまちみむ としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
×世良田本 ..散ちらす きかまほしきを 故郷の 花見てくらす 人もあは南

右3 赤人

世尊寺 .. わかのうらに しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつなきわたる  
日光本 .. わかのうらに 塩みちくれは かたをなみ あしへをさして たつなきわたる  
世良田本 .. わかのうらに 塩みちくれは かたをなみ 芦邊をさして たつ鳴わたる

右4 遍昭

世尊寺 .. いそのかみ ふるの山邊の さくらはな うへけんときを しる人そなき  
日光本 .. いそのかみ 布留の山邊の さくらはな うへけんときを しる人そなき  
×世良田本 .. 我やとは 道もなきまで あれにけり つれなき人を 待とせしまに

右5 友則

世尊寺 .. ゆふされは ほたるよりけに もゆれとも ひかり見ねはや 人のつれなき  
日光本 .. 夕されは ほたるよりけに もゆれとも ひかりみねはや 人のつれなき  
×世良田本 .. 夕されは さほの川原の 河霧に ともまとはせる ちとりなくなり

右6 小町

世尊寺 .. わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなんとそおもふ  
日光本 .. わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそ思ふ  
世良田本 .. わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそ思ふ

右7 朝忠

世尊寺 .. 萬世の はしめとけふを いのりおきて いまゆくすゑの 神そかそへん

日光本 .. 万代の はしめとけふを いのりをき□ 今ゆくすゑ□ 神そかそへん  
世良田本 .. 萬世の はしめとけふを いのりをきて 今ゆくすゑを 神そかそへん

右8 高光

世尊寺 .. 春すきて ちりはてにける 梅のはな た、香はかりそ 枝にのこれる  
日光本 .. はるすきて ちりはてにける 梅のはな た、香はかりそ 枝にのこれる  
×世良田本 .. かく許 へかたくみゆる 世中に うら山しくも すめる月哉

右9 忠岑

世尊寺 .. 春たつと いふはかりにや みよしの、 山もかすみて けさは見ゆらむ  
日光本 .. 春たつと いふはかりにや みよしの、 山もかすみて けさは見ゆらむ  
×世良田本 .. 在明の つれなくみえし 別より 暁はかり うき物はなし

右10 頼基

世尊寺 .. ねのひする 野邊にこまつを ひきつれて かへる山ちに うくいすそなく  
日光本 .. ねのひする 野へにこ松を 引つれて かへる山路に うくひすそなく  
世良田本 .. 子日する 野へに小松を 引つれて かへる山路に 鶯そなく

右11 重之

世尊寺 .. 夏かりの たまえのあしを ふみしたき むれある鳥の たつ空そなき  
日光本 .. 夏かりの 玉江のあしを ふみしたき むれある鳥の たつ空そなき  
×世良田本 .. よし野山 峯のしら雪 いつきえて けさは霞の 立かはるらん

右12信明

世尊寺 ..ほのくくと 有明の月の つきかけに 紅葉ふきおろす やまおろしのかせ  
 日光本 ..ほのくくと ありあけの月の 月かけに 紅葉ふきおろす やまおろしのかせ  
 世良田本 ..ほのくくと あり明の月の 月かけに 紅葉ふきおろす やまおろしのかせ

右13順

世尊寺 ..みつのおもに てる月なみを かそふれは こよひそあきの もなかなりける  
 日光本 ..水のおもに てる月なみを かそふれは 今宵そ秋の もなかなりける  
 世良田本 ..水のおもに てる月なみを かそふれは 今宵そ秋の もなかなりける

右14元輔

世尊寺 ..ちきりきな かたみにそてを しほりつゝ すゑのまつやま なみこさしとは  
 日光本 ..ちきりきな かたみにそてを しほりつゝ すゑのまつやま なみこさしとは  
 ×世良田本 ..秋の野の 萩のにし□□ □□宿に 鹿の音ながら うつしてしかな

右15元真

世尊寺 ..さきにけり わか山さとの 卯のはなは かきねにきえぬ 雪とみるまで  
 日光本 ..さきにけり わかやまさとの うのはなは かきねにきえぬ 雪と見るまで  
 ×世良田本 ..人ならば まてといはまし 霍公 二聲とたに なかて行らむ

右16仲文

世尊寺 ..おもひしる 人にみせはや 夜もすから わかとこなつに おきみたる露  
 日光本 ..おもひしる 人にみせはや 夜もすから 我とこなつに おきみたる露



日光本・世尊寺流「草之形」と異なる世良田本の歌仙和歌本文は十九首ある。これらは、漢字と仮名の使い分けによる表記異同や一字に限る本文異同ではなく、本文が根本的に異なる歌仙和歌である。

以上のことから、世良田本の半分以上の歌仙和歌本文が日光本・世尊寺流「草之形」の本文と異なることが確認された。したがって、現時点で言えることは、世良田本の歌仙和歌本文は、世尊寺流「草之形」に類する世尊寺流何某の法式を手本に用いながら、後水尾天皇が染筆したものと判断しにくいということである。

### 第三節 世尊寺流「草之形」・日光本と世良田本の書

世良田本の散らし書きの書体は、行の構成と配置に変化を加えることによって、さまざまな形態を提示している。その特徴は、日光本と世尊寺流「草之形」の書にも多く見られる(7)。

世良田本・日光本、および世尊寺流「草之形」にわたって本文が一致する歌仙和歌は十六首あることが先の第二節で確認した。歌仙和歌の書体に関してもその類似性が認められるのであろうか。本節では、その歌仙和歌十六首のうち、歌仙和歌の書体が明らかに異なると思われる四首を検討する。なぜなら、本文は一致しながらも、書体は四首だけ異なるからである。その違いに注目することで世良田本の歌仙和歌の書の特徴について考えてみたい。

まずは、第一に、「右3赤人「わかのうちにしほみちくればかたをなみあしべをさしてたつなきわたる」の書がある。

表2 右3 赤人の書

世尊寺流「草之形」

三右 赤人  
 1 わかのうらにしほ  
 2 みちくれは  
 3 かたをなみ  
 4 あひへをさしてたつ  
 5 なきわたる

日光本

右 赤人  
 1 わかのうらに塩  
 2 みちくれは  
 3 かたをなみ  
 4 あひへをさしてたつ  
 5 なきわたる

世良田本

赤人  
 1 わかのうら  
 に  
 塩みちくれは  
 2 芦邊をさして  
 たつ鳴  
 わたる  
 かたほ  
 なみ

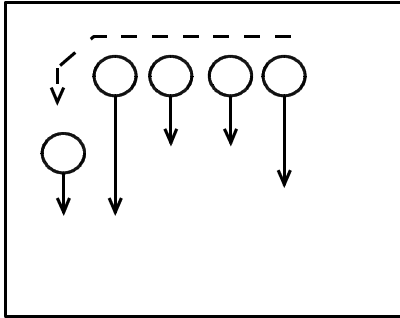


図1

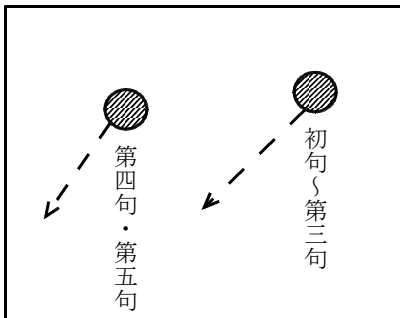


図2

世尊寺流「草之形」と日光本の書は、和歌を五行に構成した同じ形態を示している。行間の幅に変化がないのは特徴的である。また、四行目まで行頭の高さを揃え、五行目の行頭を大きく下げる(図1)。

一方、世良田本の書は行間の幅に多少の変化を加えて、行頭の高さの不揃いが著しい。詳細に述べると、文字は一行目から五行目まで、また六行目から九行目までの二集段に集約されている。各集段は行頭を下げて配する構成である。1集段の切れ目は本文の第三句である(図2)。

表3 右10 頼基の書

世尊寺流「草之形」

十右  
頼基朝臣

1 ねのひする  
2 墅へにこ  
3 まつをひき  
4 つれて  
5 かへる山  
6 ちにうくひ  
7 すそ  
8 なく

日光本

右  
頼基朝臣

1 ねのひする  
2 墅へにこ  
3 松を引  
4 つれて  
5 かへる山  
6 路にうくひ  
7 すそ  
8 なく

世良田本

大中臣  
頼基

1 子日  
する 朝臣  
墅へに  
小松を  
引つれ  
2 鶯そ て  
なく  
かへる  
山路に

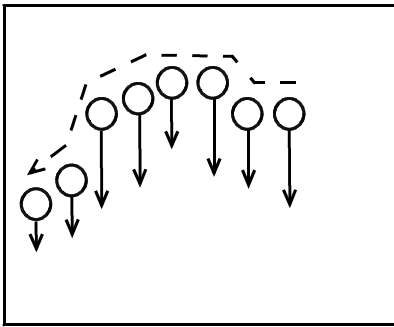


図3

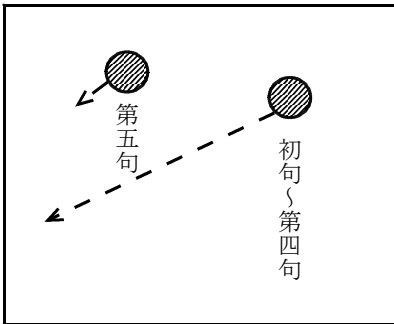


図4

世尊寺流「草之形」と日光本の書は、右3 赤人の書と同じく、行間の幅に変化がないのは特徴的である。和歌を八行に構成する。四行目まで徐々に各行の行頭をあげてから、五行目から八行目まで各行の行頭を落としていく(図3)。世良田本の書には多少の行間の変化があり、「鶯ぞ」「なく」二行分が他の行に続くことなく、「引つれて」の上に配置されたのが特徴的である。「する」から「山路に」までの七行分の行頭は、一行目「子日」に沿ってますます下がりが、画面上の右上から左下へと伸びていく大きな集段を構成する。この集段は初句から第四句の切れ目までの和歌本文を記す。その上に重なる「鶯ぞ」「なく」二行分は第五句を記す(図4)。



表4 左15是則の書

世尊寺流「草之形」

十五左 是則  
 2 つもる し  
 1 みよしの、  
 やまの、  
 の、  
 しらの雪  
 3 ふる さと さむく なりま さるなり

日光本

左 是則  
 3 つもる し  
 1 みよしの、  
 の、  
 やまの、  
 しらの雪  
 2 ふる さと さむく なりま さるなり

世良田本

是則  
 1 みよしの、  
 山の  
 しら雪ともる  
 らし  
 2 ふるさとさむく  
 なりまさる  
 也

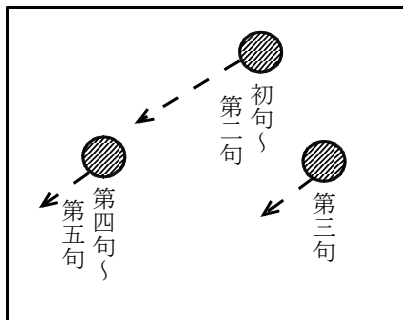


図5

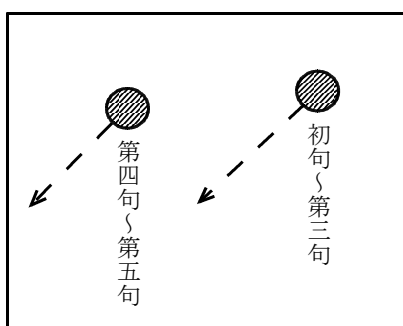


図6

世尊寺流「草之形」と日光本の書は、行を三つの集段に組んでいる。初句「みよしの」は画面の最も上に置かれており、第二句の切れ目「雪」まで1集段となる。2集段は画面の右側に置かれて三行分である。これらは和歌の第三句にあたる。最後に1集段に続くかのように、3集段が画面の左側を占め、和歌の第四句・第五句を記す(図5)。

世良田本の書はこれと根本的に異なり、右3赤人の書と同じく、左右ふたつの集段に構成されている(図6)。

表5 左14興風の書

世尊寺流「草之形」	日光本	世良田本
<p>十四左 興風</p> <p>1 ちきり け ころそ む</p> <p>つらき 棚機の</p> <p>2 としに ひとたひ</p> <p>あふは あふか は</p>	<p>左 興風</p> <p>1 ちきり け ころそ む</p> <p>つらき 織女の</p> <p>2 としに ひとたひ</p> <p>あふは あふか は</p>	<p>興風</p> <p>1 契劔心そ</p> <p>つらき織女の</p> <p>2 年に一たひ</p> <p>あふは逢</p> <p>かは</p>

世尊寺流「草之形」と日光本の書は五行からなる。二行目と三行目の間の余白が著しく、この書は左右ふたつの集段に構成されている。また、一行目と三行目各行頭は最も高く、左右の集段の各柱と見なされる。したがって、二行目は一行目に、四行目と五行目は三行目に沿って書かれたと思われる。集段の切れ目はちようど第三句「たなばたの」になっている。この全体的な構成は世良田本の書に共通しており、さきを示したとおり、世良田本の右3赤人と左15是則の書にも見られた構成である。

しかし、日光本・世尊寺流「草之形」の書には、格助詞「ぞ」「の」「に」と活用語尾「き」を右寄せに、助動詞「けむ」の二字を動詞の連用形「ちぎり」に続き横書きに小さくして書くという特徴的な書法が見られる。この書法によって書かれた文字とその位置づけは日光本と世尊寺流「草之形」にまったく同じであるため、後水尾天皇が日光本の染筆に世尊寺流「草之形」に類似する書法を用いようとした意図は強く反映される。世良田本の書にはこのような特徴が見られない。なぜ見られないかは現時点で

は不明だが、この「見られない」という点をここでは大事にしたい。歌仙和歌本文が一致しながらも、世良田本の筆者は日光本・世尊寺流「草之形」に類似する方式を完全に用いようとしたということは言いにくいのである。

以上のことから、世良田本・日光本・世尊寺流「草之形」にわたって本文が類似する歌仙和歌十六首のうち、世良田本において四首の書体が日光本・世尊寺流「草之形」と根本的に異なることが確認された。歌仙和歌本文と書の二要素からして、はたして世良田本の筆者が明らかに日光本・世尊寺流「草之形」に類似する法式を用いた歌仙和歌はわずか十二首となるのである。むしろ、注目すべきことは、以上の四首の書によって、世良田本は日光本・世尊寺流「草之形」から離れた独自性を示していることである。その理由は今後の研究の課題ではあるが、ひとまず本稿ではこの特徴を提示できたことを強調しておきたい。

#### 第四節 世良田本の歌仙絵

世良田本の絵師三人の名前とそれぞれが担当した歌仙絵は各面の裏書きの銘文から窺える。狩野源四郎は左1人麿から左12宗子までの十二名を描いた。狩野休白は右1貫之から右12信明までの歌仙絵十二名を描いた。狩野元俊は左13清正から左18兼盛までの六名、および右13順から右18中務までの六名、合わせて歌仙絵十二名を描いた。松木寛氏は、裏書きの銘文の筆致と歌仙絵の描写の特徴からして、世良田本の歌仙絵はこれら絵師三人の実作であると指摘された(8)。

日光本の歌仙絵に関しては、二つの説がある。

第一に、絵師を土佐光起にする『東照宮宝物志』の説がある(9)。

第二に、絵師を狩野孝信にする山作良之氏の説がある(10)。

さきに述べたように、歌仙和歌本文とその書体において日光本は世尊寺流「草之形」の法式に完全に一致する性格を示した。したがって、日光本は元和三年に日光東照宮に奉納されたものである可能性が世良田本より高い。もし、世良田本が本来日光東照宮に奉納されていた品であるならば、その歌仙絵は日光本と同様な意匠を凝らしたはずである。

本節では、はたして世良田本と日光本の歌仙絵は同様の絵姿を提示するか否かを検討する。

歌仙絵三十六名のうち、世良田本日光本の歌仙絵の様式が完全に一致するものは三十二名ある。残りの歌仙絵四名は、様式が異なる。それは、以下のとおりである。

表6 左11敏行の歌仙絵



日光本



世良田本

日光本では、武官束帯である。白い表袴に黒袍を着用し、綾と櫻の巻いた巻纓冠をかぶる。腰に平緒を巻き太刀を佩用して、左手で弓を持ち、背に胡籐を負い、全体的に画面の左に向く絵姿である。一方、世良田本では、空色の指貫・袍を着用し、櫻の垂れた垂纓冠をかぶる。さらに、太刀や弓などの武器を一切持たない。画面上での向きは同じく左向きである。しかし、装束の特徴からして、その姿が衣冠であり、日光本の武官束帯と根本的に異なるのである。

表7 左12宗千の歌仙絵



日光本



世良田本

日光本では、白い指貫・袍を着用し、垂纓冠をかぶる。画面上の左に向く姿である。一方、世良田本では、表袴に黒袍を着用し、綾・巻纓冠をかぶり、太刀・弓・胡籐を装備している。類似点としては、日光本と同じく画面上で左向きとなることがある。

以上の歌仙絵二名は、互いに根本的に異なる様式で描かれていることが確認される。しかし、配列順が隣であることから、これらの歌仙絵が入れ替わったかとも思われる。それを具体的に述べると、日光本では左11敏行が武官束帯、左12宗于が衣冠に描かれたのに対して、世良田本では左11敏行が衣冠、左12武官束帯となっていることで、入れ替わっているかのような様式となっている点である。

表8 右17忠見の歌仙絵



日光本



世良田本

日光本では、紺色の狩衣姿である。頭に風折烏帽子をかぶる。右手に扇をもつ。画面上で右向きの姿である。

世良田本では、表袴に赤袍を着用し、頭に綾・巻纓冠をかぶる。腰に平緒を帯びているため、太刀を佩用している。さらに、左手に弓を持ち、背に胡籜を負う。したがって、武官束帯の姿である(11)。

表9 右18中務の歌仙絵



日光本



世良田本

日光本では、女房装束の姿で、前向きに描かれている。右手にもつ扇を拡げて、それで口元を覆い隠そうとする仕草が著しい。

世良田本では、装束が日光本と同じく女房装束であるが、斜め後ろ姿である上でその描写の角度が異なる。体を捻らせて、頭を右の方に向け、顔が扁額の真つ正面に向くのである(12)。装束の彩色に関しても多少の異同も確認されるが、ポーズの特徴が根本的に異なるため、世良田本・日光本の中務の歌仙絵は同様の意匠によるものとは考えられないのである。

以上のことから、歌仙絵三十六名のうち、日光本の様式に類似する世良田本の歌仙絵が三十二名あることが確認された。しかし、左11敏行・左12宗于・右17忠見の三名における装束の異同、また右18中務においてポーズの異同が確認された。男歌仙絵は二十九名もいるため、その装束の種類が人物を特定する面からしても重要な要素である。右18中務は、女歌仙絵として装束よりポーズが重要である。したがって、世良田本において中務のポーズが異なるのは、描写の技巧も同じではないことを示唆する。

## 第五節 むすび

まず、第二節と第三節に述べた世良田本の歌仙和歌本文とその書体からは、次のことが言える。

元和三年（一六一七）、日光の奥社に奉納された三十六歌仙扁額には後水尾天皇の宸翰がある。すると、歌仙和歌本文とその書体は世尊寺流何某の法式にかなっているはずである。しかし、調査の結果は以下のとおりである。世良田本の半分以上の歌仙和歌本文が日光本・世尊寺流「草之形」の本文と異なることが確認された。したがって、現時点で言えることは、世良田本の歌仙和歌本文は、世尊寺流「草之形」に類する世尊寺流何某の法式を手本に用いながら、後水尾天皇が染筆したものと判断しにくいということである。世良田本・日光本・世尊寺流「草之形」にわたって本文が一致する歌仙和歌十六首のうち、世良田本において四首の書体が日光本・世尊寺流「草之形」と根本的に異なることが確認された。本文と書体の二要素からして、はたして世良田本の筆者が明らかに日光本・世尊寺流「草之形」に類似する法式を用いた歌仙和歌はわずか十二首となるのである。むしろ、注目されるべきことは、以上の四首の書によって、世良田本は日光本・世尊寺流「草之形」から離れた独自性を示しているということである。故に、世良田本の性格は、史料から窺える元日光の奥社の三十六歌仙扁額の性格と異なっている。これによって、世良田本が元日光の奥社にあったものとは考えられない。

次に、第四節で述べた世良田本の歌仙絵から以下のことが言える。

歌仙和歌本文とその書体を基にすると、元和三年、日光の奥社に奉納された三十六歌仙扁額は日光本である可能性が高い。もし歌仙絵の様式が類似するならば、世良田本は元日光の奥社にあったと考えられる可能性が残る。しかし、調査の結果は、歌仙絵四

名の様式が異なることから分かるように、全体として世良田本の歌仙絵と日光本の歌仙絵は同様な意匠を凝らしたものではない。さらに、このような結果は、狩野源四郎・狩野休白・狩野元俊三名の実作と見なした上で、世良田本の制作年代を寛永二十一年（一六四一）とされた松木氏の説と絡み合うのである（13）。したがって、歌仙絵からしても、世良田本が元日光の奥社にあったという確証が得られなかった。

以上のことから、世良田本は、元日光の奥社にあったものではなく、世良田東照宮が造営された寛永二十一年（一六四一）に新しく制作されたものであると言える。

#### 注

- (1) 世良田東照宮編『板面著色「三十六歌仙図」修理報告書』（二〇〇八年三月、世良田東照宮）
- (2) 日光東照宮編『東照宮宝物志』（一九二七年、東照宮社務所発行）
- (3) 山作良之「日光東照宮蔵三十六歌仙扁額製作の経緯」（『大日光』第七十九号、二〇〇九年六月、日光東照宮）
- (4) 『久能山叢書 第四編 資料編下』（一九七六年、久能山東照宮社務所発行）
- (5) (3) 前掲論文。
- (6) 世尊寺流「草之形」の歌仙和歌本文・書・歌仙絵は、国文学研究資料館に保管されるマイクロフィルムを使用させていただいた。日光本の歌仙和歌本文・書・歌仙絵は、いわき明星大学教授・田嶋一夫氏を介して、日光東照宮宝物館・山作良之氏よりいただいた画像に拠った。世良田本の歌仙和歌本文・書・歌仙絵は、世良田東照宮編『板面著色「三十六歌仙図」修理報告書』（二〇〇八年、世良田東照宮）の画像に拠った。
- (7) 本書の第二章を参照。
- (8) 松木寛「世良田東照宮の三十六歌仙絵額」（『Museum』第三九四号、一九八四年）
- (9) (2) 前掲論文。
- (10) (3) 前掲論文。

- (11) 忠見一面がとりわけ剥落が激しいため、ここでは、世良田東照宮編『板面著色「三十六歌仙図」修理報告書』(二〇〇八年、世良田東照宮)に掲載される復元模写を使用させていただいた。
- (12) 中務一面がとりわけ剥落が激しいため、ここでは、世良田東照宮編『板面著色「三十六歌仙図」修理報告書』(二〇〇八年、世良田東照宮)に掲載される復元模写を使用させていただいた。
- (13) (8) 前掲論文。



## 終章

江戸初期、各地の東照宮に奉納された三十六歌仙扁額七本を調査した結果、次のことが明らかとなった。

第一に、歌仙和歌本文の系統である。その系統は二系統ある。それは「日光本系統」と「久能山本系統」である。

「日光本系統」は、日光本と水戸本、「久能山本系統」は、久能山本と滝山本である。

日光本も久能山本も共通点がある。それは、最初の東照宮三十六歌仙扁額として、いずれも後水尾天皇の宸翰があることである。その一方、後水尾天皇の意図により、歌仙和歌において日光本と久能山本の祖本が違う。

日光本の歌仙和歌は、和書の名高い世尊寺家に伝わる「草之形」に類する三十六歌仙の本文を受容したと考えられる。一方、久能山本の歌仙和歌は、能書の清水谷実秋筆の伝承をもつ北野天満宮の神室「清水谷歌仙」の本文を受容したと考えられる。これによつて、日光本も久能山本いずれも、神前に奉納する最高級の歌仙和歌として意匠されたことが言える。

第二に、歌仙和歌の書体についてである。日光本は、歌仙和歌本文のみならず、その書体も世尊寺流「草之形」と同様であることが判明した。これもまた、書道に関して最大の権威をもっていた曼殊院門跡良恕法親王に相談を受けた後水尾天皇の意図によるものであると考えられる。

第三に、歌仙絵の様式についてである。江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵の比較検討は、装束と構図の二つの基準に従った。その結果、判明したことが二つある。

ひとつは、調査した七本において、約八十三パーセントの歌仙絵は同型の装束で描かれていることが判明した。異同は、五種類の装束で描き分けられる男歌仙絵の中で確認された。しかし、これら異同は、文官束帯・武官束帯・衣冠、いわゆる有位装束の交替にあたるものであるため、歌仙絵の描写に大きな変化をもたらさないものではなく、同一の様式の多様性として見なされた。唯一の例外は、狩衣から文官束帯へと変容する世良田本の右17忠見であった。

もうひとつは、調査した七本において約七十八パーセントの歌仙絵は同型の構図に描かれていることが判明した。歌仙絵の構図は、身体と顔が左向きの〈1〉類型、身体が左向きで顔が右向きの〈2〉類型、身体も顔も右向きの〈3〉類型に描き分けられている。異同は二種類が確認された。まず、〈1〉〈2〉〈3〉類型の交替による異同があった。これらも、同一の様式の多様性とし

て見なされた。次は、〈1〉〈2〉〈3〉類型に含まれない構図を示す異同があった。これらは水戸本と仙波本のみに見られるものであり、珍しさを求める両本の特異的な意図によるものと見なされた。

以上のことから、調査した七本の歌仙絵は、装束と構図を基準に、元となった様式が同じであると考えられる。よって、東照宮の歌仙絵の様式の主流の存在が想定できた。その一方、七本を描いたそれぞれの絵師は、できる限り、東照宮の歌仙絵の様式の主流に許された多様性を活かして、各種の東照宮三十六歌仙扁額の歌仙絵にある程度独自性を加えたことも考えられる。

第四に、世良田本の伝来についてである。歌仙和歌本文・書体・歌仙絵の様式の検討を行った結果、世良田本は寛永二十一年、以前に日光東照宮に奉納されていた三十六歌仙扁額として見なされることが考えられた。これによって、世良田本の制作年代を寛永二十一とする先行研究の指摘が、本研究によって、従来より一層証明された。

江戸初期、各地の東照宮の拝殿に奉納された三十六歌仙扁額は、歌仙和歌本文・書・歌仙絵というそれぞれ独自の性格をもつ三つの様相から構成される総合芸術である。しかしながら、本研究の調査では、同一の歌仙和歌本文・書体・歌仙絵を一括して示した江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額がないことが明らかになった。三十六歌仙扁額は、多彩な工夫を可能にする芸術として、極めて高い伝統を保ちながら、新鮮度の高い奉納品であった。このため、江戸初期の各種の東照宮を荘厳する奉納品として重視されたのである。

「付記」調査にご協力くださった神戸女子大学・鈴鹿千代乃教授、清州市日吉神社・輪隆裕宮司、久能山東照宮・落合偉洲宮司、日光東照宮宝物館・山作良之氏、世良田東照宮・菊池貞寛宿禰、岡崎市立美術博物館・堀江登志美氏に感謝申し上げます。また、この研究をなすには貴重なご教示をくださったいわき明星大学・田嶋一夫教授、国文学研究資料館・寺島恒世副館長に感謝申し上げます。なお、五年間もの長期間にわたり、「三十六歌仙絵」の研究に常に情熱的で有意義なご指導をくださった藏中しのぶ教授に深く御礼を申し上げます。

附表1 江戸初期の東照宮二十六歌仙扁額七本の歌仙和歌本文

左1人麿

日光本	.. ほのくくと	あかしのうらの	あさ霧に	しま□くれ行	舟をしそおもふ
久能山本	.. ほのくくと	あかしの浦の	あさきりに	しまかくれ行	舟をしそおもふ
水戸本	.. ほのくくと	あかしの浦の	あさ霧に	島隠行	舟をしそおもふ
世良田本	.. ほのくくと	あかしのうらの	朝きりに	しまかくれ行	舟をしそおもふ
仙波本	.. ほのくくと	あかしの浦の	あさ霧に	島かくれゆく	ふねをしそおもふ
金沢本	.. ほのくくと	あかしの浦の	あさきりに	しまかくれゆく	舟をしそおもふ
滝山本	.. ほのくくと	明石の浦の	朝霧に	島かくれ行	舟をしそおもふ

左2躬恒

日光本	.. すみよしの	松を秋かせ	ふくからに	こゑうちそふる	おきつしらなみ
久能山本	.. いつくとも	春のひかりは	わかなくに	またみよし野の	山は雪ふる
水戸本	.. すみよしの	松を秋かせ	ふくからに	□□□□□□る	□□□□□□□□
世良田本	.. 我宿の	花みかてらに	くる人は	散なむ後そ	こひしかるへき
仙波本	.. わかやとの	はなみがてらに	くる人は	ちりなむ後そ	こひしがるへき
金沢本	.. すみよしの	松を秋かせ	ふくからに	こゑうちそふる	おき□しらなみ
滝山本	.. いつくとも	春のひかりは	わかなくに	またみよしの、	山は雪ふる

左3家持

日光本	..まきもくの	ひはらもいまた	くもらねは	小松かはらに	あは雪そふる
久能山本	..春の野に	あさるきゝすの	つま恋に	をのかありかを	人にしれつゝ
水戸本	..まきもくの	ひはらもいまた	くもらねは	こまつかはらに	あは雪そふる
世良田本	..さをしかの	朝たつをのゝ	秋はぎに	玉とみるまで	をけるしらつゆ
仙波本	..さほしかの	あさたつをのゝ	あきはきに	玉とみるまで	をけるしらつゆ
金沢本	..まきもくの	ひはらもいまた	くもらねは	小松かはらに	あは雪そふる
滝山本	..春之野に	あさるききすの	妻恋に	をのか有かを	人にしれ筒

左4業平

日光本	..月やあらぬ	春やむかしの	はるならぬ	我身ひとつは	もとのみにして
久能山本	..世中に	たえてさくらの	なかりせは	春の心は	のとけからまし
水戸本	..月やあらぬ	春やむかしの	はるならぬ	我身ひとつは	□□の身にして
世良田本	..世の中	にたえて桜の	なかりせは	春の心は	のとけからまし
仙波本	..世中に	たえてさくらの	なかりせは	はるのこゝろは	のとけからまし
金沢本	..月やあらぬ	春やむかしの	はるならぬ	わか身ひとつは	もとのみにして
滝山本	..世中に	たえてさくらの	なかりせは	ゝるのこゝろは	のとけからまし

左5素性

日光本 ..をとにのみ きくのしら露 よるはをきて ひるはおもひに あへすけぬへし  
 久能山本 ..みわたせは 柳さくらを こきませて みやこそはるの にしきなりける  
 水戸本 ..をとにのみ きくのしら露 よるはおきて ひるは思ひに あへすけぬへし  
 世良田本 ..いまこむと いししはかりに なか月の あり明の月を 待出つるかな  
 仙波本 ..いまこんと いひしはかりに なか月の 有明のつきを まち出つるかな  
 金沢本 ..をとにのみ きくのしら露 よるはをきて ひるはおもひに あへすけぬへし  
 滝山本 ..みわたせは 柳さくらを こきませて みやこそはるの にしきなりける

左6猿丸

日光本 ..おく山に もみ□ふ□わけ なくしか□ □ゑき□時そ 秋□かなしき  
 久能山本 ..おく山に 紅葉ふみわけ なくしかの 聲きく時そ 秋はかなしき  
 水戸本 ..おく山に もみちふみわけ 鳴しかの 声きくときそ 秋は悲しき  
 世良田本 ..おく山に もみちふみ分 なくしかの こゑきく時そ 秋はかなしき  
 仙波本 ..おく山に もみちふみわけ なく鹿の 聲きくときそ 秋はかなしき  
 金沢本 ..おく山に もみちふみわけ なくしかの 聲きく時そ 秋はかなしき  
 滝山本 ..おく山に 紅葉ふみ分 なく鹿の 聲きく時そ あきはかなしき

左7兼輔

日光本	..	みしか夜の	ふけゆくまゝに	高砂の	みねのまつかせ	ふくかとそきく
久能山本	..	人のおやの	心はやみに	あらねとも	子を思□みちに	まよひぬるかな
水戸本	..	みしかよの	ふけ行□□□	□□□	みねのまつ風	□□□□□□□
世良田本	..	みしか夜の	ふけゆくまゝに	高砂の	みねのまつかせ	ふくかとそきく
仙波本	..	人のおやの	こゝろはやみに	あらねとも	子をおもふみちに	まとひぬるかな
金沢本	..	人のおやの	心はやみに	あらねとも	子を思ふみちに	まとひぬるかな
滝山本	..	人のおやの	心はやみに	あらねとも	子を□みちに	まとひぬるかな

左8敦忠

日光本	..	伊勢のうみ	ちひろのはまに	ひろふとも	今はなにてふ	かひかあるへき
久能山本	..	あひみての	ゝちのこゝろに	くらふれは	むかしは物も	ほもはさりけり
水戸本	..	伊勢のうみ	ちひろの浜に	ひろふとも	いまはなにてふ	かひかあるへき
世良田本	..	あひみての	後の心に	くらふれは	むかしは物も	おもはさりけり
仙波本	..	逢みての	後のこゝろに	くらふれは	むかしはものも	思はさりけり
金沢本	..	伊勢の海	ちひろのはまに	ひろふとも	いまはなにてふ	かひあるへき
滝山本	..	あひみて	のゝちのこゝろに	くらふれは	むかしは物も	ほもはさりけり

左9公忠

日光本	…とのもりの	とものみやつこ	こゝろあらは	この春はかり	あさきよめすな
久能山本	…行やらて	山ちくらしつ	ほとゝきす	いまひと□忍の	きかまほしさに
水戸本	…とのもりの	とものみやつこ	こゝろあらは	この春はかり	あさきよめすな
世良田本	…ゆきやらて	山ちくらしつ	ほとゝきす	いま一聲の	きかまほしきに
仙波本	…ゆきやらて	山ちくらしつ	ほとゝきす	いまひとこ忍の	きかまほしさに
金沢本	…とのもりの	とものみやつこ	こゝろあらは	この春はかり	あさきよめすな
滝山本	…ゆきやらて	山路くらしつ	郭公	今一聲の	きかまほしさに

左10斎宮女御

日光本	…袖にさへ	秋のゆふへは	しられけり	きえしあさちか	露をかけつゝ
久能山本	…琴の音に	峯の松風	かよふらし	何の□より	調そめけむ
水戸本	…袖にさへ	あきのゆふへは	しられけり	きえしあさちか	露をかけつゝ
世良田本	…ことの音に	峯の松風	かよふらし	いつれのをより	しらへ初けん
仙波本	…ことのねに	みねの松かせ	かよふらし	いつれのをより	しらへそめけむ
金沢本	…琴の音に	峯の松風	かよふらし	何のをより	調そめけむ
滝山本	…ことのねに	峯の松かせ	かよふらし	いつれの緒より	しらへそめけむ

左11敏行

日光本 .. 秋はきの 花さきにけり たかさこの をのへの鹿は 今やなくらん  
 久能山本 .. 秋きぬと 目にはさやかに みえねとも 風の音にそ 驚かれぬる  
 水戸本 .. 秋はきの 花咲にけり たかさこの 尾上の鹿は 今や鳴らむ  
 世良田本 .. 秋きぬと めにはさやかに みえねとも 風の音にそ おとろかれぬる  
 仙波本 .. 秋きぬと 目にはさやかに みえねとも 風のをとにそ おとろかれぬる  
 金沢本 .. 秋はきの 花さきにけり たかさこの おのへの鹿は いまやなくらん  
 滝山本 .. 秋きぬと めにはさやかに みえねとも 風の音にそ おとろかれぬる

左12宗于

日光本 .. やまさとは 冬そさひしさ まさりける 人めも草も かれぬとおもへは  
 久能山本 .. 常磐なる 松の緑も 春くれは 今一しほの 色まさりけり  
 水戸本 .. 山さとは 冬そさひしさ まさりける 人めもくさも かれぬとおもへは  
 世良田本 .. 山里は 冬そさひしさ まさりける 人めも草も かれぬとおもへは  
 仙波本 .. ときはなる 松のみとりも 春くれは いま一しほの いろまさりけり  
 金沢本 .. 常磐なる 松の緑も 春くれは 今一しほの 色まさりけり  
 滝山本 .. ときはなる 松のみとりも 春くれは いま一しほの 色まさりけり



左13 清正

日光本	.. 天つかせ	ふけゐの浦に	ゐるたつの	なとか雲井に	かへらさるへき
久能山本	.. 天津風	ふけゐの浦に	居るたつの	なとか雲井に	帰さるへき
水戸本	.. □□□□□	ふけゐの浦に	□□たつの	なとか雲井に	かへらさるへき
世良田本	.. 天つかせ	ふけゐの浦に	ゐるたつの	なとか□□□	かへらさる□□
仙波本	.. ねのひし□	しめつるのへの	姫小松	ひかてや千世の	かけをまたまし
金沢本	.. 天津風	ふけゐの浦に	ゐるたつの	なとか雲居に	帰さるへき
滝山本	.. 天津風	ふけゐの浦に	ゐるたつの	なとか雲井に	帰さるへき

左14 興風

日光本	.. ちきりけむ	こゝろそつらき	織女の	としにひとたひ	あふはあふかは
久能山本	.. 契劔	心そつらき	織女の	年に一たひ	あふは逢かは
水戸本	.. ちきりけむ	こゝろそつらき	七夕の	としにひとたひ	あふ□□□□□
世良田本	.. 契劔	心そつらき	織女の	年に一たひ	あふは逢かは
仙波本	.. 契けん	こゝろそつらき	たなはたの	としに一たひ	逢はあふかは
金沢本	.. ちきりけむ	こゝろそつらき	織女の	としにひとたひ	あふはあふかは
滝山本	.. 契□	心そつらき	織女の	年□一たひ	あふは逢かは

左15是則

日光本	..みよしの、	やまのしら雪	つもるらし	ふるさとさむく	なりまさるなり
久能山本	..三吉野の	やまのしら雪	積らし	故郷さむく	成まさる也
水戸本	..みよしの、	山のしら雪	つもるらし	ふるさとさむく	なりまさる也
世良田本	..みよしの、	山のしら雪	つもるらし	ふるさとさむく	なりまさる也
仙波本	..みよしの、	山のしら雪	つもるらし	ふる里さむく	なりまさるなり
金沢本	..みよし野の	やまのしら雪	つもるらし	ふるさとさむく	なりまさるなり
滝山本	..みよし野の	山のしら雪	つもるらし	ふるさとさむく	なりまさるなり

左16小大君

日光本	..おほる河	そま山かせの	さむければ	たついはなみを	ゆきかとそ見る
久能山本	..いは、しの	夜の契も	絶ぬへし	あくるわひしき	葛城の神
水戸本	..大井河	そま山風の	さむければ	たつ岩なみを	雪かとそ見る
世良田本	..岩はしの	よるの契も	たえぬへし	あくるわひしき	かつらきの神
仙波本	..岩橋の	よるのちきりも	たえぬへし	あくるわひしき	かつら□の神
金沢本	..おほる河	そまやまかせの	さむければ	たついはなみを	雪かとそ見る
滝山本	..岩橋の	よるの契も	たえぬへし	あくるわひしき	葛城の神

左17能宣

日光本 .. みかきもり 忽しかたく火の よるはもえ ひるはきえつ、 ものをこそ思へ  
 久能山本 .. 千年まで かきれる松も 今日よりは 君に引れて 萬代やへむ  
 水戸本 .. 御垣もり 忽しのたくひの よるはもえ ひるはきえつ、 物をこそおもへ  
 世良田本 .. みかきもり 忽しのたく火の よるはもえ ひるはきえつ、 ものをこそ思へ  
 仙波本 .. 千とせまで かきれる松も けふよりは 君にひかれて よろつ世やへむ  
 金沢本 .. 御墻もり 忽しのたく火の よるはもえ ひるはきえつ、 ものをこそ思へ  
 滝山本 .. 千とせまで かきれる松も 今日よりは 君にひかれて よろつ代やへむ

左18兼盛

日光本 .. しのふれと いろにいてにけり 我こひは 物やおもふと 人のとふまで  
 久能山本 .. 暮て行 秋の形見に 置物は わか本結の 霜にそ有ける  
 水戸本 .. しのふれと 色に出てにけり わか恋は ものやおもふと 人のとふまで  
 世良田本 .. しのぶれと 色に出にけり 我こひは 物やおもふと 人のとふまで  
 仙波本 .. み山いて、 夜半にやきつる 郭公 あかつきかけて こ忽のきこゆる  
 金沢本 .. しのふれと いろにいてにけり わかこひは ものやおもふと 人のとふまで  
 滝山本 .. 暮て行 秋の形見に 置物は わか本結の 霜にそ有ける

右1貫之

日光本 .. むすふ手の しづくにゝこる 山の井の あかても人に わかれぬるかな  
久能山本 .. さくらちる 木のしたかせは さむからて 里にしられぬ 雪はふり行く  
水戸本 .. むすふての しづくにゝこる 山の井の あかても人に わかれぬるかな  
世良田本 .. 桜散 このした風は さむからて 空にしられぬ 雪そふりける  
仙波本 .. さくらちる 木のしたかせは 寒からて 空にしられぬ 雪そふりける  
金沢本 .. さくらちる 木のしたかせは さむからて 空にしられぬ 雪そふりける  
滝山本 .. さくらちる 木の下かせは 寒からて 空にしられぬ 雪そふりける

右2伊勢

日光本 .. 三輪のやま いかゝまちみむ としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
久能山本 .. みわのやま いかに待みん としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
水戸本 .. みわのやま い□□まち見ん としふとも たつぬる人も あらしと思へは  
世良田本 .. 散ちらす きかまほしきを 故郷の 花見てくらす 人もあはなん  
仙波本 .. ちりちらす きかまほしきを 故郷の はなみてかへる ひともあはなむ  
金沢本 .. 三輪のやま いかにまち見む としふとも たつぬる人も あらしとおもへは  
滝山本 .. みわのやま いかに待みん としふとも たつぬる人も あらしとおもへは

右3 赤人

日光本 .. わかのうらに 塩みちくれは かたをなみ あしへをさして たつなきわたる  
 久能山本 .. 和哥のうらに 塩みちくれは かたほなみ 芦邊をさして たつ鳴わたる  
 水戸本 .. 若浦に しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつ鳴渡  
 世良田本 .. わかのうらに 塩みちくれは かたほなみ 芦邊をさして たつ鳴わたる  
 仙波本 .. わかの浦に しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつ鳴わたる  
 金沢本 .. わかのうらに しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつなきわたる  
 滝山本 .. わかの浦に しほみちくれは かたをなみ あしへをさして たつ鳴わたる

右4 遍昭

日光本 .. いそのかみ 布留の山への さくらはな うへけんときを しる人そなき  
 久能山本 .. たらちねは かゝれとてしも むはたまの 我くろかみは なくすやありけん  
 水戸本 .. いそのかみ ふるの山辺の さくらはな うへけんときを しる人そなき  
 世良田本 .. 我やとは 道もなきまで あれにけり つれなき人を 待とせしまに  
 仙波本 .. わか宿は みちもなきまで あれにけり つれなき人を まつとせしまに  
 金沢本 .. いそのかみ ふるの山への さくらはな うへけんときを しる人そなき  
 滝山本 .. たらちねは かゝれとてしも むは玉の わか黒髪は なくすや有けむ

右5友則

日光本 .. 夕されは ほたるよりけに もゆれとも ひかりみねはや 人のつれなき  
 久能山本 .. 秋かせに はつかりかねそ きこゆなる たかたまつさを かけてきつらむ  
 水戸本 .. ゆふされは ほたるよりけに もゆれとも ひかりみねはや 人のつれなき  
 世良田本 .. 夕されは さほの川原の 河霧に ともまとはせる ちとりなくなり  
 仙波本 .. ゆふされは さほのかはらの 河霧に ともまとはせる 千とりなくなり  
 金沢本 .. ゆふされは ほたるよりけに もゆれとも ひかりみねはや 人のつれなき  
 滝山本 .. 秋かせに はつかりかねそ きこゆなる たかたまつさを かけてきぬらん

右6小町

日光本 .. わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそ思ふ  
 久能山本 .. 色みえて うつろふものは 世中の 人のこゝろの 花にそありける  
 水戸本 .. わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそ思ふ  
 世良田本 .. わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそ思ふ  
 仙波本 .. 色みえて うつろふものは 世中の ひとのこゝろの はなにそありける  
 金沢本 .. わひぬれは 身をうき草の ねをたえて さそふ水あらは いなむとそ思ふ  
 滝山本 .. 色みえて うつろふ物は 世中の 人の心の 花にそ有ける

右7朝忠

日光本 .. 万代の はしめとけふを いのりをき□ 今ゆくすゑ□ 神そかそへん  
久能山本 .. 逢事の たえてしなくは 中くくに 人をも身をも うらみさらまし  
水戸本 .. よろつ世の はしめとけふを いのりをきて いま行すゑは 神そかそへん  
世良田本 .. 萬代の はしめとけふを いのりをきて 今ゆくすゑを 神そかそへむ  
仙波本 .. あふ事の たえてしなくは 中くくに ひとをも身をも うらみさらまし  
金沢本 .. 万代の はしめとけふを おのりをきて いまゆくすゑは 神そかそへむ  
滝山本 .. 逢事の たえてしなくは 中くくに 人をも身をも うらみさらまし

右8高光

日光本 .. はるすきて ちりはてにける 梅のはな たゝ香はかりそ 枝にのこれる  
久能山本 .. かくはかり へかたくみゆる 世中に うらやましくも すめる月かな  
水戸本 .. 春すきて ちりはてにける むめのはな たゝ香はかりそ えたにのこれる  
世良田本 .. かく計 へかたくみゆる 世中に うら山しくも すめる月哉  
仙波本 .. かく計 へかたく見ゆる よのなかに うら山しくも すめる月かな  
金沢本 .. 春すきて ちりはてにける 梅のはな たゝ香はかりそ 枝にのこれる  
滝山本 .. かく計 へかたくみゆる 世中に うらやましくも すめる月かな

右9忠岑

日光本	.. 春たつと	いふはかりにや	みよしの、	山もかすみて	けさはみゆらむ
久能山本	.. 在明の	つれなくみえし	別より	暁はかり	うき物はなし
水戸本	.. 春たつと	いふはかりにや	みよし野の	山もかすみて	けさは見ゆらむ
世良田本	.. 在明の	つれなくみえし	別より	暁はかり	うき物はなし
仙波本	.. 春たつと	いふはかりにや	みよしの、	山もかすみて	今朝は見ゆらむ
金沢本	.. 春たつと	いふはかりにや	みよしの、	山もかすみて	けさ見ゆらむ
滝山本	.. 有明の	つれなくみえし	別より	暁はかり	うき物はなし

右10頼基

日光本	.. ねのひする	野へにこ松を	引つれて	かへる山路に	うくひすそなく
久能山本	.. 一ふしに	千代をこめたる	つゑなれは	つくともつきし	君かよはひは
水戸本	.. □□□□□	□□□□まつを	ひきつれて	かへる山ちに	うくひすそなく
世良田本	.. 子日する	墅へに小松を	引つれて	かへる山路に	鶯そなく
仙波本	.. 一ふしに	千世をこめたる	つゑなれは	つくともつきし	君か齡は
金沢本	.. ひとふしに	ちよをこめたる	つゑなれは	つくともつきし	君かよはひは
滝山本	.. 一ふしに	千代をこめたる	杖なれは	つくともつきし	きみかよはひは



右11重之

日光本 .. 夏かりの 玉えのあしを ふみしたき むれゐる鳥の たつ空そなき  
久能山本 .. 風をいたみ 岩うつなみの をのれのみ くだけてものを おもふころかな  
水戸本 .. なつかりの たまえのあしを ふみしたき むれゐるとりの たつ空そなき  
世良田本 .. よし墅山 峯のしら雪 いつきえて けさは霞の 立かはるらん  
仙波本 .. 吉野山 峯のしら雪 いつ消て 今朝は霞の 立かはるらむ  
金沢本 .. 夏かりの たまえのあしを ふみしたき むれゐる鳥の たつ空そなき  
滝山本 .. かせをいたみ 岩うつ波の をのれのみ くだけて物を 思ふころかな

右12信明

日光本 .. ほのくくと ありあけの月の 月かけに 紅葉ふきおろす やまおろしのかせ  
久能山本 .. あたら夜の 月と花とを おなしくは あはれしれらん 人にみせはや  
水戸本 .. ほのくくと 有曙のつきの □□けに もみち□□□□ 山おろしの□□  
世良田本 .. ほのくくと あり明の月の 月かけに 紅葉ふきおろす やまおろしのかせ  
仙波本 .. 恋しきは おなじこゝろに あらすとも 今夜の月を 君みさらめや  
金沢本 .. ほのくくと 在明の月の つきかけに 紅葉ふきおろす やまおろしのかせ  
滝山本 .. あたら夜の 月とはなとを おなしくは あはれしれらむ ひとに見せはや

右13順

日光本 .. 水のおもに てる月なみを かそふれは 今宵そ秋の もなかなりける  
 久能山本 .. 水のおもに てる月なみを かそふれ□ こよひそあきの もなかなりける  
 水戸本 .. 水のおもに てる月なみを かそふれは □□□□□□□□ □□□□□□□□  
 世良田本 .. 水のおもに てる月なみを かそふれは 今宵そ秋の もなかなりける  
 仙波本 .. 水のおもに てる月なみを かそふれは こよひそ秋の 最中なりける  
 金沢本 .. みつのおもに てる月なみを かそふれは こよひそあきの もなかなりける  
 滝山本 .. 水のおもに てる月なみを かそふれは こよひそあきの 最中なりける

右14元輔

日光本 .. ちきりきな かたみにそてを しほりつゝ、 すゑのまつやま なみこさしとは  
 久能山本 .. をとなしの 河とそつゐに なかれ□つゐる いはて物おもふ 人の涕は  
 水戸本 .. ちきりきな かたみにそてを しほりつゝ、 すゑのまつやま なみこさしとは  
 世良田本 .. 秋の墅の 萩のにし□□ □宿に 鹿の音ながら うつしてしかな  
 仙波本 .. 秋の野の はきのにしきを わか宿に 鹿の音ながら うつしてしかな  
 金沢本 .. ちきりきな かたみにそてを しほりつゝ、 すゑのまつやま なみこさしとは  
 滝山本 .. をとなしの 河とそつゐに なかれいづる いはて物おもふ □の涕は

右15元真

日光本	.. さきにけり	わかやまさとの	うのはなは	かきねにきえぬ	雪とみるまで
久能山本	.. なつ草は	しけりにけりな	玉ほこの	みちゆき人も	むすふはかりに
水戸本	.. さきにけり	我山やまさとの	うの花は	かきねにきえぬ	雪と見るまで
世良田本	.. 人ならば	まてといはまし	霍公	二聲とたに	なかくて行らむ
仙波本	.. 人ならば	まてといはまし	ほとゝきす	ふたこゑとたに	なかくてゆくらむ
金沢本	.. さきにけり	わか山さとの	卯のはなは	かきねにきえぬ	雪とみるまで
滝山本	.. 夏草は	茂りにけりな	玉銚の	みちゆきひとも	むすふはかりに

右16仲文

日光本	.. おもひしる	人にみせはや	夜もすから	我とこなつに	おきゐたる露
久能山本	.. 有明の	月のひかりを	まつ程に	わか世いたく	ふけにけるかな
水戸本	.. おもひしる	人にみせはや	夜もすから	我とこ夏に	□□ゐたる露
世良田本	.. □□□□□□	□□□□□□□□	□□□□□□□□	□□□□□□□□	□□□□□□□□
仙波本	.. あり明の	月のひかりを	まつほどに	わか世のいたく	ふけにけるかな
金沢本	.. おもひしる	人にみせはや	夜もすから	わかとこなつに	おきゐたる露
滝山本	.. 有明の	月の光を	まつ程に	わかよのいたく	更にける哉

右17忠見

日光本	.. 恋すてふ	我名はまたき	たちにつけり	人しれすこそ	おもひそめしか
久能山本	.. 恋すてふ	わか名はまたき	たちにつけり	人しれすこそ	おもひそめしか
水戸本	.. 恋すてふ	我名はま□□	□□につけり	人しれすこそ	おもひそめしか
世良田本	.. さよふけて	ね覚さりせは	ほとゝきす	人つてにこそ	きくへかりけれ
仙波本	.. さ夜ふけて	ねさめさりせは	ほとゝきす	人つてにこそ	きくへかりけれ
金沢本	.. こひすてふ	我名はまたき	たちにつけり	人しれすこそ	おもひそめしか
滝山本	.. 恋すてふ	我名はまたき	立につけり	人しれすこそ	思ひそめしか

右18中務

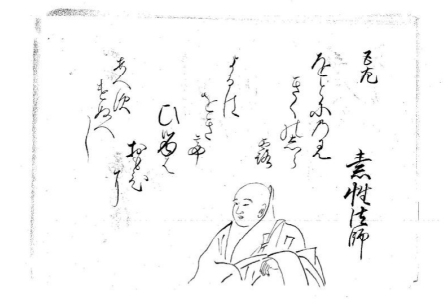
日光本	.. 秋かせの	ふくにつけても	とはぬかな	萩の葉ならば	をとはしてまし
久能山本	.. 秋風の	ふくにつけても	とはぬかな	おきの葉ならば	をとはしてまし
水戸本	.. あき風の	ふくにつけても	とはぬかな	おきの葉ならば	をとはしてまし
世良田本	.. 秋かせの	□□につけても	とはぬかな	萩□葉ならば	をとはしてまし
仙波本	.. 鶯の	こゑなかりせは	雪きえぬ	山さといかて	はるをしらまし
金沢本	.. 秋かせの	ふくにつけても	とはぬかな	萩のはならば	をとはしてまし
滝山本	.. 秋風の	ふくにつけても	とはぬかな	おきの葉ならば	音はしてまし

附表2 『世尊寺家三十六人歌合草之形散形』の書

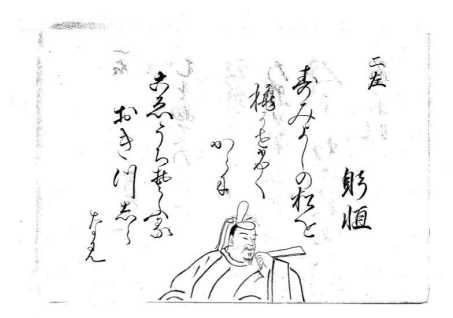
左1人麿



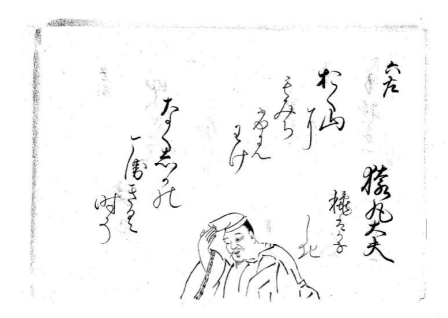
左5素性



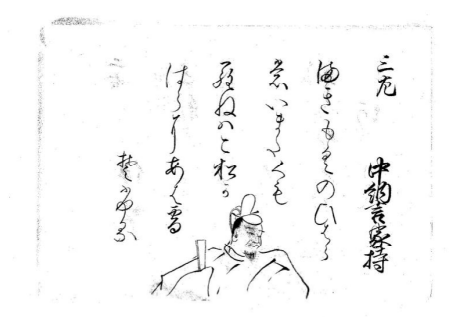
左2躬恒



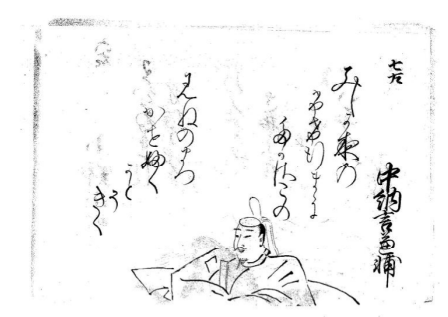
左6猿丸



左3家持



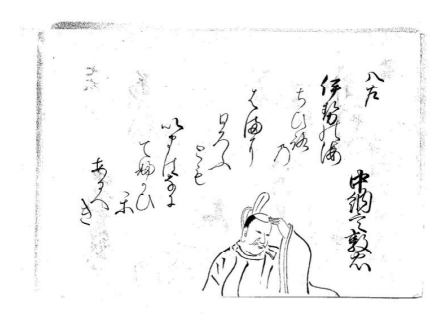
左7兼輔



左4業平



左8敦忠





左13 清正



左9 公忠



左14 興風



左10 斎宮女御



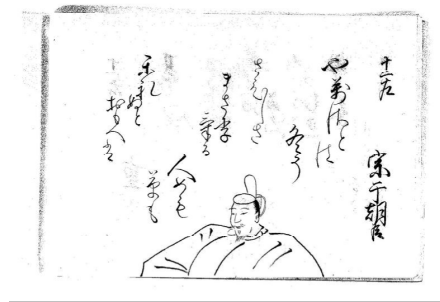
左15 是則



左11 敏行



左16 小大君

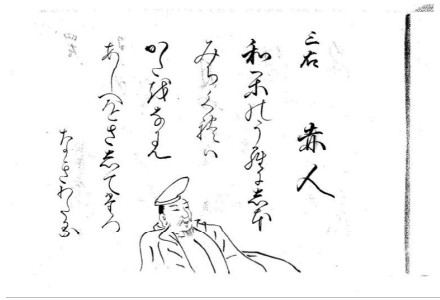


左12 宗于

左17能宣



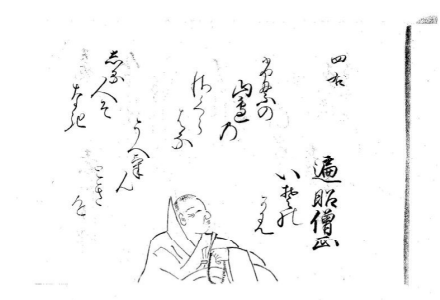
右3 赤人



左18兼盛



右4 遍昭



右1貫之



右5 友則



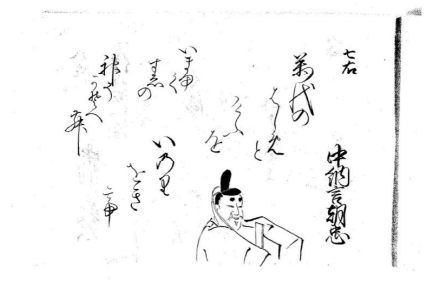
右2伊勢



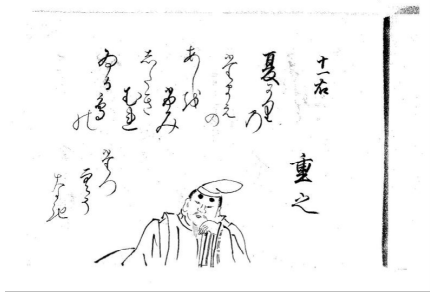
右6小町



右7朝忠



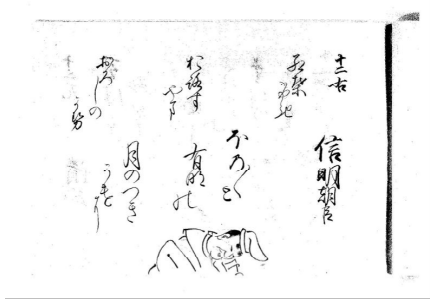
左11重之



右8高光



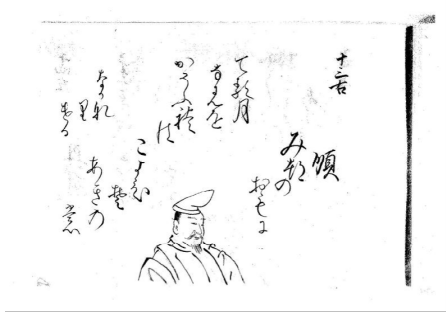
右12信明



右9忠岑



右13順



右10頼基



右14元輔

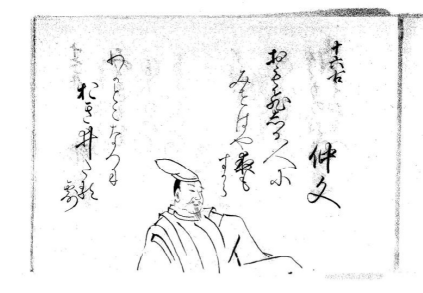




右15元真



右16仲文



右17忠見



右18中務



附表3 日光東照宮三十六歌仙扁額の書

左1人麿



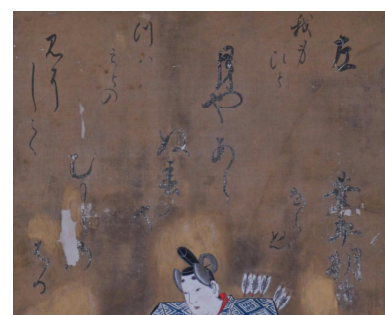
左2躬恒



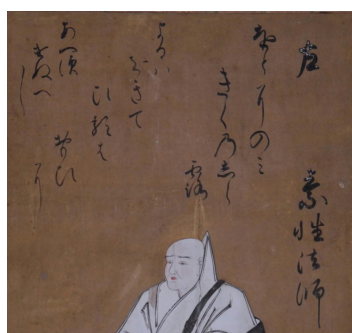
左3家持



左4業平



左5素性



左6猿丸



左7兼輔



左8敦忠

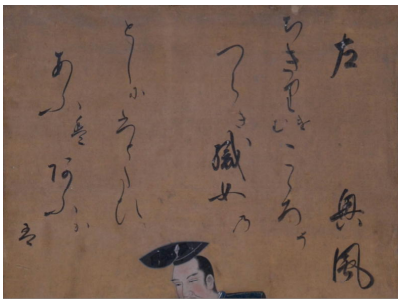




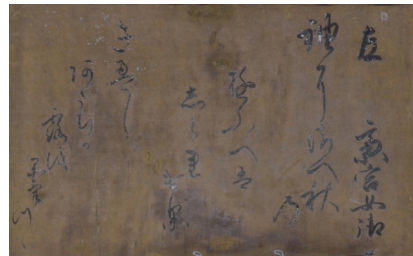
左13 清正



左9 公忠



左14 興風



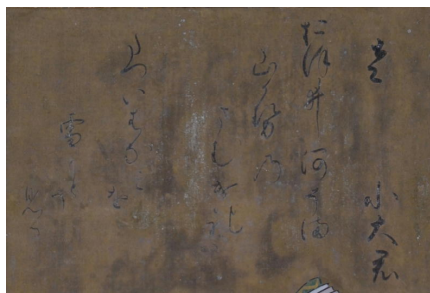
左10 齋宮女御



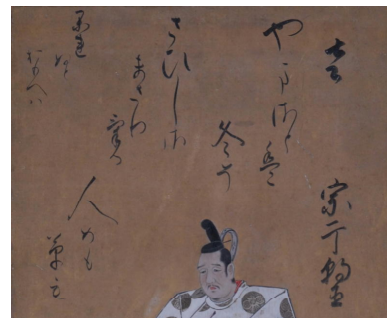
左15 是則



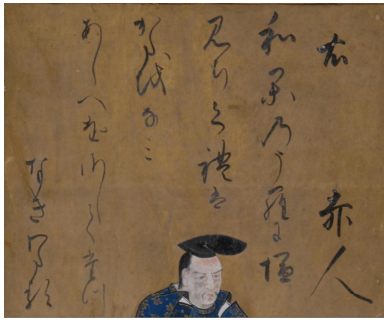
左11 敏行



左16 小大君



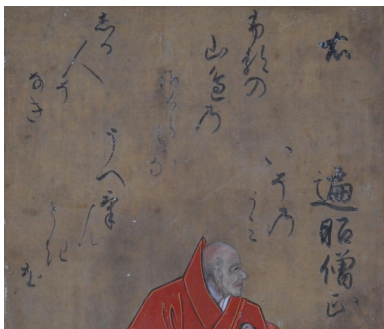
左12 宗子



右3 赤人



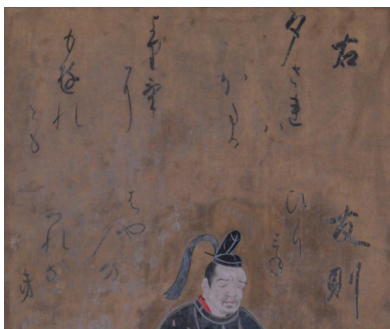
左17 能宣



右4 遍昭



左18 兼盛



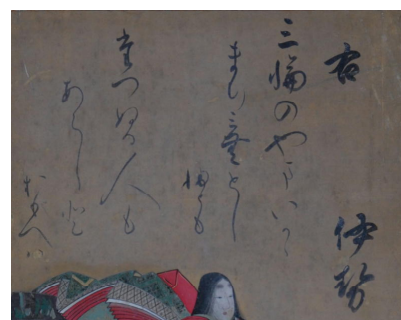
右5 友則



右1 貫之



右6 小町



右2 伊勢



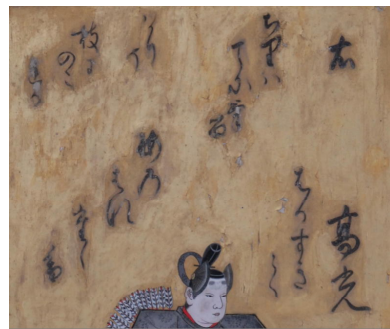
右11重之



右7朝忠



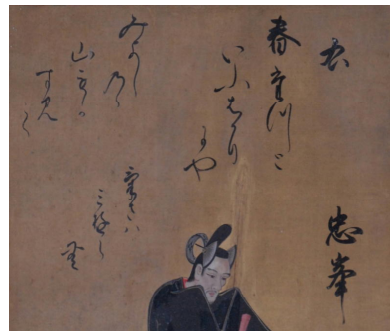
右12信明



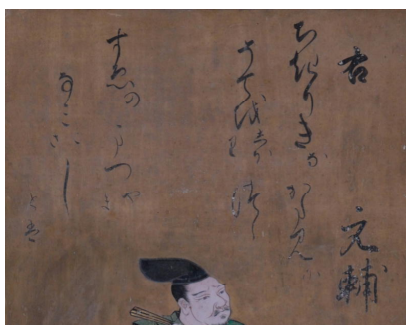
右8高光



右13順



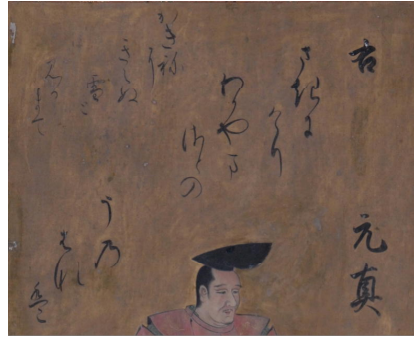
右9忠岑



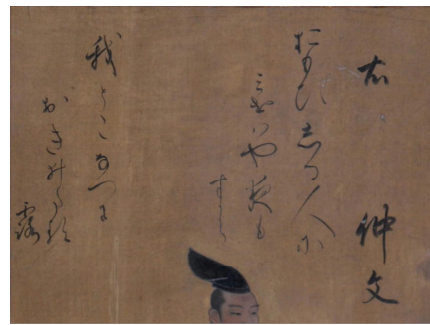
右14元輔



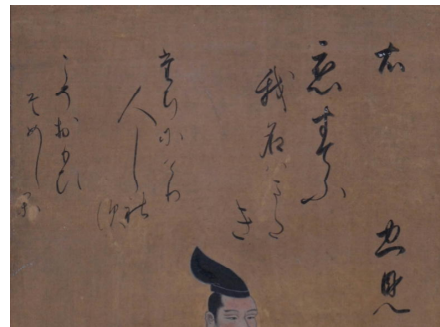
右10頼基



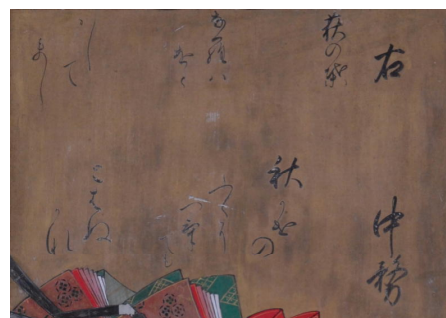
右15元真



右16仲文



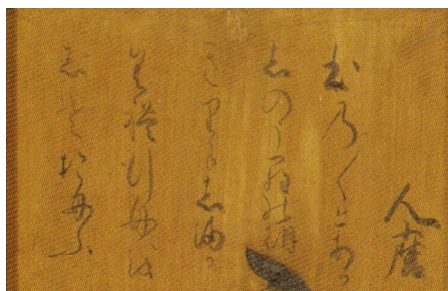
右17忠見



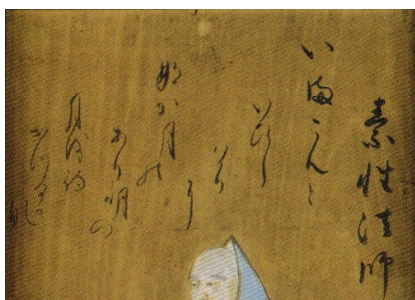
右18中務

附表4 世良田東照宮三十六歌仙扁額の書

左1 人麿



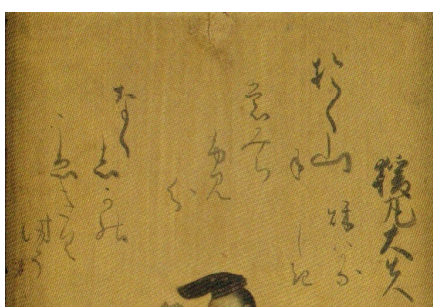
左5 素性



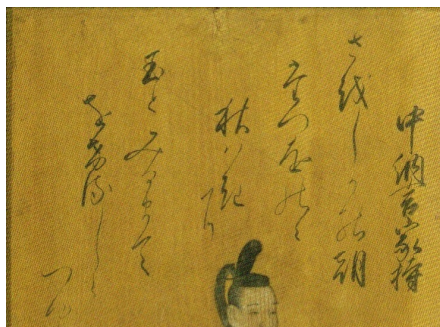
左2 躬恒



左6 猿丸



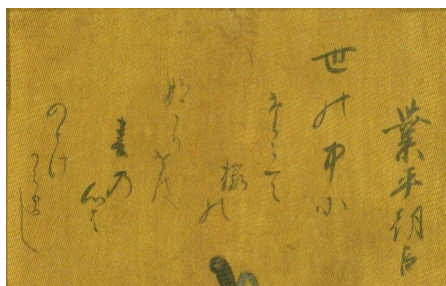
左3 家持



左7 兼輔



左4 業平

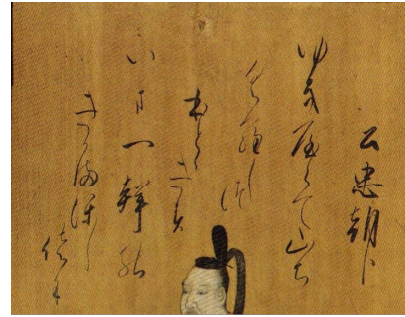


左8 敦忠

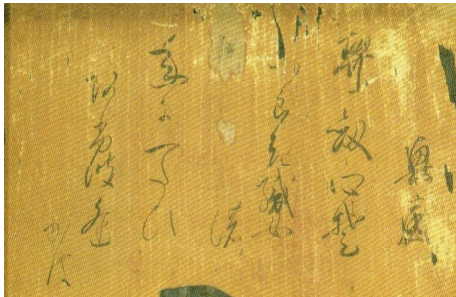




左13 清正



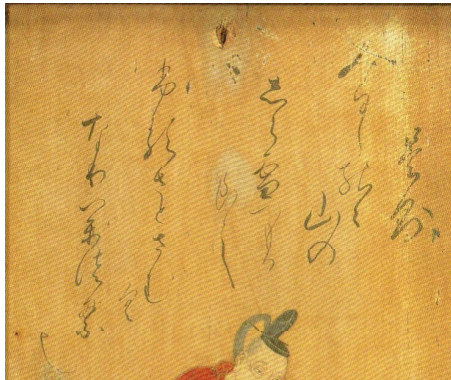
左9 公忠



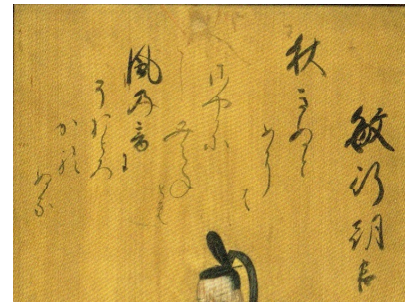
左14 興風



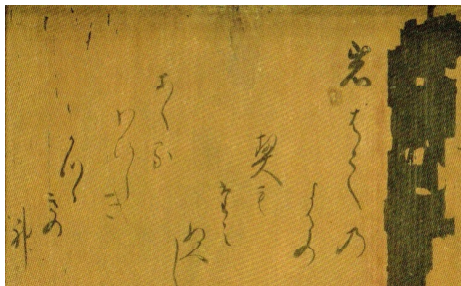
左10 斎宮女御



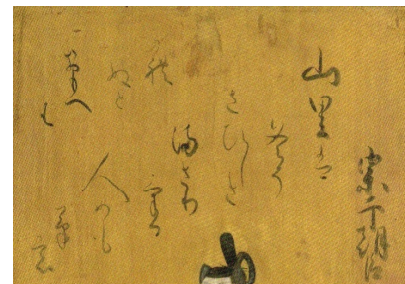
左15 是則



左11 敏行



左16 小大君

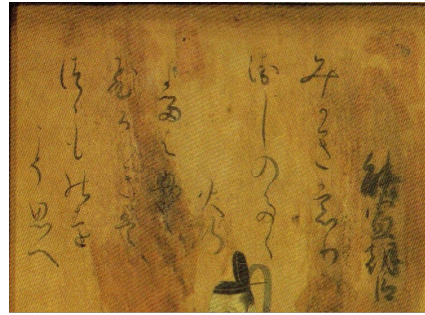


左12 宗子





右3 赤人



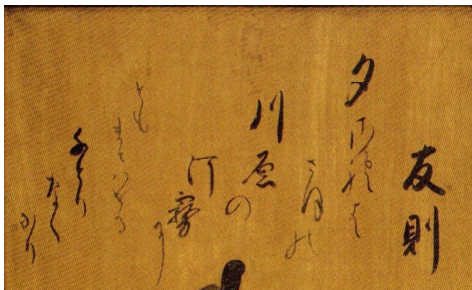
左17 能宣



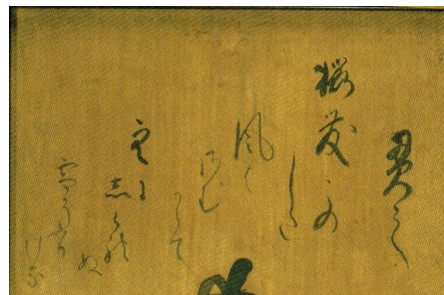
右4 遍昭



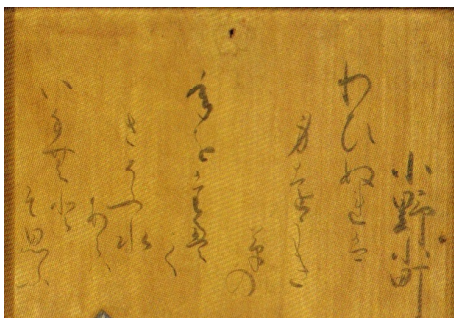
左18 兼盛



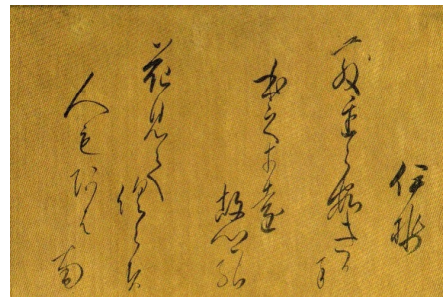
右5 友則



右1 貫之



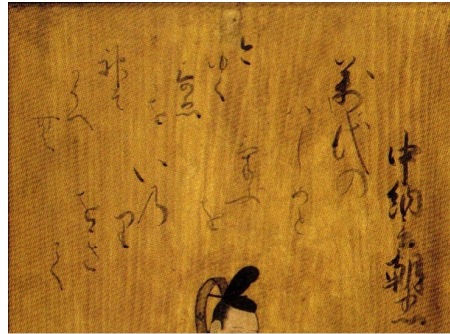
右6 小町



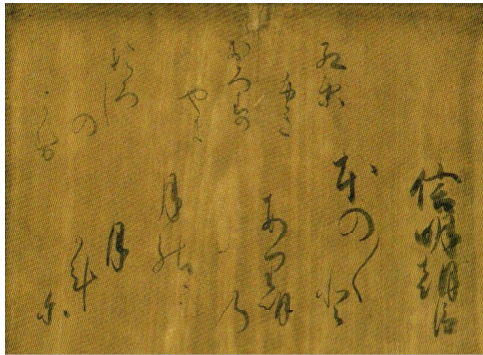
右2 伊勢



右11重之



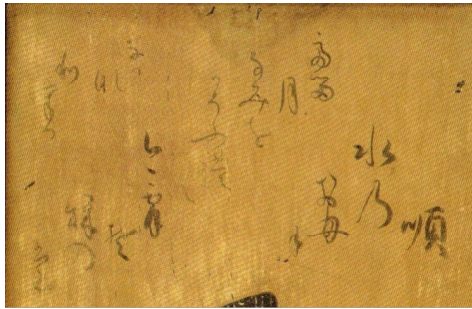
右7朝忠



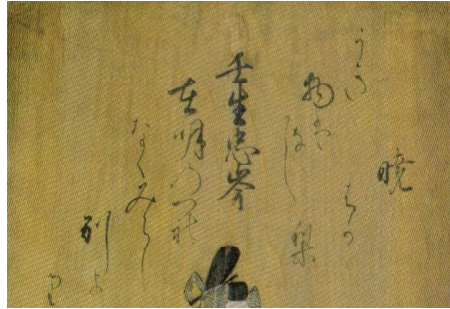
右12信明



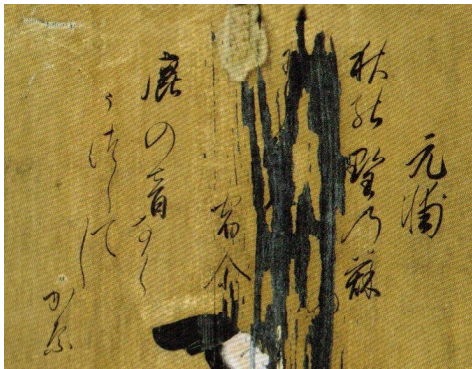
右8高光



左13順



右9忠岑



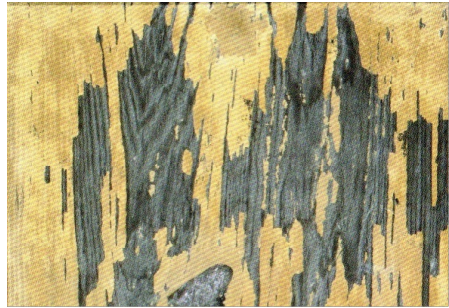
左14元輔



右10頼基



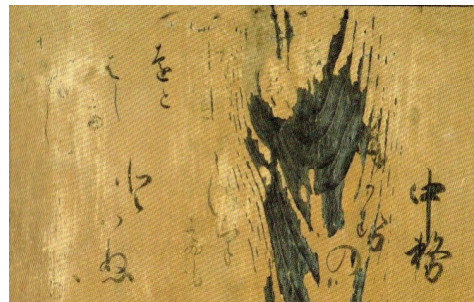
右15元真



右16仲文




右17忠見







右18中務

附表5 江戸初期の東照宮三十六歌仙扁額七本の歌仙絵

←	②	③	左
①			
人麿	躬恒	家持	
			日光本
			久能山本
			水戸本
			世良田本
			仙波本
			金沢本
			滝山本

④ 業平	⑤ 素性法師	⑥ 猿丸	左
			日光本
			久能山本
			水戸本
			世良田本
			仙波本
			金沢本
			滝山本

←			左
⑦	⑧	⑨	
兼輔	敦忠	公忠	
			日光本
			久能山本
			水戸本
			世良田本
			仙波本
			金沢本
			滝山本

←			左
⑩	⑪	⑫	
斋宫女御	敏行	宗于	
			日光本
			久能山本
			水戸本
			世良田本
			仙波本
			金沢本
			滝山本

←			左
⑬ 清正	⑭ 興風	⑮ 是則	
			日光本
			久能山本
			水戸本
			世良田本
			仙波本
			金沢本
			滝山本



←			左
⑬ 小大君	⑭ 能宣	⑮ 兼盛	
			日光本
			久能山本
			水戸本
			世良田本
			仙波本
			金沢本
			滝山本

右

	③ 赤人	② 伊勢	① 貫之
日光本			
久能山本			
水戸本			
世良田本			
仙波本			
金沢本			
滝山本			

右		→		
		⑥	⑤	④
		小町	友則	僧正遍昭
日光本				
久能山本				
水戸本				
世良田本				
仙波本				
金沢本				
滝山本				

右

	⑨ 忠岑	⑧ 高光	⑦ 朝忠
日光本			
久能山本			
水戸本			
世良田本			
仙波本			
金沢本			
滝山本			

		⑫	⑪	⑩
		信明	重之	頼基
右	日光本			
	久能山本			
	水戸本			
	世良田本			
	仙波本			
	金沢本			
	滝山本			

右

	⑮ 元真	⑭ 元輔	⑬ 順
日光本			
久能山本			
水戸本			
世良田本			
仙波本			
金沢本			
滝山本			

右	→		
	⑬ 中務	⑭ 忠見	⑮ 仲文
日光本			
久能山本			
水戸本			
世良田本			
仙波本			
金沢本			
滝山本			